

---

# 碧の青春【改訂版】

遠野ましろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧の青春【改訂版】

### 【コード】

N0187Q

### 【作者名】

遠野ましろ

### 【あらすじ】

アムラーが世を席卷する1997年、日本の中心地から母の郷里へと追いやられた地味目な少女、待っていたのは超のつくド田舎とまさかの美少年しかも複数？ 胸焦がす恋情、一度っきりの青春。苦しくて切なくて流した涙も必ず糧となる日が来る。当時のサブカルネタもわんさか登場。頭っから書き直し中で現在(1)まで更新。( )のついた話が修正完了分、・(ハイフン)入りのが未完了分です。改訂前完結済みverはコチラから <http://nanos.jp/sunnysunday/novel/8/> 申し訳

ないことに亀更新です。

遠くに低い山々は連なり、生い茂る若葉にその地肌が隠れている。山の麓から一続きに田畑が広がり、一面、緑の絨毯を敷いたかの田園風景を成していた。何十キロと続く平地を、ひたすらに濃淡の緑が埋め尽くす。

電車に乗って一時間、延々とこの風景を眺めている。

風は、ない。田んぼの表面を波立たせるものは何もなく。

一枚の静止画のようにただそこに存在していた。

黄色味がかつた若緑の色は真夏ならではだろう、灼熱の太陽によって磨き抜かれた明度が、見る者の目に迫る。旅で来ていれば感動するのかもしれない。

頬杖をつく手のひらがぬるつく。頬から離すと、窓枠に預けていた右の肘が痛かった。顎の下を拭くと、手の甲は汗に濡れた。腕の外側は明るく照らされている。顔も明日には赤くなっている。カーテンもブラインドもないガラス窓を通して、直射日光を浴び続けているのだから。

それでも、私は思う。

日に焼けることなんてちっばけなことだ。

これからの生活に比べたら。

再び、頬杖をつく。それ以外にすることがない。例えば、本を読む気にもなれない。これからを空想する気分でもない。

レールは田畑の間を縫い走る。多少のカーブを交えつつも続く一本道。あてももない。この平坦な地は本当に、丸い地球の一部なのだろうか。坂など皆無だ。神奈川も奥地に入れば山は多いけれど、もつと丘陵がきつかった。

集落らしきものも、見当たらない。

異邦人の感覚に囚われる。

私はどこに、迷い込んでしまったのか。

飯にここが誰も住まぬ土地なのだと言われても私は信じるが、忘れた頃に日本家屋が現れる。いやに大きい。向こうで言う二、三軒分が一軒に相当しそうだ。遠目に見ても敷地面積が二百平米は超える。古き良き戦後映画に出てくるような木造の長屋で、縁側から続く和室には誰の姿もなかった。

それから少し過ぎて、田んぼの間を縫う畦道に、朱色のトラクターが置き忘れのように置かれていた。

きつと、空気は澄んでいることだろう。

車もない、歩く人もない。コンクリートで舗装された道路もなく、大地を足の裏で味わえて。

そつだ、自然は最高だ。

……と、人は言う。芸能人が田舎に泊まる番組は需要があつてか  
年中放映されている。一部の中高年サラリーマンは、日々靴の踵を減らしつつ、リタイア後に田舎に引っ込んでスローライフを送ることを夢に描くという。

されど、いざ農業をやってみると、上手くいかない熟年夫婦も。

熟年離婚自体も。元々住まわぬ、友人知人も居ない環境に馴染めず都会のマンションに舞い戻る夫婦も存在することを、忘れてはならない。

熟年、離婚。

タイムリーな単語に自嘲の笑みを漏らす。緑のスケッチブックには、輪郭すら掴めない自分の顔が薄く笑んでいる。

何が、可笑しいのか。

地の果てへと。この広大な緑の海へと、手放すためにやってきて。色んな、未来を。

東京に残っていたら手の中にあつたはずの全部を。

足元に置いたポストンバッグの中には、クラスメイトからの寄せ書きが入っている。写真付きの色紙だ。今という現実が待つことを知らない自分が、笑顔で写る。

せめて、高校は向こうで卒業したかった。

ため息をつくのは堪えた。ため息をつけば幸せが逃げていく……  
気休めであろうと守らなければ負けな気がした。

認めたくなかった。一体何に対して抗いたいのか掴み切れない、  
言い知れぬ焦燥が胸の内に込み上げる。ため息を深くこぼす自分の  
姿に対して、やっぱりね、と納得されるのも、哀れみの目を向けら  
れるのも、望んでいなかった。

網膜に刺さる外から頑なに視線を譲らないのは、私なりの強がり  
なのだと思う。

東京を離れて七時間。陽が沈むのが遅い真夏のこと、空は未だ明  
るい。新幹線と電車を乗り継ぎ、県内で最も栄えている畑中<sup>はたなか</sup>市まで  
来ると、今度は旅番組に登場しそうなこの二両ばかりの電車にまた  
も乗り換えて、北へ、北へと進む。天井から備え付けの錆びた扇風  
機が緩やかに風を送る程度の、素晴らしい冷房設備だ。座席の表地  
がベルベット素材なのも、体熱の放散を妨げてくれる。膝の裏の汗  
は薄手のスカートを通して確実に染み込んでいる。シャツワンピース  
の貼り付く背中、背もたれに預けずに過ごす。となると肘をつ  
く前傾となる。

乗客は、私達二人のみ。

海に突き出た半島の、先端へと向かう。

人の気配は遠のき、逆に緑の割合は増大する。無人島に向かうの  
でも、山奥に向かうはずでもなかったはずだ、私達は。

私は根負けした。あまりの眩しさに、捻っていた首を戻すと、一  
変した薄暗い車内のコントラストに一瞬目眩を覚える。目元を押さ  
えた。

幸い、私は着席しているから、目の前の隣人は本を読むことに没  
入しているから、この幼稚な強がり<sup>強がり</sup>を気付かれずに済んだ。

私は口を開く。

「あと、……どのくらいで着くの」

二両電車に乗って言葉を発した初めてだった。喉の奥が乾きに張  
り付いていて、うまく出せなかった。

おおよそ読書の抄らない環境にも関わらず、母は吉本ばななを読む。……キッチン。私の世代にこそ相応しいチョイスだ。よほど物語の世界に取り込まれていたのか、めくる手を止めるまでに間があった。

紺色のブラウスを着た母は、首筋を伝う汗の筋をそのままに、腕時計で時間を確かめると、なんてことのないように言う。

「一時間足らずね。もうすぐよ」

矛盾した二つのセンテンス。六十分弱のどこが「すぐ」なのだろう。

母は面を上げる。

改めて見ると、よく似ている。その丸顔も、年齢よりも必ず幼く見られる童顔も、みんな母譲りだ。実際の体重よりも太って思われるから、私は丸顔が嫌いだった。

実際に目に行っているのは、母の削げた頬だった。元々はふっくらしていたはずが、痩せた男の人みたいに。多忙が続いたせいだろう。厚めに塗ったファンデが汗に白浮きしている。

こうして向き合うことを避けていたのは相応しい理由がある。

ほぼ一ヶ月ぶりに向き合ってくれる娘に対して母は穏やかに目を細めるけれど、私の目は今度は、何本も刻まれた目尻の皺に引き寄せられる。

自分が老いた姿を見せつけられているようだった。

「そんなに嫌な顔しなくっても……」母は、微笑んだ。困ってる子どもを見るように。困っている自分を隠すかのように。「もう少しの辛抱よ」

「辛抱って、どのくらい？」

声が出る。母の上がっていた口の端が、わずかに強張る。

「戻ってもどうせ出戻りとか言われるだけでしょ。それに、……」私は窓を向き、口の中で呟いた。

「これから、ずっと我慢ってことでしょう」

母にはもう、見向きもしなかった。

ベルトコンベアーみたいに流れる映像の中に、東京と同じものを見つけれない。神奈川や千葉の田舎を走る電車でさえも、これよりも都会を提供してくれていた。

線路沿いにある、知らない、聞いたこともない看板が目につく。きりこ。ゆべし。みずもと。マルエー。……ゆべしは食べ物だったろうか。柚子の絵がある。

お神輿みたいなものが描かれた看板には、毛筆体で、  
『いらっしやい、能登へ』

出迎えはサイレントだった。

耳にはまだ、別れがこびりついている。

『元気でな』

父は、最後まで言葉少なだった。

JR町田駅のただ広い改札前にて。

私は振り向いたけれど、父の姿はもうそこにはなかった。人ごみの中に消えていた。消えて、見えなくなっていた。

期待もろとも塵芥と化した。

もし、泣いていてくれたりしたならば、今という未来は変わっていただろうか。

現実とは、物語ほどには上手く行かない。

二度と、声を聞くこともない。思えば、父と電話で会話をしたのも数えるほどだ。関わることもないのだろう。

自分と母が消えたあの広めの一軒家を頭に描いてみる。一人暮らしには寂しいかもしれない……けど、父は家に寄り付かない人だった。同じ市内で、両親と小さな商社を経営していて。手伝いから主導する形に変わったのは、私が生まれる以前だったという。帳簿とパソコンと向き合う人だった。口下手で冗談も言えない人で。私がかさかった頃は微笑みかけてくれた記憶もあるけれど、いつからか。こんな冷めた娘だからか。自発的に避けられるのを受け入れるように、父も私に接さなくなった。父親と仲が芳しくない思春期を

過ごすのは周りのみんなの話聞く限りはむしろ正常だけれど、私と父の間には何か……薄い、見えない壁のようなものがあって、上手く踏み込めなかった。

踏み込めないままに終わった。

決断の経緯は知らない。聞こうとも思わない。聞いた所で、何か抗える手腕を私は持たない。結末は変わらない。

離婚というエンドが待つ一大舞台において、私は主役ではない、されど動員される、三文役者以下なのだった。

もし、私が大人だったら。

父から母からも離れ、一人で働いて暮らしていけるのだったら考えたことはある。家を出てみるとか。

実際は、部屋に閉じこもるだけが私に出来るせいぜいだった。

私は勉強が好きだ。普通に、高校を卒業したい。学歴社会がどんなだかを何となくは知っている。中卒に厳しい。

どんな風が待つのかは分からない。向こうでは裕福な生活を送っていた。片親となり、これからが劣るのは訊くまでもない。

電車に乗せられて辿るレールの道筋、私の人生もきっと同じ。

もしかしたら、今までがそうであって、私が単に気付いていなかっただけなのかもしれない。終点も途中経過駅も知れない、一本道を進むだけの。

私は昔っから現実的な子だった。小学校の頃の夢はパン屋さんでもお嫁さんでもなく、跡継ぎ。祖父母の家に遊びに行っても、孫達を溺愛する祖父母に唯一可愛がられない。

みんなは、子どもらしいということがどんなだかを無意識に知っている。振る舞える。わざと困らせて怒らせたり、大泣きしてみたり、すがりついたりして。明るい笑い声を立てて、似た子同士でつるむ。

私は、違った。

一人で過ごす方が好きだった。読書が趣味。大人が望む行動がどんなだかを分かっていたし、反発したい気持ちもあった。やがては

反発も面倒になって静観しておく。

このように成長した子どもに対して、大人は失望を表す。

『子どもらしくないわね』

私は従う。抗いもせず。望むままに。

それが、私がこれから選ぶ、私の人生史上で最も『子どもらしい』ことなのだろう。

人々の意志のなき所に、運命は存在している。

当たり前のことを、こんな美しい緑を眺めながら思うことになるとはまさか、思わなかった。

固く目を閉ざしても、その色は消えやしなかった。

光が、飛んでくる。ちかちかと眩しい。黒い視界に赤、白の点が混ざりだす。なにか潮の香り。

いつの間に寝ていたのか。私は顔を左に傾けた。常に進行方向を向いて座るようにしている。私は乗り物酔いしやすい。

瞼を上げる。

長いトンネルを抜けるとそこは海だった。

右手が緑に侵食されているのは変わらない。逆側に道路が並走していて、その奥。ハンドル操作を誤れば車ごと落ちてしまいそうなガードレールのすぐ傍から、海。海が広がっていた。

誰か鏡でも嫌がらせて持っているのだろうか、健やかな空を乱反射する。私は瞬きをした。目が、良くなるかもしれない。アフリカの人の視力は5・0とか驚異的な数値らしいから。

裸眼で1・5あるから、別段良くなる必要もないのだけれど。

「あら。起きたんね」

未だ読書をしている母は、私に気付いた。

眠っていた訳ではないけども、頷く。

「ほんと、こっからもうすぐやから」

どうだろな、と思いつつ再び瞼を下ろす。今度は群青色が焼き付いた。

標準語を話す母の方言を、幼い頃以来に聞いた。

すぐと形容するには微妙な二十分後に、目的地に着く。降りたのは二人だけだった。乗客が私達だけなのだから当然だ。乗り込む人はなく、ホームは無人だ。

降り立つてすぐに頭の上を押さえた。熱い。虫眼鏡でも上にあるのか。天を仰いで後悔した。太陽をもちろに見た。眩しい。とんだ目攻めに熱攻めだ。屋根なしのホームなんて、帽子くらい持つてくれれば良かった。私は帽子がことごとく似合わない。

「あつついわねえ」

ハンカチで首元を拭く母の目の先には、水飲み台があった。ぎらついたシルバーの。あんなの、飲めたものじゃない。車両二つ乗り入れるのがやつとなじんまりとしたこのホーム全体が、直射日光の餌食となっている。私も急がないとバーベキューになりそうだ。

奥に今どき珍しい有人改札。改札上には建物と繋がる屋根があり、影の中から駅員がこつちを見ていた。

不公平な、と一瞬思っけれど考えを改めた。

駅員は、ご高齢だ。

私は歩くのが遅い。サンダルで来たのを後悔する。一步を進める度に、素足の指に熱気がまとわりつく。足元サウナだ。思い通りに進まないのだから蟻地獄にも等しい。

息が上がるのを感じつつも、ポケットから切符を出す。H九・八一〇……文字が滲んでいたし挙句端が折れていた。どうせ、手渡すだけだから構わないだろう。ピンポン鳴らして後ろに迷惑かけることも起こりえない。

人一人通れる程度の狭い改札に先に辿り着いていた母は、駅員と何か喋っていた。

切符を渡すと、値踏みするような目をよこす。

露骨な目。

好奇に満ちた目。

こんなにもじろじろと見られることは滅多にない。私の上から下

までを眺めると、ほおおー、とよく分からぬ感嘆の混ざったしゃがれた声を上げて二、三度頷く。金歯が覗いた。全体に歯は黄色い。差し歯で凌いでいるのだろう。

「この、小さなお嬢さんは？」

この、小さな、という連体詞と形容動詞が失礼に当たるとは、この図体の大きなご老人は生涯気づくまい。

「娘です」母は笑った。何故だか誇らしげに声を張り。笑顔を口に収めると、母は母の顔をして娘に命じた。「真咲、挨拶なさい」

「都倉、……真咲です」

ご老人に不敬を働く主義にはない。

頭を下げた私の耳に、がっはは、と豪快な笑いが飛び込む。

「わーっしも年とるもんやべのう。美雪ちゃんにくおんないっちゃけなお嬢さんがおるたあ」

帽子の鏝にかける手、腕も半袖のラインまで綺麗に日焼けしていて年寄り独特の染みが目立つ。上半身は汗だく。ワイシャツはシースルーと化し、ランニングが透けて見える。下はきつとステテコパンツ、帰宅したら山下清みたいな格好をしている。

私は訝しげな顔をしていたように思う。ときに、デリカシーのない人は他人の不快に鈍感だ。駅員は再度けたたましく笑うと、母に向き直り、諭す始末だった。

「新造しんぞうなら今日は店休みにしとっさけ、はよ帰ったれや」

余計なお世話だ。

喉元から出かかった声を押し込める。

母はありがとうとか何とか挨拶して頭を下げるけれど、得体のしれないむかつきが胃の中を蝕み始める。

どうしてあのご老人が祖父の店が閉まっていることを知っている。風が吹けば噂が流れるとでもいうのか？

娘？ そんなの見れば分かるじゃないか。どうせうちの事情も全部知っている。

ため息をつく。

田舎者の悪い部分を見た気がした。

駅を出て歩き始めても、あの粘っこい目線と無遠慮さが背に張り付いていた。

舞い上がる砂塵に目を庇う。

私たちを追い抜いた白い乗用車。東京の商店街であれば、あんなスピードは出せない。慎重に進むことを要される。

ただっ広い国道は、まるで無人島。歩くのは私と母だけだ。

個人経営の店が立ち並ぶ中を暫く歩き進むと、向こうからゆっくりとした歩調で老人が一人。知り合いらしく、長話に足止めを食う。手持無沙汰にその辺を眺めた。

反対側の歩道に制服が三人。見た目からして同じ高校生。

ダサイ。

真っ先に出た感想がそれだった。

ポロシャツの裾は出さずにイン、スカートは膝丈。ボタンを外さず着崩さず、染髪とは無縁な黒髪のおかっぱ。

つい先月まで着ていた制服を思い起こす。キャメルのブレザー、青と茶のチェックのプリーツスカート。丈は超ミニ。雑誌に載るほど人気だったあれに、転校した人間が身を通す機会は二度と訪れない。

洗練さから遠ざかった、田舎者の現実。

頭のとっぺんが焦げ付く感覚を味わいつつも、どこかが急速に冷えていく。

ここどこに、私の居場所があるというのだろう。

一本裏道に入ると白い看板が見えてきた。母の実家だ。幼い頃に来て以来で、記憶は浅い。

周辺同様、瓦屋根の小さな一戸建て。表には本日休業の札が貼られていた。

あの駅員の言っていた通りだ。

一瞥すると、母は家のわき道を通って切って裏手に回り、茶色いド

アを一気に開いた。インターホンも押さずに。

鍵のかからない不用心に呆れた。町田ならば考えられない。周辺には空き巣が増えてきていた。

「おかえり、美雪。真咲ちゃん」

割烹着の上背は手前にやや丸まり、髪を後ろに一つで結わいた祖母。頭一つ抜けたがつちりした体躯の祖父は、日焼けした顔に角刈りが映える、任侠映画に馴染みそうな風貌。

最後に会った時よりも白髪が増えた。年齢を重ねたのは確かだった。

「お父さんもお母さんも、お店休まなくってもよかったのに。ごめんなさいね」

母はこの先の人生で何度謝るのだろう。

「いいんよ、今日は暇なんやから。ともかく上がってや」

温和に祖母が答える一方、一言も発さぬ祖父。

「お邪魔します」

「……お邪魔します」

母に続き、足を踏み入れた。

これからはただいまでいいんよ。

祖母は微笑みながら招き入れる。

これから私が暮らすこととなる、古めかしい家へと。

踏み締める度に床が鳴る。全員に繰り返す、一つのリズム。それはこの家の年季を感じさせた。

廊下と同じ色をした天井。電球傘を見るのは久々に思った。黄ばんだ豆電球、傘は茶色で所々錆びている。

見上げているうちに目的地に着いたらしい。促され、囚人のようにぞろぞろと入った。

「まあまあ、とにかくかけなさい。疲れとるやろ」

ダイニングテーブルも使い込まれ、よく言えばアンティークか。何しろものはいよいよだ。

祖父は左、母は対面する右奥に進み、私は隣の下座を選んだ。

「うち、ジュースはあんま置いとらんでね。冷たい麦茶しかないんやけど、それでいいやろか」

「いいわよ、お母さん」

美雪、と祖母はたしなめる。「これからはお祖母ちゃんて呼ぶんやよ。真咲ちゃんがおるんやし」

廊下に消えると、言葉も消えた。

重たい沈黙が横たわる。かすかな呼吸音が部屋を満たす唯一。

と、白いものが視界の隅に動く。母の右でカーテンが揺れている。開いた窓で暑さは軽減され、さっきの電車よりかはまだ快適だ。

正面に戻ると、奥の擦りガラスで動くシルエット。台所に通じる小窓なのだろう。

祖母の影絵をぼんやり眺めていると、強面の祖父が口火を切った。

「これからどうするつもりや。生活は、仕事は、どうする」

「ここで働きながら暮らして行きます」

即答した割には弱々しい声。

「ばあさんから大体聞いとるが。真咲はどうする」

「緑川高校に通わせませす」

先程の制服に違いない。真面目な公立高校と聞いたから。

「真咲はそれでいいんか」

腕を組んだまま祖父はこちらに目を向けてくるが、

「いいも何も……」

そもそも私に選択の余地はない。

「十七年間都会に住んどつたもんが田舎に住むんはしんどいやろう。美雪、お前もや。ここにはなんもない」

父は、彼の両親が経営する小さな会社を手伝い、母は家を守るべく専業主婦をしていた。

「真咲は私と暮らしたいって」

父の血が薄かったのか、どちらかといえば母似の私を彼らは手元に残したからなかった。だから、

「そう言うしかなかったんやろうが」

声を荒げると小さくぼやいた。「親のエゴや」

私は黙す。

ここで嫌だと駄々を捏ねれば、あるいはお涙頂戴の感情論を吐けば事態が変わるとでもいうのか。

残念ながら私はそこまで子どもではない。

「お父さん、真咲の前でそんな話せんとして」

「真咲の前やからするんやぞ」

険悪な空気が広がりかけた所を、

「お祖父さん、そこまでにしといたって」

お盆を手にした祖母が制した。麦茶の入ったグラスが人数分。

「乗りもんばつか乗つとると、体しんどなるやる。知らんうちに喉も渴くもんなんよ」

手渡されるなり口を付ける。実際喉はからからだった。運ばれたばかりというのに周りは水滴だらけだ。

一気に飲み干すと、テーブルに空のグラスが三つ。

祖母もそれに気付いたのか、微笑みながら向かいにかけた。

「これからのことは、皆で考えていけばいいんよ。お祖父さんも、

最初から口づるさくせんと。歳なんやから、怒ると血圧あがってま  
うわ」

ふふふ、と笑顔向けられても、笑えない。祖父のいやに鋭い眼差  
し、迫力のある風貌。生ぬるい汗がつー、と背骨を伝う感觸。

「お父さん。ご迷惑をおかけします」

同じく笑わぬ母は深く頭を下げた。

「うむ。来たからにやあしっかり働け」

「ありがとう」

「な、真咲ちゃん。うちを案内したげるわ。美雪は久しぶりやけど  
分かつとるやる、うちんこと」

「当たり前やるが」

母も段々方言が混ざってきている。

「ほんなら、二階行くかね」と祖母は茶を飲み干した。「なんやら  
荷物がいつぱい来とつたし、上やっといたわ」

「お母さん、ありがとう」

「お祖父さんなあ。機嫌悪うみえるかもしらんけど、あんたら来る  
んずーっと楽しみにしとつてんよ。二十箱送ってきたん、みいんな  
一人で運んでんし」

眉間の皺を深める祖父。

「真咲ちゃんも、この人おっとりしい顔しとつけど、お祖父ちゃん  
つて呼んだらそーら喜ぶわ」

うつしっし、と齒茎を見せる祖母に母がようやく微笑む。「お母  
さんたら」

「ばあさんは喋りすぎや。はよ行ってこい」

怒ったような調子はいつものことなのだろう。

はいはい、と軽くいなして祖母は腰を上げた。

一度は夢見たことがある。

広々とした空間。

淡いブルーの壁紙に白木の床。

天蓋付きのふかふかなベッド。

全て白で統一された家具、レースのカーテンが揺らめく出窓。

テレビで見たヨーロッパの優雅な洋室。

こんな部屋に住んでみたいと。

だが現実には。

七畳の和室。畳も砂壁もくすんだ抹茶。障子窓の和紙は日に焼け、所々橙に変色。学習机や炬燵等の家具が目一杯置かれ、段ボールが残る隙間に無理に積み上げられた風情。長く使われなかったのか、部屋中埃っぽい。

溜め息が出る。

「お母さん。これじゃ布団も敷けんやろ。どうやって寝るが」

この有様に、責める口調となる母。

「悪かったねえ。片付けとる暇なくなつてな。要らん家具は、出て正面に入れといて。あそこも物置になつとるし」

「お母さん」と言葉を継ごうとするも、

「これからご飯にするさけ、終わったら手伝うわ。それまで二人で進めとつて」

言うだけ言って去っていった。

雑然の中に残され愕然とする。

「お母さん……」

情けないくらいに弱々しい声が出る。

「なあに、真咲」

「ほんとにここです？」

「うん？」

柔らかに言われても、

「これからずっと、ここに住むってこと」

ちっとも笑えない。

「そっやねえ。まずは部屋片付けんと。お母さんも手伝うから」と  
段ボール一つに手を触れる。

だが私は動けない。

全てがあまりにも違い過ぎる。

整理出来ない気持ち置いてきぼりにして、期待も何も無い。不安だらけの生活が始まった。

転入の挨拶に行くと言っていた。奇しくも、終戦記念日の前日。

「ごめんね。昨日のうちに宮本先生には電話しといたから」

詫びる母。一緒に行く予定が、昨日急に団体予約が入ったため、一度私一人で緑川高校に向かう運びとなった。

場所は聞いた通り。

駅に着くとバスロータリーとの間を道なりに進み、ローカルな銀行の角を曲がると直ぐそこだ。

薄灰色の塀の内側の、くすんだ灰色の校舎。はっきり言ってボロボロ。流石は公立なだけあって、お金をかけてない。私に通っていた私立より悲しいほど見劣りする。

生徒用の玄関からは何となしに気が進まず、そこを過ぎて職員玄関と思われる所から入り、下駄箱から茶色いスリッパを出して履くも。

職員室に一人で辿り着けるのだろうか。

極度の方向音痴なので不安を覚える。

幸い、真正面のプレートが場所を示し、右へ進むと即突き当たった。

「失礼します」

整然と並ぶ机の列。本やプリントが山積みで、綺麗好きの人は少ないと見た。

他にも数人いるようだが、とりあえずは入り口近い先生に声をかけてみる。

「あの、宮本先生は……」

革のソファに座るでっぷりとした教師。背後の仕切り戸にはジャケットがかかったハンガー。扇子で暑そうに自身をばたばた扇ぎながら新聞を読んでいた彼は、けだるそうに顔を上げた。

「ん、宮本先生か。ああ、……おらんようやなあ」少し腰を浮かせ

て見回すと、またソファに体を沈めた。「多分生物室やる」

「そうですか。あの、生物室はどちらでしょうか」

訝<sup>いぶか</sup>しむ目が向けられる。

「どちらさん？」

「九月からこちらに転校する、都倉真咲と言います」

私の上から下までを眺めてやや驚いたのち、そうやったな、と納得したように呟いた。

町の人口は二万人以下。全校生徒は約四二〇人。この小さなコミユニティでは、よそ者である私の存在など瞬く間に広まっているはずだ。

だが、顔までは知られていないらしい。何しろ来てまだ五日目だ。「生物室なら、こっから渡り廊下で向こうの校舎行って、三階の奥やぞ」

礼を伝えて職員室を辞す。

無事に辿り着けるのだろうか。今の説明では心許ない。

不安を感じつつも歩を進めると、左手に持っていた袋が角にぶつかり、がさつと音を立てた。

忘れてた。

鳩サブレを先生方に渡すようにと言付かっていた。

慌てて走り戻り、再度ドアノブに手をかけようとすると、そこからの動きは全てスローモーションだった。

触れるより先に開いたドア。

空を掴み、つんのめると視界が白く塗り潰される。

勢い止まらず、衝突。

鼻を思い切りぶつけ、反動で後ろによるめく。

後ろ手で堪えようとするが、腰をしたたかに打った。

「あいたた……」

使い古された白と青のゴムシューズ。紺のコットンパンツに、ぶつかった相手である白のポロシャツ。

何に気もなしに上に目を向けた瞬間、

息が止まるかと思った。

白い肌に端正な顔。不揃いな前髪が銀縁眼鏡にかかり、レンズの向こうの漆黒の瞳。不快気に眉を歪めていても、合わせただけで心臓が鐘を速める。こんな綺麗な男の人、見たことがない。

『あ』の形に小さく開いた唇を凝視したまま固まった。正確には、見惚れた。

と、その口が動く。

「なんだ、中学生か？」

「ちゅ、中学生って」

裾を払いながら身を起こす。制服は間に合わなかった。私服のシヤツワンピースが子どもっぽいのだろうか。

少し苛立ちを覚えながらも向き合つと、顎の角度がえらいことになった。

祖父より背が高い。

「違うのか」

涼やかに通る低音にも、一瞬間き惚れる。

「違います」

だが言っていることは失礼だ。

悪い悪くないに関わらず、ぶつかったら詫びるのが世の常、人の常識。

「ちよっと……」

声を尖らせると、彼の背後から別の顔が覗く。

これまた。

明るい茶髪が目に入る。次に、びっくりするくらいに大きな目。

琥珀色の瞳。精巧に作られた西洋人形みたい。髪形がショートでなければ完璧。

私と目を合わせると、モデルのように口角を弓なりに上げて、

「鼻、真っ赤になってるけどキミ、このうどの大木とぶつかった？」

驚いた。男の子だ。喉には確かに喉仏が。

「うどは余計だ」

それでも、黒髪の低音と比べると一オクターブほど差がある。

「マキ。無駄にでかいんだから、ちゃんと前見なよ」

と完全に職員室から体を出した。二人は同じ制服。並ぶと顔半分ほどの身長差。

「無駄とはなんだ。だいたい、前も見ねえで突っ込んできたのはこの中学生だぞ」

「中学生……うにゃ、小学生？」

「知るか」

「かわいそうに。緑高じよこに遊びに来たばかりにね」

彼はこちらを向いてふつと目を細めた。

「ごめんね、怖がらせちゃって。キミ、お兄さんかお姉さんに会いに来たんでしょ。よかったら案内したげるよ」

「知ってんのか。誰の妹だ」

うづん、と言いながら屈託なく笑いかける。「いいよねー、兄妹って。僕もさ、兄妹っていうか妹が欲しかったなあ」

「妹がいたらロリコンだったろうがな」

「ロリコンじゃなくてシスコンね。マキって時々単語に弱いよね。」

もし仮にいたらさあ、美少女姉妹とか言われんだよ。それも嫌だ」

「普通自分で言わねえよ、美少女って」

「たまに間違われるからね。いまだに」

茶髪がひたすら笑顔に対し、黒髪は仏頂面。けど、意外にもテンポの速い会話が成立している。

「女装似合うんじゃないかねえのか。学祭のネタとして一つどうだ」

「勘弁してよ」

「お前ら。入り口でなに騒いどる」

先ほどの小太り先生がやってきた。私の顔を見てああ、と呟き、

「丁度よかった。こちらは、九月から二年四組に転入する都倉真咲さんだ。お前ら一緒のクラスなんやから、すっかり面倒見るんやぞ」

黒髪はやや右眉を上げた程度でさほど表情は変わらないが、茶髪はあんぐりと口を大きく開いた。

言葉を失った一同に対し、

「都倉真咲です。よろしくお願いします」

こんな笑顔が出るのかと、自分でも恐ろしくなるくらいの営業スマイルで、私はニッコリと微笑んだ。

「まさか、ウチの生徒だったとはね」

灰色の階段を茶髪の彼が上り、隣歩く黒髪の離れて後ろに続いた。

「いや、予想はついてた」

「って、おいおい。」

「嘘だろ。なんで黙ってたんだよ」

「お前で遊んだ」

お前っていうより、私も含めてなんじゃない。

「ひつどいなあ。最近、どんどん性格悪くなってるない？」

「俺もそう思う」

「自分で認めちゃってどうすんだよ」

「うるせえ」

「うるさいって」眉を歪め笑う。「まあ、マキは静か過ぎんだよ。

寡黙なのがマキのウリなんだけどさあ」

「売った覚えはねえ」

「そういう意味じゃなくてさ」

「あのー……」

ぱっと二人が振り向く。

茶髪は瞳を輝かせ、黒髪は面倒くさそうに片眉をひそめて。

「名前、聞いてもいいですか」

このままじゃ、私の中で永遠に黒髪と茶髪になってしまう。

踊り場に着いた所で、茶髪は困ったように頭をかいた。

「ごめんね。紹介するのが遅れちゃって。僕は桜井和貴<sup>さくらい かずき</sup>。彼は、」

「<sup>まきた かずおみ</sup> 蒔田一臣」

「蒔田のことは、マキって呼んでんだ」

全く目を合わさない黒髪に対し、真っ直ぐ人の目を見て話す茶髪。そして、この、整った顔立ち。

いたたまれず顔を逸らすと、この辺り、いやに人が通らないことに気が付いた。

まさか、学校内も過疎とか言わないでくれ。

思えば、二年生の彼らは夏休みの校舎には不似合いです、

「二人は、部活が何かで来てるの？」

ふと浮かんだ疑問を口にしただけだった。

だが、黒髪の顔に瞬時影がよぎった。

両親の顔色ばかり窺って生きてきた私には、それがまともに見えてしまった。

「あ……図書室でべんきょー」

段に足をかける茶髪が後ろ見で微笑むと、可愛らしい八重歯が覗いた。

「あれが、生物室」

黒髪の彼が長い廊下の奥を指差す。

この人は、あんまり感情を込めない一本調子の話し方をしている。見た目通りクールな人なのだろうか。

「みやもっちゃん、元気してるかな。僕たちも行ってみようぜえっ」  
言うや否や、走り出す。

足が、速い。

物凄く速い。

蹴り返しが綺麗で、紺のゴム底が繰り返し見えた。

釣られて走り出しなどしなかった。

黒髪も続かず、二人取り残される。

何だか、気まずい。

「……出身は」

ぼそつと、声。

聞き違いと思ったが、唇は薄く開いている。

「えっと。わ、私の？」

前方を見据えたまま無言で頷くも、

「どうして、この人じゃないって分かったの」

知らないのだろうか。私の親が離婚して都落ちしたこと。光る君  
さながらに、片田舎へと飛ばされたということ。

源氏は再度都に戻り栄華を極めるが、私が東京に戻り住むことは  
起こり得ない。片親の郷里に身を寄せるのが金銭的にどういう意味  
を持つのか、多少は分かっているつもりだ。

「訛ってねえから」

首が少し痛くなる角度が必要。

それでも、涼しげな横顔から目が離せない。

「俺も生まれはこっちじゃねえ」

「そうなんだ」

「和貴もだ。あいつは、無理に標準語を喋ろうとはしてるんだが、  
じいさんは俺にも分からねえくらいの方言らしい。移りたくねえっ  
てしよっちゆうぼやいてやがる」

「ふふっ」思わず笑えた。

「だが、じいちゃん子でな。たまに真似しやがる」

「どっちなよ」

「両刀使いなんだ。器用な奴だよ」

瞬間湯沸かし器のように頭が沸騰した。

「ちよっとそれはあの、外では言わない方が」

「何をだ」

「……その」会ったばかりの人に説明しろと。無理。

「あいつには親がいねえんだ」

流れを無視して黒髪は呟いた。

「仲がいいんだね」

コンパスの違いか、いつの間に距離の開いた彼。ぴたりと歩を止  
め、

「何故、そう、くる」

よほど驚いたのか、白眼を大きくしてこちらをガン見してくる。

「何故って言われても」視線が痛い。「寡黙そうなのに、彼の話に

なると饒舌だから。きつと、優しい人なんだろうね」

「俺がか？」

「ますますきよとんとするその表情に、

「違う、彼の方」

込み上げる笑いを隠しつつ、先を行く茶髪を指す。

二人ともなにしてんの、僕三往復しちゃうよー。

当の本人はぶんぶん両手を振ってくる。既に生物室前に着き退屈なご様子。

……可愛いかも。

「高校からの付き合いなんだが」

歩き出す彼の速足に、内心焦って足を動かす。

「もつと長い付き合いに見える。何となく」

「そうか」

「私も父親はいないから、人前で明るく振舞う気持ちはよく分かる」

「お前は母親と住んでんのか」

「母と、母方の祖父母と」

「そうか」

この人、可哀想という顔はしないんだ。

眉一つ動かさない彼に、何だかほつとした。

「人からいちいち可哀想って見られるの、嫌いなんだよね。中途半端に同情されるのが。彼も同じかもしれないと思って。だから、そういう話された時は違う反応するようにしてる。」

確かに不幸な話かもしれないけれど、何か彼のいい性格（しょうご）を形どつ

てるなら、それは不幸なことじゃない」

「理屈くせえやつだな。読書好きなのか」

仏頂面でチラリ見てくる。

「うん。最近読んだのはエリクソンの『アイデンティティ』。ここの図書室にはあんまり期待してないけどね」

本の有り余る町田の巨大な図書館を頭に思い浮かべた。まさに本の森。何でも揃う。

「そう言うなよ、サイコ野郎が」  
ムスツと睨もうとしたのに、目の前の彼は片眉を上げてククツと笑う。

この人。

笑うとこんな顔、するんだ。

不覚にも見とれてしまった。

もう、遅いって！ 三往復ほんとにしちゃうよ。

茶髪のBGMが遠く聞こえた。

「担任の宮本です。よろしく」

白衣を着た眼鏡のおじさんと対峙している。

「都倉です。よろしくお願いします」

引越してから何度目の挨拶だろう。母の旧姓、つまりは新しい苗字にもすっかり慣れてしまった。

「なんかあつたら彼らに聞いてな」

「みやもっちゃん、任せといて」胸を張るも、やや息を切らす彼。

「子守は一人で十分なんだが」左からは大きな嘆息。

「失礼な人がいるんですがどうにかありませんか」私は悲しくなる。はは、と宮本先生は口許を緩めた。

「桜井も蒔田も、面倒見はいいぞ」

七三分けで一見ピリピリしたサラリーマン。でも見た目よりは優しそう。

「特に子どもものな」

一同爆笑。

前言撤回。

腹を立てるのは私だけだ。続く説明を聞き去ろうとすると、

「あ」

また忘れそうになった。左手の荷物を。

「宮本先生。これ、うちの母からです。よろしければ召し上がって下さい」

バウムクーヘン入りの小さな缶を手渡した。

サブレはおそらくさっきの衝突で割れてしまい、この一つが無事。分解した鳩さんは暫く私のおやつとなるだろう。

「氣い遣わなくていいんだぞ。やけど、ありがとくなあ。お母さんにもお礼伝えといてな」

「はい」

母の名を口にしても表情を曇らせない、屈託なく笑う大人を初めて目にした。

宮本先生の笑顔は強く印象として残った。

「で、こつちが職員玄関。出て左が運動場」

先生から案内を言いつかつた二人は、校内くまなく回ってくれた。二人といっても、黒髪は先頭をきって進む割には殆ど口を開かず、説明は殆どが茶髪が受け持った。

「俺、寄るところあつから。じゃ」

あつさりと、来た道に戻る背中。

「あつ……」

マキ、明日も学校来なよ。

遅刻すんなよー。

僕は図書室におるからね。

大げさに手を振るのは、どうやらこの人の癖のようだ。ドラマの見送りシーンじゃあるまいし。

……お礼を言いたかつたんだけど。ま、いつか。

一通り終わると振り向いて、

「帰る？」

玄関先から照る夕陽が髪をオレンジに輝かせ、きらきら眩しさに目を逸らす。「……私は」顔が整い過ぎて苦手だ。

「送ってく」

「どうして」

「理由なんかないよ」

「理由はあつた方がいいよ。何に対しても」

おちゃらけてばかりが真顔に変わり、

「キミともう少し一緒にいたいから」

私は固まった。

「なーんてね？」

ペロリと赤い舌を出す。

「僕も帰るから。ちょっと待ってて」  
断る前に走り出し、あつという間に見えなくなる。  
眩しくて忙しないお節介な子だ。

夕焼けが町全体を橙に染め上げる。

歩道は無人。たまに通る軽トラックがまさに田舎を象徴。

真夏の明るい夕暮れは、真つ暗な夜とネオン、そして人混みの傍観を好む私にとって憂鬱以外の何ものでもなかった。

少し先に行くポロシャツも、夕陽の色をそのままに映し出す。

初めて緑川に来た日も、同じように母の背を追った。あの時は自分がどうなっていくのかが分からず、ただ不安だった。

今はどうかといえば、

『そう言うなよ、サイコ野郎が』

……なっ。

何で彼の顔が。

咄嗟に首を振った。

「どしたの」

吹きかかる息。現実には茶髪のごアツプ。鼻と鼻とが触れそうな近さに、

「うおわあっ」

後ずさると何かに足首を捕らわれ、

転ぶ。

咄嗟に目を瞑った。

「あ………れ？」

予測した固さと冷たさはやって来ず、代わりに温かく包まれる感触に救われた。

がっちりと肩を掴む手。

私の知る種の女の子の手ではなく、骨っぽくて少し大きくて。背中に逆の手が回され、触れられる所がジンジン熱を持つ。

これってほぼ、抱き締められてるんじや。

顔を上げると顔が劇的に近く、頭のとっぺんからつま先まで真っ赤に染まるのが分かった。

「だいじょーぶ？」

「へ、平気」声が上擦る。

「難しい顔したと思ったたらニヤけるし、首振ったと思ったたら赤くなるし。まったく、忙しい子だね」

ニヤけてたのかよ。

自分が恥ずかしくなる。

「真咲さんてホント面白いね」

私のうんざりした表情が面白かったのか、視線が絡むと笑みが強まった。

「別に。あ、もう家そこだから」

建物の間から白い看板が目に入った。

「よかつたら明日も来なよ」

「学校に？」

「そっ」

「何で」

「理由を聞くのが好きだねキミは。宿題出たんでしょ」

先ほど宮本先生から分厚い冊子を沢山受け取った。見ていたらしい。

「先生は全部終わらせなくてもいいって」

苦笑い交じりでこぼすと、口をすぼめ、

「最初からそんなんでどうすんの。何事も最初が肝心だよ？」

この人の方こそ、表情を目まぐるしく変化させる。夕陽を背負い、向日葵のように髪をそして彼自身をいくらかでも輝かせながら。

「僕は九時くらいに図書室来とるから、真咲さんもおいで。入って一番奥の席におるから」

「いやいや結構です。」

そう言おうと思ったのに、「じゃあねー」と瞬く間に走り去ってしまった。

参ったなあ……。  
残されて頭をかく他なかった。

自分でも嫌になる。

この、人見知りで八方美人な性格。

茶髪の彼から声をかけられても、おいそれと動くことが出来ない。どんな人がよく知らないし。変な人かもしれないし。

神奈川の高校でも愛想はそれなりで、表面上の付き合いばかりをしていた。

電話をかけ合う友達はいない。来たばかりの田舎にも不在。まともを知る人といえ、母と祖父母くらいのもので。

私が十六を過ぎたら両親が離婚するというのは、生まれてほどなくして決められた。当然弟や妹はいない。

つまりは家の中にしか、ない。

そんな訳で、水を得た魚のように働く母とは対照的に、一人部屋に閉じ籠る暗い夏休みを送っていた。

やがて、緑川高校を訪ねた日から一週間が過ぎた。

「外食する人多くてこっちは大変なんよ」母は連日ばやいていた。

お盆から月末にかけ、店は猫の手も借りたい繁忙期を迎える。普段はこの町に住まない人たちが一斉に帰省をするからだ。

母と祖父母は私に手伝いに入るようには言わなかった。ピーク時には知り合いが来るらしく、ロクに料理も出来ない私がうるついても何の役にも立たず、実際台所に入ろうとすると、祖父に邪魔だと言って追い払われる。

居間には、ミニ冷蔵庫と小さな食器棚が買い足された。私がいっても麦茶やジュースを飲めるように。

蝉が忙しくなく鳴く夏の午後。数学の宿題帳を開き、持ち込んだ冷たい麦茶で喉を潤していると、

「真咲！。お友達が来てるわよー」  
階下から母の大声。心当たりのない私は茶を吹いた。

……友達？

眉間に皺が寄るのを感じつつ一階に降りると、

「こんにちは」

玄関先には、あの茶髪の彼が立っていた。

制服じゃなくて私服姿。襟を立てたシャツにカーゴパンツ、足元は迷彩柄のコンバース風のスニーカー。ソフトミリタリーな服装も可愛らしい彼にはよく似合う。開いたままの玄関から日差しを受け、髪は瞬くように煌めいていた。

私が近付くと母は道を空ける。人二人ろくに並び立てない、狭い玄関。

「久しぶりだね、真咲さん。元気してた？」

「えっと、……誰だっけ」口から出た言葉が何故かそれだった。

彼は大きく肩を落としてこぼす。「……この前学校で会ったじゃん。桜井和貴だよ」

「まー、こんなのはほつといて」

ひよい、と見知らぬ女の子が顔を出し、入れ違いに私の正面に立つと、

新しい風が吹き込んだ気がした。

風もないのに艶やかな黒髪がなびく。茶髪の彼同様、顔の全てのパーツが大きく整っていて、太陽を存分に受けて育ったのだろう、肌は健康的な小麦色。厚めの前髪の下には大きな黒い瞳が輝き、私に対する無邪気な好意が見て取れた。

「あたしは宮沢紗優<sup>みやざわ さゆ</sup>。よろしくね」

幅広の二重とアーモンド形のややつり上がった猫目が印象的。顔立ちの整った華やかな笑顔と共に手を差し出され、

「……よろしく」

何だか薔薇が香る。凄くいい香り。

握手をしたのはいつが最後だったろう。くらくらした頭では思い出せなかった。

「玄関じゃあなんですし、上がってって下さい」

「いえ、お母さんお構いなく。今日は、真咲さんにこのへんを案内したげようと思って来たんです」

振り返ると母の驚いた表情。同感だ。

外に出たのは学校に行った一度きりで、友達など存在するとは思わない。

「じゃー、行こっか真咲」

「えっと、」

有無を許さぬ美少女の微笑み。

「お母さん。……行つてきます」

以外の選択肢はなさそうだった。

一旦部屋に戻り、茶色い皮のミニショルダーを手に階段を駆け下りると、「日付が変わる頃には帰るのよ」とおこづかいをくれる母。腕時計は午後の三時を過ぎた所だ。一体何時間遊ぶと思っているんだらう。

美男美女のお二人に再度対面すると、身なりを後悔。

白のコットン素材のノースリのワンピース。着倒してヨレヨレだ。着替える暇もなかった。

邪魔な前髪はちょんまげ、顔はすっぴん。茶色いビルケン・シュトゥックのサンダルをつっかけて外に出た。

否。

二人ではなかった。

「おわっ」

扉の裏に隠れた人影が。

黒髪の、彼がいた。

締まる扉。

その影からはつきりと姿を現す存在。

まさか、この人が来ているとは思わなかった。

バーバリーの黒シャツに、タイトなブラックジーンズ。薄闇の中で、シャツの開いた胸元にこついアクセが鈍く光る。

全身黒。

スタイルのよさと取っつきにくさとが如実に現れていて、凄く似合っていると思った。

「……」

「……」

レンズに映る、惚けた自分。

漆黒の色、憂いを帯びたその瞳の奥。

吸い込まれそうに、なる。

「……」

「……」

沈黙が続くと、

「……ういっす」

背を向けられた。

私たちの様子を見守ってか、ガクリと肩を落とす茶髪。

やっと出たんがそれなん、と苦笑いする黒髪の彼女。

一連を無視して歩き出す黒髪の彼。

あの速足を思い出し、置いてかれぬよう私は続いた。

\* \* \*

「あたしのことは紗優って呼んで」

「あ。紗優は僕の幼馴染みで。同じ二年だけど一組なんだ」

にこやかな茶髪と並んで歩くと、身長は若干低い程度。一六〇少し、だろつか。

「僕とばっかつるんどって。女の子の友達いないから仲良くしたげて」

これには、ひどい、と頬を膨らましつつも、

「でもねえ。和貴とつき合っとする？ってよく聞かれるんよ。一緒におるからかなあー」

方言にはまだ慣れない。戸惑いつつも出た言葉は、

「……違っの？」

紗優はますます膨れる。

「ちーがーう。あたしは付き合っとする人が」

「別れたばっかなんだって」歌うような茶髪の声色。

「そうなんよ。……って言わんでもいいやろ。まだ傷口が癒えとらんのに、なんでわざわざ触れるん」

「話振ったのは紗優だよ」

「だいたい、和貴みたいに彼女もロクにおらん奴に言われたないわ」

「僕、結構人気あるんですけど」

「男っていうよりマスコットみたたく思われとるんよ。知らんの」

「知らない」

「かっこいいーって言われるより、かーわいいーって言われる方が多いやろ」

「……」

否定しないんだ。

仲がよさげな紗優と茶髪くん。会話を聞きながら国道を歩く。

暫く歩き続けた所で、海沿いの道が開けた。

すぐそこの海は太陽のまっさらな光を纏い、海面は白く煌めく。海よりも青く澄んだ空。はるか遠いカモメを追うと、

視界に入るのは、黒髪の彼。

私たちから離れて立ち、茫と海を眺めている様子。

「もしかして、惚れた？」

ひょい、と顔を覗き込む茶髪の美形。

近い、近いって！

「な、何言ってるの」

間近に見ると、小顔なのに顔のパーツが一つ一つ大きいことにも驚く。

「真咲さんは、彼氏いないよね」

「いないけど、それがどうかしたの」

それを聞いた途端、真顔に切り替わる。

「ちようどいいかもしれないなあ」

ニカツと笑う視線を追うと、

「うりゃあー」

紗優はいつの間にか黒髪の彼の傍に立ち。

体を宙に浮かせ。

跳び蹴りを食らわす瞬間を目撃する。

右足が脇腹にクリーンヒット。

……

あ、倒れた。

「だ、大丈夫？」

慌てて彼らに駆け寄った。

先に腰を上げる紗優の背中。ずれた眼鏡をかけ直す彼からは、  
「てめ、何しやがる」

青白い怒りの炎が立ちのぼっているように思えた。

「こうでもせんと、起きんやろ」

「俺なら起きているが」

「たましいが抜けとる」

スカート裾を手ではぱっと払う彼女。不快感露わに体を起こそうとすると、右足の膝がガクリと揺れ、

「あ」

差し伸べられた手を借りず、左足でぐっと堪え、自力で立ち上がった。

「気を遣ってくれえなら乱暴すんじゃねえ」

「……ごめん」

「まあまあ。紗優はマキに構って欲しかったんだよ」

茶髪という援軍を得てか、詫びるように泳いだ目線がキツと強気に戻る。

「そつやよ。蒔田はぼけーっとし過ぎやあって。年寄りやないんやし。なに見とったん」

「カモメ」

私と同じだ。

カモメ？ と大きな目をぱちくりさせると、

「文句あつか」

「手の届かない鳥より、目の前の僕たちを見なよ」

苦笑交じりで抱きに入られた手を払い、こちらに目を向けてくる。漆黒の瞳と視線が絡まったと思えたのはごく一瞬で、私の姿など透けているかのように遠くを見やった。

「向こうで祭がある」

顎をしゃくつた先は、海水浴場だろうか。どこまでも続く海と砂浜。手前にはコンクリートの駐車場が建つ。

「……祭？」

「ああ。神輿みこしは見たことあるか」

「テレビでなら」

「ほんもの見たことないん」語尾を上げらせる紗優。素足で飛び蹴りなんてしたものだから、膝頭が擦り切れている。もっとも、本人は気にしてなさそうだが。

「あたしらは絶対見に行くんよ。夏はそれしかないし」

「真夏の大事なイベントだよね」

「そうそう」

「だから。真咲さんにも見てもらおうと思って」

ウインクされた瞬間、どきん、と鼓動が大きく跳ね上がった。

「時間が早いからなにも出てないしけど、あっちの海、行ってみようか」

日差しを受けた眩しい笑顔に、どきどきする胸を押さえつつも私は頷いた。

日本海の風は強く吹き荒れ、波は荒いと聞く。だが、目前の群青色をした海は、時折波音を響かせながらも静かに佇む。

泳ぐ姿はない。岸から離れヨットが三、四艘。

波際には茶髪くんがひた走る。砂だらけになるのも構わず。

対して、流木に腰かける黒髪の背中。

砂浜に接すコンクリートの階段は、国道隣する歩道へと続く。私と紗優は段の途中に座り、海を眺めていた。江ノ島にもこんな白い階段があつたな、と思う。

「泳げるんはお盆までなんよ。下旬入るとくらげが出てしもうて」

この町は、冬は極寒の地となると聞くが、真夏の容赦ない日差しが照りつける。

「そうなんだ。くらげなんて見たことないな」

厳しい太陽とはうって変わった、穏やかな眼差しを注ぐと、

「あたしもないけどさー。刺されたらすっごく痛いよ。泳げなくなつて、祭りも終わるとあー、夏が終わるっていつつも思う。町中静かになつて急に寂しくなる」

「そっか。残るは宿題だけつてどこか」

「よう分かつとるね。その通りやよ」

体育座りで膝頭に顎を預けていた彼女は、ふと顔を上げ、

「ね。聞いてもいい？」

黒目がちな目に頷いた。ふっくらとした涙道は芸能人のようで、強運の持ち主であることも示している。

「東京つてどんなところなん」

「どつって、全然違うよ。中にはこういう所もあるけど」

思い浮かべた江ノ島は、ここより大幅に都会だ。

対してこの町は漁村といった様相で、めばしい建物も高層ビルも

見当たらない。

「それに、あんまり出歩いてないから分からないよ、この辺のこと」

「そっか。でも、うちらがついとるからね。安心して」

「えええ？ どういうこと」

子どものように波とたわむれる姿に視線を戻し、

「和貴もさあ、親がおらんの」

「うん。聞いている」

何の気もなしに、形のいい唇の動きを見つめると、

「小学校三年やったな。両親を事故で亡くして」

まさか。

「それで和貴は一人、越してきたんよ。元々は愛知におってん」

……事故だとは思わなかった。

「母方のおじいちゃんか近所に住んどって。昔から知っとるんやけど、あいつ。全然こつちに馴染めなくて」

表情曇らせた私に氣遣ってか、わざと彼女は明るく語っているように思えた。

「そんな感じはしないけどね。人懐っこそうだし」

「やる？ 今はね。けどな、小学校ん時なんてみーんなガキやる。

名古屋弁か分からんけど喋り違うし、髪茶色くて体小さいし。男子から、女みたいな奴とか、外人とかゆわれていじめられとってん」

「髪って、……嘘。地毛なの？」

驚いた。

私もかなり茶色い方だが、その数段上に行く、金に近い茶髪。てつきり染めていると思っていた。

目を丸くした反応を紗優は愉快気に笑う。風に舞い上がる髪を押さえつつ。

また、彼女に見惚れてしまった。

「あれで純日本人なんよ。中学入ると、吹っ切れたんかヤケになっ  
たんか、とっかえひっかえ女と遊びまくってな」

「うっそ」

可愛らしい容貌からは想像もつかない。

「ホントホント。やし、誰かから昔のネタ聞いても引かんといてね」

「はあ……」

「高校入るとさすがに飽きたとか言っつつたけど」

「飽きるって」信じられない。

「昨日、うちに和貴が来て」と視線を移した先には、黒髪の彼を引つ張り込む茶髪くん。

子どもが父親を構うような愛らしい光景、と思いきや、黒髪の彼が海水を思い切りぶっかけた。

手加減というものを知らないのか。駿足で避けたものの、金に近い前髪がへたっていた。

私が黒髪に呆れる一方、紗優は表情を緩め、

「玄関でさーゆーって叫ぶんよ。なにになんて聞いてたら『明日昼に来るから予定空けといてー』ってゆって帰ってた。意味わからんやろ。んで今日は、蒔田連れて来て、そっから真咲んちに行ったんよ」

「そう、……だったんだ」

「多分和貴はなあ、昔の自分思い出したんよ。やから真咲のことが気になってん。来るときもずっと言っとったよ。僕が変なことゆったから引かれたかもとかなーんかごっちゃごちゃ」

小学生だとか言ったことね。

睨み付けてから隣見ると、

大切な人を愛しむような横顔。

何だか、心の真ん中が温かくなる。

殻に閉じこもり、トゲトゲしていた私の心。

この町に来て初めて、解放された気がする。

「和貴はさー、あたしも蒔田のことにも気にしすぎなんよ。一見のほんしとるけど全然、氣い遣い」

「付き合っちゃえばいいのに」

冷やかしのつもりで言ってみると、

「それは、ない」

即答だった。

「どうして」

「近すぎるんよ。男としては見られん。好きとかつき合いたいとか

全く思わんし。あたし、弟おるんやけどそんな感じやね。

二十世紀の終わり、全世界でたった二人になっても、和貴とだけは寝ん自信あるわ」

苦笑いする他なかった。

どこまで可愛くて中性的な小動物キャラなのか。

「彼ちよつと、猫か子リスに似てるよね」

「そつやねえ。目が大きくてくりくりしとるし。蒔田はなんやと思う」

「オランウータンかな。見た目は黒豹だけど」

いつの間にも下の段で寝そべる彼を見ながら私が言うと、

「ぶはっ、なにそれ？」

紗優は吹き出した。

「前にテレビで見たんだ。だだっ広い森に一匹で住んでるって。孤独を好むらしいよ。あと、絶滅の危機にあるらしいし」

「絶滅関係ないやろ」笑いを堪えきれぬ様子で口許歪ませる。

「ある意味希少価値があるかと思って。あんな無口な人、見たことない」

「そつやねえ」

よいしょ、と立ち上がる紗優。そのまま右を見上げるとパンツが見えそうなので慌てて逆を向く。と、

「ねえーっ、子リスにオランウータン！ そろそろ行くよー」

一帯に大声がこだました。

むくつと起き上がった黒髪。

こちらにガン飛ばしてくる。

青白い炎のオーラが見える。

私があつくりとうなだれた。

いつもは朝市が開かれる、二十メートルの道。

港から走る国道とT字型に連結し、神社に通じる通称『朝市通り』には、観光客向けの土産物屋、民宿や食事処が軒を連ねる。

祭りの時期は歩行者天国となり、ずらりと道の両脇に屋台が立ち並ぶ。夜の闇に明かりの灯った店の列が滔々と続く様は圧巻。

……だ、そうだ。茶髪くんの説明によると。

現在圧巻というよりは、準備中が目立つ。たこやキャベツ、紅生姜の入ったトレイを置いた焼き屋さん。景品を慎重に並べる射的数人で組み立て始めたばかりで、何を出すのか分からない屋台も。

潮の薫りに混ざって、色んな匂いが漂う。

カステラの甘い香り、ヨーヨーのゴム臭さ、作りたての焼きそば、人の汗。

他に紛れているようでも人々の興奮は隠し切れず、爆発しそうな熱気が満ちる中を練り歩く。

紗優も私と同じチョコバナナクレープ。

前を歩く茶髪くんは鈴カステラの袋を片手に持ち、次々と口に放り込んでいく。

「マキ、はんもはべんね（なんも食べんで）いいの」

口をもごもごさせる彼に、

「お前ら、よくそんなもん食えるな。吐きそうだ」

隣の黒髪はうんざりした表情。

「人生損してるよ。このカステラの美味しさを知らないなんて」

「してねえ」

「もう。何とか言っちゃってよ、真咲さん」

困ったように眉を歪めつつも、口端は笑みに上がっていた。

そして、気になった。「……付いてるよ」

「うん？」

「カステラが。ここ」左の口角に指を当てると、

「ここ？」

右を指すから、再度私は左を指し直す。

毎度思うのだが、相手に合わせた側を指しても何故相手は逆だと思うのか。

小さく息をこぼすと、

「ありがと。取れた？」

まともに見て息が詰まった。ふわりと花のような笑顔。

固まった私をよそに、カステラに戻り懸命に頬張り出す、その姿不意に、どんぐりをついばむ子リスが重なって見えて、

「なーに笑ってんの？」

「……別に」

隠しても遅い。駄目だ、声が震える。

「確かにリスっぽいなあー」と紗優はクレープをかぶりつつ同意。

すると突如黒髪がこちらを振り向き、

「俺はオランウータンだな」

能面のような青白さでぼそり、呟いた。

「……」

「……」

「……」

一同沈黙。

「あははっ」

爆笑。無関心な背に私たちの笑い声が降り注ぐ。

「そんなこと言う人初めてだよ」

「あたしも」

二人とも目に涙を浮かべ、お腹を抱えてヒーヒー言うが、

「あの、ごめんなさい。私、彼に謝った方がいいよね」

「蒔田に冗談言わす子なんてそうはおらん。いいやる全然」

「僕もそう思う。マキはああ見えて本当は優しいから、気にしなくていいよ」

「うーん……」

青白い炎を思い出すと背筋がうすら寒くなるような。

だよねー、マキ。

袋をくしゃり握ると黒髪の元へと駆け出した。待ってよ、と彼を追う紗優。

追従する前に、温いドロドロのクレープにありついた。

食べるのが遅いと損をする。小学生の頃から給食も食べきれないわで、教師の格好の餌食だった。

嫌な記憶を思い起こしていると、

「真咲さん」

茶髪くんが大きく手を振っていた。

何故だか手を振り返すのが躊躇われ、結局出来なかった。

辿り着いたのは、塩川神社と刻字された石壁の門。

赤い鳥居をくぐると、ひんやりした境内の空気が出迎えた。足元の砂利は熱を残し、サンダルの素足に纏わり付くそれと格闘しながら歩いた。

お参りをすると思った。が、一同は素通り。

門と朝市通りを背後に残し、神社を正面に見て右手に進む。

うつそうとした木々が作り出す日陰。その中心には

赤、黒、金に彩られた神輿が紺色の布の上に佇む。装飾の色が闇の中で鈍く光を放つ。

見守る輪の中からつと女の子が黒髪のを呼んだ。知り合いなのか、話しかける少女に対し、仏頂面ではあるけども色を付けるとしたら黄色く柔らかなオーラが彼を包む。

横目に見つつ、神輿へと近付く。  
存外、大きい。

本体は一、二メートル。持ち手の長い棒を入れると、五メートルはあるかと思われる。

「これ、何人で担ぐの？」

「そうやねえー。十人から二十人くらいかな」

「町によつて神輿の大きさも違うし、まちまちなんだよ。中には男五人だけで担ぐところもあるんだ」

聞きながら正面に回ってみる。

目に飛び込む鳥居の鮮やかな朱。奥に金の鳥居、扉へと続く一面金色の世界。まるで小さな神社に簾の丸い飾りがしやら、しやらと音を奏でる。

絢爛豪華できらびやか。

初めて見る世界に、心を奪われる。

「ここは小さい市やけど、三十くらいの小さな町に別れとつて。町

ごとに神輿を担いで、さっきの海に行くんだよ」

「めっちゃくちゃ綺麗なんよ。砂浜に沢山の神輿が並んでピカピカして」

「そうなんだ……」

一つでも凄い迫力というのに、沢山並ぶ姿なんて想像も出来ない。きつと綺麗なんだろうけど。

「ま、僕たちが用があるのはこの神輿じゃないんだけどね」

近くの黒髪に呼び掛け、三人はスタスタ歩き出す。

私はその後ろをすぐすぐと付いて行く。

もっと、神輿を見ていたかった……。

そんな様子に気付いたのか。振り向きざま、茶髪くんがふっと笑い、

「こんなんで満足しちゃあいけないよ。もっと面白いもん、見したげる」

熱が出そうだった。

古い木の看板が立てかけられた建物に入る。宮川町商工会議所と毛筆で書された字はお世辞にも綺麗とは言えず、エンジ色のトタンで作られた安っぽい外観だ。

左右に開け放たれた戸の向こうには大小問わず靴が脱ぎ捨てられ、ただっ広い畳部屋は立つ人座る人でわらわらとひしめく。

部屋の中心には、銀の大きなトレイにおにぎりが山盛りで、紺の法被はっぴを来た大人たちが食べるのだらう。彼らが座る前には一様に缶ビールが並ぶ。

子ども連れのおじさん、割烹着姿で喋る主婦、男同士で酒をあおる老人。

彼らの間を縫い進む。

「紗優ちゃん大きゅうなっとな」

「今日はやるんけ?」

「頑張つてや」

「友達か? 宮川のが一番やさけな、楽しんでってや  
後で紹介する。ありがとう。」

次々にかかる声に紗優と茶髪くんは応じつつ。

「ママ」

胡坐をかくおじさんと小学生らしき男の子の前で膝立ちのおばさんが振り向いた。

瞬間、分かった。

紗優はお母さん似だと。

「ママ。あれ、持ってきてくれた?」

「もっちろん。ほら、パパ」

促されたおじさんは、紙袋をおばさんに手渡す。

三人が揃って立ち上がると、紗優に手を引っ張られた。

「紹介するね。こちら都倉真咲さん」

「お、お邪魔してます」

頭を下げると、何がおかしいのか、ふはつと後ろで茶髪くんが吹く。

「こっちがあたしのパパ、弟の怜生<sup>れお</sup>。で、ママ」

「紗優がいつもお世話になつとりますね」

「今日初めて会ってんけどな」紗優が舌を出す。

「紗優から聞いとります。今日は楽しんでって下さい」「恰幅のいいお父さんはにこやかだ。

「ねーちゃん。ぼく、向こうで遊んできていい?」

「行つてきな。田中くんたち、入口おつたよ」

屈んで頭を撫でる仕草が微笑ましい。

「じゃーね。まさき」

弟くんに続き、お父さんも会釈をして去った。

「ママは手伝い残つとるしもう行くわ。カズくん、マキちゃん、真咲ちゃん、またね」

お母さんは奥の台所へと消える。

疑問が一点。

何故にマキ『ちゃん』!?

思わず吹き出すと、隣の黒髪にギロリ睨まれた。

……怖。

「真咲もこれ着て」

そんなやりとりをよそに紗優が手渡すのは、紺色の法被。

「何ですと?」

目が点になるのが分かった。

「あとはこれ履いて。靴下とスニーカー持ってきたから」

玄関先で受け取っていると、「先行ってるね」と茶髪くん。無言で過ぎる黒髪の背を目で追うと、知らず頬が熱くなる。

さっき彼がシャツを脱いで白いタンクトップになった時、首から胸元へのしなやかな筋肉と、細身なのに筋張った二の腕が見えてしまつて……。

胸を押さえるとしゃりつと法被の袖が擦れる。素肌に少し固い感触にはまだ慣れない。

「法被なんて着るの初めて」

床に靴を揃え置くと、私の言葉に紗優は、初めてづくしやね、と楽しみを待ち望むような表情。

「で。履き替えたら、持つてる荷物ママに預けてくるしちょうどいや、結構です。」

……とは言えない空気。私のような人間でも流石に読める。

そして紗優の笑みには、有無を言わせぬ魔力があるとも思う。

「トイレ行きたいなら今のうちに行つといて」

速足で奥に消える彼女を見届けると、玄関から続くトイレに向かった。

「あれ？」

戻ると、誰の姿も見当たらない。

座敷の奥を覗くも散らかった座布団と缶が残されるだけで、おばさんたちが談笑しながら片付ける所。

みんな、外に行ったのだろうか。

建物を出ると人々の声量が増す。建物横の敷地にひしめく集団。

「うわあ……」

中心には神輿。人の汗と熱気と叫号があふるるカオスの真ん中で、

金色のそれは輝いていた。

「五時半に出るさけ、みんな用意してな」

「笛吹きはこっちやぞ」

「担ぐもんは集まれや」

出発の時間が近いのか、皆が急くように叫ぶ。見上げた空は建物に入った時よりも藍色を強めていた。

「真咲。真咲いっつ。こっちこっち」

神輿の横に立つ紗優が私に気付いた。

「おいでー。ここ、空けといたから」

手招きをされるが、

「や、私は……いい」

何だか、入れない輪を目の当たりにする感覚。

「何ゆつとるん。担がな、なにしに来たん」と口を尖らせる奥に、白い目線。紗優の前方に立つ黒髪の彼だった。

『何モタモタしてんだ』

顔に書いてある。怖い。

「やってみ？」

肩をポンと叩かれた。茶髪くんだった。

「や、でも私、小さいし」

「真咲さんくらい背丈の子なら他にもいるから、大丈夫だよ」

柔らかい彼の瞳、あやすような口調。

「うーん……」

「僕みたいなのも毎年担いでんだし。それに、ちゃんと後ろで見てるから。何かあったら………責任取る」

笑顔から最後は真剣な表情に。

えええ？

何ですか、その間は。いかにも怪我でもありそうな言い方は。逆に怖いんですけど。

頬をピキピキ引きつらせていると、

「いいから、楽しんじゃえよ？」

この人の笑顔にいちいちノックアウトされてしまう。  
彼の話聞いた時点で私の未来は決まっていた。

「担ぐもんは全員そろったか」

指揮をするだろつ男性が神輿を一周し、人の過不足を確かめる。  
お前はもう少し後ろ、ここ一人入れ。

巨大なうちわを持つおじさん。

笛を吹く子どもたち。

頭には鉢巻、法被に短パン姿のお兄さん。

割烹着のおばさんたち。

色んな人が見守る中、

「せえーのっ」

脇棒に手をかけ、神輿を担ぎ上げる。

「うおいつしよっ」

棒を乗せるも、正確には私の肩からは浮いている。身長が低いがため。

前後に負担をかけているんじゃないだろうか。

不安に後ろ見ると、茶髪くんが口パクで何か言ってきた。

「いくぞー」

「それっ」

辺りの声にかき消されたけれど、

「だいじょうぶ」

と、彼は言った。

やや不ぞろいな笛の音。

子どもたちが思い思いに叩く小太鼓。

ちゃんちきを遊び鳴らす幼子。

「そーれ。わっしよい、わっしよい」

先導する者に合わせ、担ぎ手もこたえる。

そのリズムに合わせて真つ赤な大うちわが動く。

竹のように長い棒のついた提灯ちようちんを持つおじさんも体を揺らしてノリノリだ。

私たちも揺れる。ゆれる。

担ぎ手と囲う人とで過疎の町はどこへやら。神輿の周りだけは満員電車のようにぎゅう詰め。暗い足元はおぼつかず、見知らぬ腕が次々ぶつかってくるし、紗優の足が自分のに躓いて今にも転びそう。

「そいやっ」

気を取られていると合図に呼び戻され、神輿を高く数回上げて

「わっしょいわっしょい」

また最初のリズムに戻る。

「こつち曲がり角やぞー」

「右におる人は止まれ」

「ゆっくり。ゆっくりな」

「電柱あるさけ気いけや」

街中を練り歩く私たち。気をつけや、としゃがれた声が次々上がる。

辺りが夜の気配を存分にまとわせ、子どもは寝る時間だと諭してきても、夏の熱気など冷めようがない。

人々が作り出す炎熱のリズム、むんとして喉が詰まる汗交じりの空気。腕を捲り上げた男の人の力こぶ、神輿来たよお母さん、と無邪気な幼な声。

私は酔いしれていた。

「もうすぐ着くぞ。足元滑るさけ、気いつけえ」

昼間を過ごした海が目の前だ。

車は交通規制で通れないようになっていらく、ロープが所々張られ、笛を吹く警官の姿も多い。

駐車場の横から、砂浜へと続くなだらかな坂道を歩く。右を見ると神輿のパーツばかりが目に入るの、左から世間を仰いだ。

砂浜には既に神輿が多く並ぶ。駐車場に並ぶ車のようにおびただしく。二十はあるか。

提灯や神輿の輝き。海面に跳ね返るまばゆさは、二倍増しでこちらの網膜を刺激する。

私たちの担ぐ神輿の前後も、別のそれを担ぐ人であふれ返る。

熱気とかけ声が混ざり合い、いよいよ海辺は夏の興奮に充満する。

「宮川町のもんはこっちやぞー」

砂に一步踏み入ると、現れた緑色の法被を着たおじさんが私たちを先導する。

足が引つ掛かる砂浜は歩きにくく、慣れぬ大声を上げ続けるこの喉は枯れそう。

神輿を幾つも通り過ぎた所で彼が両手を挙げ、

「んな、この辺で止まってや」

「おおーい、みんな止まれ。止まれー」

「わっしょいわっしょい」

進み続けた足が止まり、やっと開放される、と思ったら、

「んな、いくぞ。それっ、ささっ」

指揮者が手で丸を描く。

何だろう、と思っただ次の瞬間。

突如担ぎ手のみんなが走り出す。時計回りにぐるぐる円を描き、

「いやあー」

私の叫びも空しく、物凄いスピードで回り続ける。目が回る。砂に足を取られて本当にこけそうだ。

四回くらい回った所で、やっと回転が止まった。

「せいや」

みんなで神輿を高く上げ、

「せいっ」

再びドン、と肩に乗せる。

指揮者が白い笛をピーーと鳴らす。今度こそ試合終了だと信じた  
い。

「そこにおるもんはみんな手伝いに入れえ。せえーのおっ」

一斉に神輿を布の上へと降ろした。

終わると響くのは、歓声と拍手にお囃子の音。酔っ払い抱き合う

おじさんもいれば、指揮者に駆けつけねぎらうおばさんも。

「真咲。お疲れー」

息も切れ切れにその光景をすり抜けていると、真正面から紗優に抱き付かれた。

「真咲さん、どうだった？ 初めての御神輿」

「最後のはなんなの。死ぬかと思った」

穏やかに微笑んでいた彼が途端、吹き出した。ごほん、と咳払いしながらもある一点をじっと見つめてきて、

「靴、脱げてる」

「えっ？」

言われて足元を見ると、右足は靴下のみ。

「落ちてたぞ」

いつの間に離れて立つ黒髪の彼が、何か投げてきた。

「おわつと」

弧を描くスニーカーに手を伸ばすがキャッチできず、手前ではすつと落下。砂が肉眼で分かるほどにふわわり舞い上がる。

「……どんくせえ」

仏頂面で表情変えぬ黒髪の彼。

対して、茶髪くんは小刻みに肩を震わせる。

「ちよつと。笑い過ぎじゃない」

私と出会ってから一体何度笑っているのだろうか。

「だってさ、最後に回ったときに脱げたんですよ。『いやあー』って聞こえたんだけど、ごめん、ちよつと無理。ぶっ」

腰を折り曲げて本格的に笑い崩れた。

何この人。笑い上戸？

「紗優、ごめん。砂だらけにしちゃって」

そんな彼に内心で別れを告げ、私は紗優に謝った。

「いいよいいよ。気にせんといて。そのために持って来てんし。初心者はサンダルじゃあ担げんよ」

今更気付くが、紗優はサンダル。それが玄人というものか。

「スカートなのも無謀だよ」

目を潤ませたままだが、彼の口調は真面目そのもので、

「……そうなの？」

「帰ったらお風呂でよく洗ったほうがいい。傷だらけになっとるか」  
「ら」

「別に、全然平気だけど」

「その言葉、明日後悔するよ。湿布とか用意していた方がいい」

その時、彼の助言はリアリティを伴わず不可思議に思ったただけだったが、翌朝それを後悔する。

「うわっ、何これ」

寝起きの頭が一気に覚めた。

シヨートパンツで寝ている素足は擦り傷と青アザだらけだった。

それから学校が始まるまでの一週間。  
再び部屋にこもりがちとなった。  
外を出歩く勇気がなかった。  
母が嫌みを言われてるのを幾度も聞いたから。

ずっとここに住むつもりなが。  
子どもおると大変やる。  
高校生って難しい年頃やからねえ。  
気いつけて見とらんと。  
再婚するつもりないが。  
いい人おつたら紹介したげるさけえ。

心配している振りをして、後でいくらでも噂の種にするのだ。

お店から居間にまで丸聞こえなので、決まって二階の自室へ逃げる。

外へ出れば、同じように蔑む視線を浴びるだろう。

登校拒否をして困らせるつもりなどない。ただ、少し時間が欲しい。この世界に慣れるための。  
残りの夏休みは、移行するための猶予期間。ピーターパンでいよう。

周りの目を気にする大人な面を持ちつつも、現実を受け入れられない子どもである私はそう決めた。

古びた勉強机で宿題にひた向き合う毎日。  
流石に障子の和紙は新しく張り替えられた。  
けれど、全体に古臭さが漂う。透かし彫りの入った木の四角い電

球傘や、染み付きのふすま戸。母が若い頃に住んだままといった風情だ。実際そうなのだが。

明日は物置を探索しようと思う。少しこの部屋を変えたい。勉強はそれほど嫌いではない。

暇を潰すものがあるのはいいことだ。

手を止め、思い出す。

マックから眺めたスクランブル交差点。

教室の深緑の黒板。

自室のピンク色のベッド。

そして、神輿を担いだ夜を。

あれは、夢だったのかとすら思えてくる。

一夜の熱に浮かされた幻だったのではないかと。思い返してもふわふわとしていて実感を伴わない。

紗優とあの二人に会うことはない。

私は家を出ないから当然なのだが、彼らが家に来ることもない。

電話番号すら知らない。

みんなはポケベルを持っていたけれど、東京にいた頃は父に反対され、持たせて貰えなかった。

無論ここでねだる理由もない。

連絡する相手は、存在しない。

「ふう……」

障子を、続いて窓を開く。

眼下の世界は、見慣れたそれとは異質のもの。

家の前を歩く人一人おらず、空疎な空間。

道を挟んで正面は平屋の一戸建てで、鈍い色の瓦屋根。幅広い国道の向こうに二階建ての民宿。肌色のコンクリート。

民宿の窓からオレンジ色の明かりがこぼれる以外は、無人島のよう。

人混みとネオンに慣れ切った私には落ち着かない。住宅街の景色  
でさえ、これよりも明るかった。  
夜がこんなにも暗く静かだとは知らなかった。

そして九月一日。

緑川高校初日を迎えた。

久しぶりに摂る朝食の後に歯を磨く。

朝から焼き魚定食に納豆は胃に重い。

戦争を経験した世代の祖父は残さず食べると言う。明日からご飯をもう少し少なくしてね。母に言い残してその場を去る。

鏡の中の私は冴えない顔色。

現実逃避をしていたツケが回ったのか。

ダイアナ妃の事故のニュースに釘付けだったせいか。

学校指定のポロシャツも、紺と深緑のチエックのスカートもぱりつと新品で肌に合わず、紺のハイソックスも、ルーズソックスに慣れた自分には違和感。

制服を着るのではなく着られている体は、<sup>てい</sup>新入生みたいだ。

玄関に降りて戸を薄く開くと、肌を焦がす強い日差しに、出るのを躊躇。

すると、台所から走ってきた母が大きな布包みを手渡してくる。

弁当だから食べてと。

町田に住んでいた頃のお昼はいつも購買のパンか食堂。母が弁当を作るのは、毎年体育祭の時くらいなものだった。

こつこつ所まで田舎仕様になるのか。

喜びは湧かず、赤と白の古臭い市松模様には嘆息。

覚悟を決め、眩しい光の中へ飛び込んだ。

モラトリウムよさらばと唱えながら。

それから一時間後。

「転校生の都倉真咲さんです。東京からいらした……」  
全校生徒が集まる中、体育館のステージ上に立っていた。

何かの罰ゲームだろうか。

職員室で宮本先生から説明を受けていたら、いきなり呼び出されてこれだ。始業式のと真ん中。

延々話す学年主任の寂しげな後頭部を見ていた。小柄で白髪の彼は、淡い黄のポロシャツに、薄いグレーのスラックス。死語だが泣きたくなるほどスラックス。

こんな服装、久々に見た。

体育館の壇上に登るなんてのも中学の卒業式以来だ。

大体、転校生を全校の前で紹介する必要がどこにあるのか。クラスだけでいいじゃない。檻に閉じ込められた動物の気分。

「ほんなら都倉さん、前へ」

「はい？」

青天の霹靂<sup>へきれき</sup>。私に挨拶を、しると？

「さあ、どうぞ」

催促され手で促され、選択の余地なし。

マイクの前に立つと、自分の顔より随分上に位置する。小柄だと内心小馬鹿にしていたねずみ男、もとい学年主任より背が低いとは軽くシヨックを受けつつも調節すると、ステージの下には二十四どころか、八二〇をゆうに超える瞳。

この町の人間は純粹なのか。食い入るような眼差し。私の高校では話を聞かずお喋りする人だらけだったというのに。

全員が私の一挙一動に注目。

マイクを持つ手に汗が滲む。

頭が真っ白に、なる。

「……」

固まった。

「都倉、しっかりせい」

小声で耳打ちも、しっかりマイクを通ったためくすくす笑いも起こり、

「都倉、大丈夫か」

「とっ」

場内はつと息を呑む空気。

「くらまさきです」『ゴン』

マイクに突撃。なんとお約束な展開。

痛みに額を擦りつつ出た言葉が、

「以後お見知りおきを……」

「ぶはっ」

私はこの笑いの持ち主を一人しか知らない。

「あははははっ」

声のする方にはやつぱりあの茶髪くん。遠くだろうが瞭然。黒髪  
の海の中でひときわ目立つ金髪。

他の笑いも浴びつつ、這う這うの体で壇上から逃れた。

教室に戻ってからは、また別の悪夢の始まりだった。

「東京のどこにおったん」

「東京弁喋ってみてな」

「彼氏はおるん」

「部活はどこ入っとったん」

「どこに住んどるん」

クラスメイトからの質問ラッシュが待ち構えていた。一答えると十の質問が飛ぶ。黒山の人だかりにいちいち答えているものの、段々頭がマヒしてきた。

トイレに行くにも視線とひそひそ声。私は珍獣か。

テストもイマイチ集中出来ず、結果は見ずとも分かる。よくはない。

「都倉さん」

足早に去るべく急いで教科書をかばんに詰めていたら、

「一緒に帰る」

断るといふ選択肢はないのだろう。

没個性的な黒髪おかつぱ五人組に悟った。

「テスト、全然出来んかったわ」

「この三日間は地獄やねえ」

「試験勉強する気全然起きんげけど。今日『ビーチボーイズ』見てまっわ」

「ああつ。今日やったね。どうしようー」

「わては見る。竹野内見んと夜も寝れんわ」

「あんたおかしいて。普通は反町やる」

「何が普通やの。あたしも竹野内なんやけど」

下駄箱前で追従不可能な会話が展開される。

月9は全く見ない。

居間にテレビはあるけど祖父はあまり見るなって空気だし、お店が近いから落ち着いて居座れないし。

唯一チエツクするドラマは年寄りが好む大河。毎年見るが、たまたま今回は途中参加。森田剛は見逃した。

溜め息を吐きつつ、黒のローファーに履き替えて玄関を出ると、  
「都倉さんはドラマ見んの」

うち一人が、ガラス戸に背を預けて待っていた。

「全然。大河くらい」

「しつぱいなあ」

先に行く四人を眺めながら眉を歪めて呟くと、私に向き直り、

「ちゃんと自己紹介しとらんかったから、名前覚えとらんやる。あたしは小澤茉莉奈<sup>こさわ まりな</sup>」

きりりとした眉毛に細い目、切り揃えられた厚い前髪。

運動部なのかいやに焼けた肌、頬には少し吹き出物。顎ラインの髪は両耳にかけ、制服の着方も模範的。

真面目そう。で、ちよつと強気そう。

それが第一印象。

彼女は続いて他の子呼びかける。

「都倉さんにこの辺案内したげんか」

「や、テスト期間なのに悪いよ」とやんわり断りにかかるも、

「じゃ、こつから『みずもと』らへんまで。それやったらこつから十分位やし、みんな平気やる」

「……みずもと、つて?」

「スーパージャ。ダイエーみたいな」

スーパージャ?

名前も聞いたことがないスーパージャが、まさか高校生の遊びスポットだとか言わないで神様。

……ジューサス。

彼女たちに付いて行くと、確かに十分後。  
私はスーパーの前に立っていた。

建物に入ると即、彼女はある場所を指した。

オレンジのビニール床に、褐色の机と椅子が十セットほど。食堂スペースを半円状にファーストフードのお店が囲う。

店の名は全て聞いたことがなく、多分自営業。ソフトクリームやラーメン、焼きそばが売られる、いわゆるフードコートなのだが。分厚いテレビが映すのは野球中継。お世辞にも洒落てるとは言えない、食べ物が美味しそうに思えない、さびれた定食屋風。

ここで食べる気はしないな、と思っていたら、

「うちのガツコの子は結構ここ寄ってくんよ」

まさかの一言。

「買い食いは校則で禁止されとるんやけど、たまにうちらもなあ」

「そ、そう」

ここには寄らないで、と祈るうちに全員そこを素通りし、悪趣味な婦人服売り場の前を通り抜け、別の出口から外に出る。

道路を挟んで反対にはお店が並ぶ。渡ると口々に、

「ここはナポリタンが美味しいんよ」

「この花屋はいつも卒業式ん時、花束買いに来とるんよ」

「ビリヤードもよく男子が寄つとる」

ふと思う。

「あの、ゲーセンってないの」

「この辺にはないなあ。山中町にならあるけど」

「山中町ってどこのこと」

「都倉さん、行ったことないが。広い公園があつてキレイなんよ」

「歩いて三十分はかかるし、あたしはあんま行かんけど。しっかもあの坂きつくくない？」

……Oh .

「じゃ、カラオケは」

「あ、ちよーどそこにあるんよ」

指の先には『きよかわ』という看板。

一時間一部屋三千円の文字。

目ん玉飛び出るかと思った。高過ぎ。スナックの間違いじゃないの。

「みんなが行くのは……大体ここなの？」

「そーやねー。ここが一番安いし」

何この財布にお優しいプライス。ビッグエコーかカラ館、せめてシダックスはあるでしょ普通。

「ええつと。じゃあ、モスは」

「それがないんやよねえ」

それ『が』ではなくてそれ『も』ではないのか。

「あたしはいつもお父さんが畑中に行くとき買ってきてもらっ」

電車で三時間の市の名を出されてしまった。シェイクなんて頼んだら確実に溶ける。抹茶フレークがシナシナだ。

「じゃ、マックは」

きょとんとされる。

ここはもしかや関西圏だったか。クにアクセントをつけてマクドと呼ぶんだったるうか。

「マクドナルド」

事を急いで正式名称を口にすれば、あーと一同頷くから、

「……畑中市？」

「ビンゴ」

オーメン。普及率ナンバーワンのあの店が存在せぬとは。

「こ、コンビニは」

あー、と顔を見合わせ、

「車で三十分くらいのことにあるけど」  
遠。

コンビニって車で行くもの？ 知らなかった。

「念のため聞くけど、それってファミマやエーピーとかじゃなくて」

またきよとんとされる。

「……ファミリーマートって知らないかな」

「……」沈黙が答えなり。

「あそこにあるんはサークルKだよ」

そう来ましたか。電車からも見えませんでしたよ。

「じゃ、買い物する時はどこに行くの」

斜め前の民芸店を指された。

いやいや、『買い物』ってそういうんじゃないで、ジヨルナとか

109とかデパートの類。

「あとは畑中市やるか」

「通販も使うよ。Voiとか」

「セシルとか」「ベルメゾン」「フェリシモ」

やっぱり、ここには何も無い。

何この僻地。

頭を抱えなくなった。

目の前の小さなガラスのコップが私だとして。

周りから被せられる言葉。

好奇に満ちた視線。

あまりの環境の違いに落胆する心。

色んなことが水となって、私の中を埋めていく。

……片親はまともに育たない、か。

誰が言い出したのだろう。

でも、誰もがそんな目をして見てくる。

居間で一人、生ぬるい水を飲み干す。

都会の水とは全然違うと言われるけれど、味の違いはさほど分からない。この家で飲むのは、お茶か水道水ばかりだ。

帰りは言葉少なく皆と別れた。それほど話したいことも聞きたいことも見当たらなかった。

この小さなガラスの容量が、私のキャパシティだとして。

よく、水とコップはビジネス本で、ポジティブな例えとして用いられる。

半分入った水を、まだこれだけあると捉えるか、これだけしかないと考えるか。

私は、そのどちらとも思わない。

水で満たされて苦しいとすら思う。

あふれたらどうなるのだろうか。

この気持ちはどこに向かうのか。

新しい何かが見えるのだろうか。

こんな気持ちがおーバーフローしてしまう日は、意外と直ぐにやってくる。

\*\*\*

転入してから一週間経過しても、教室の隅に座る私は変わらず人に囲まれていた。

愛想がよくもないので、少しずつ数が減ってはいるけど。

茶髪くんと、黒髪の彼と紗優と話すことはなかった。

休み時間の度に質問攻めに遭うので、私は移動が出来ない。

また、彼らがこちらに来ることもなかった。

「でね、都倉さん」

軽く肩を叩かれた。

「んもう、聞いとらんかったん」

名も知らぬ子にいなされる。この子を含むおかつぱ五人組。彼女たちがいつも輪の中心にいる。

「そういえばさあ、聞いたかったんやけど」

リーダー格の小澤さんがこちらに身を乗り出す。

「何？」

顔を寄せて耳打ちされる。吹きかけられる息は、

「お父さんがおらんくなるんで、どんな気分」

嘲笑の息。瞬時にかあつと頭が熱くなる。

「都倉さんて、前の苗字はなんやったん」

何事もなかったように歯を見せるが、

「木島、だけど」

聞き違いなどではない。ドクンドクンと心臓が脈打つ。

「そーなんや」

「ふつーの名前やね」

「茉莉奈に言われたないやろ。小澤やて普通やよ」

次々に周りの声が続く。

「大人が別れるってどんな感じなんやろ。あたしには分からんわ」

「結婚しとらんのになーにをゆうとるが、茉莉奈は」

「理解出来んよ。一度は好きになった人なんやろ？ なして嫌いになるが。それで、離れて暮らすたってどういふ神経しとるんか」

一拍置いて、

「子どもがかわいそうや」

「……もしかして、私のことを指してる？」

自説を繰り広げる彼女を私は見返した。

「だってな、親が別れた子っちゆうんはみいんなグレるんよ。都会から遠く来てんし、自分から仲良くしたれって『お父さん』が……」

最後まで聞かずに席を立った。

あまりの音の大きさに、クラス中の視線が集まる。構ってなどいられなかった。

「あなたの独善的な話にもお父さんの話にもキョーミない。放っておいてくれない？」

茹でだこのように真っ赤な小澤さんが目に入る。が、興味が湧かない。

私は即座に教室から出ていった。

「次、クラス対抗リレーの順番決めな。覚えとると思うが、全員参加やぞ」

季節を間違えた蝉が狂い鳴く九月。勉強という一点に集中するものがないと、四十人が座る空間は息苦しく感じる。緑豊かな中庭を眺められれば、気持ち休まるだろうに。

壁際に座る私は室内を見回す気にはなれず、頬杖を付いて灰色の壁を眺めた。貼り紙を見る限り、確かに体育祭は九月二十一日にあるらしい。

今頃、リーディングの授業を受けているはずだった。

ホームルームで潰された。

全て、体育祭のため。

宮本先生の説明は耳に入らず、心は虚ろ。

あれから三日が経つ。

困う人はいなくなった。むしろ、話しかけてくる人は消えた。

特に、あの五人組とは関わらなくなった。

教室移動時やお昼休み。一人になってみると、一緒に行動していたのがよく分かる。

気を遣われていたとは思う。

ただ、もうそんな話はどうでもよくなっていた。

いくら取り繕っても、所詮小澤茉莉奈の発言が皆の本音なのだ。

高校生にもなって、こんなプチいじめをするなんて馬鹿らしい。

こちらこそ関わるなんて願ひ下げだ。

私に出来ることといえば、

学校に行くこと。

周りを嫌うこと。

親を恨むことくらいのものであった。

「都倉。……都倉、おい、聞いてんのか」

二度響いた低い声に、どうにか重い顔を上げる。

「ちゃんと聞いとけ。リレー走る順は最後から二番目。あと、夏休み前に決めてたんだが、騎馬戦、綱引き、借り物競争と三人四脚に出るのが決まっとる」

「うわ」

先生、何か多くないですか。

黒板には、達筆だけどやや右上がりの羅列の中、私の名が五ヶ所にも。

自慢じゃないけど運動は苦手だ。

五十メートルで奇跡的に一度七秒台が出た。以外はからきし駄目。今聞いた限り短距離関係ないし。むしろスタミナ要るし。

二種目しか出ない人もいるのに、陸上部のホープ並の量は何なのだろう。

息をこぼすと、斜め前の席から白い目を注ぐ小澤茉莉奈とガツチリ視線が絡まった。

せいぜい頑張りな。

目が言っていた。

手厚い歓迎をどうも。

途方に暮れつつも、神経質そうな字を書き写すしかなかった。

その日の放課後。

何でも「各種委員会がある」らしく、知らぬ間に図書委員となっていた私は出席する運びとなった。

話を素通りしがちな私に、宮本先生が念押しした。

委員はクラスに二人ずつ。二年四組のもう一人の図書委員は、黒髪の彼。

『四時から委員会』

黒板の字を一瞥し、賑わう教室を一人出ていく。

一、二年生は六時間目で授業は終わるが、七時間目に特別授業を残す三年生に合わせて待ち時間が続く。

委員会が行われる図書室に今から向かうのは、やる気満々に思われそうで気が進まない。

大抵は教室で談笑しながら、或いは部室で過ごすのだろう。

そういえば、部活には誘われていない。

宮本先生から入るように言われたけど。

自嘲的な笑みがこぼれる。

こんな私はどこで待とう。

あそこしかない。

思い立ち、足を速めた。

三階の、薄暗い廊下の奥。

『この棟は三年生の教室がある棟で、一、二年生のは別棟にあるんだ。僕たちが来るのは登下校の時くらいで。あとは図書室行くか、移動教室るときかなあ』

茶髪くんがそう説明してくれた。

あの時は通りがかったただけだったが、やがて、この棟で昼休みを過ごすのが私の日課となった。

青緑のプラスチック板が貼られた階段を上り、オレンジの所々錆びた扉を押せば、そこには開けた世界。

が、あるはずだった。

コンクリートの数段を降りて右向くと、

「うわ」

雲がかった空の下、黒い金網の前に一人佇む男。

煙草を吸うのか、前方から細長い煙が立ちのぼる。

この長身の後ろ姿は……

間違いなく黒髪の彼だった。

間違いなく関わりたくない。

クルリと一八〇度回れ右をして立ち去る、つもりが、

「逃げてばかりだな」

驚きに振り返ると、背を向けたまま煙草を燻らせていた。

この人、後ろに目でも付いているの。

あつかんべー、と舌出してみると、

「下らねえ」

ふうーっと長く息を吐く。

この人、凄い。

白煙にふらふらと吸い寄せられるように足が動く。距離はおよそ

十メートル。

この行動を、私は十分後に激しく後悔する。

肩を並べ、黒い金網から眺む空。

屋上という小箱に囲われた自分がちっぽけな存在に思える。

と、流れきた煙草の煙に、喉がげほつと反応。

「吸ったことねえのか」

「当たり前でしょ」

手で煙を払い、

「それより、何か用なの」

横顔を睨み付ける。のに、前向いたまま眉一つ動かさない。

腹が立つほど端正に整っている。キメ細かく透明感のある肌、シ

ヤープな頬の曲線。

鼻、高いな。

「……」

……はあ。呼び止めておいて何なの。

付き合ってられない。

がしゃんと金網から手を離し、出口へとUターン。

「あれも嫌い、これも嫌い」

後ろから追ってくる抑揚のない声。

「全部うぜえって顔してやがる」

「だったら何なのよ」

堪らず後ろ向くと、金網に凭もたれて今度こそ私を見ていた。

青白い炎をまた纏う姿にひるみそうになる。

「あなたには関係ないでしょう」

「関係ねえさ」

「だったら」

「放っておいてくれ、とまた言うのか」

全てを見透かす瞳。

「……」

沼底のような暗い瞳に見据えられ、息を呑む。

「ここには卒業まで通うのか」

「……当たり前でしょう」

「フルシカトして過ごす気か」

「知らないわよ。してるつもりなんかないし」

「つもりで済むなら訳ねえな」

「何が言いたいの」

「苛々すんだよ」

「苛々つて。勝手にしてればいいでしょう。あなたの気持ちの問題なんて知らないし」

「そももいかねえ。だいたい……」

早口で続く言葉の応酬。急に彼が口を嚙くんだ。

「何よ」

「何でもねえ」

常に冷静でポーカーフェイス。なのに、慌てて口を抑える珍しい姿に、鼻でせせら笑いたくなる。

「今日は饒舌じゃない。彼がいなくても喋れるんだ」

彼とは桜井和貴のこと。

桜井和貴はクラスメイト皆と分け隔てず話すが、目の前の彼は違う。

一人でいるか、

桜井和貴といるか。

「……」

「逃げてるのは自分だって同じじゃない」

「何が、言いたい」

今度は彼が聞き返す。

「何があつたか知らないけど、だから壁作ってる？ それとも元々そういう性格なの」

「……」

悠然と白煙を吐きながら見据える威圧に負けそうになるが、私の

言葉は止まらない。

「『右足』に何があったか知らないけど、だから何したっていい理由にはならないでしょう」

言った刹那。

振り被った彼の手が、煙草を思い切り地に叩き付けた。

そして再び視線をよこす。

真っ直ぐ、氷のような冷たい目を。

「饒舌なのは、どっちだ」

黒髪が牙を剥く。

「本当なら自分のいるところじゃねえって見下してんだろ。顔に出てるんだよ」

じり、じりと後ずさる。

「親や同級生を恨むのは筋違いだろが」

彼は微動だにしてないというのに。

「そんなに嫌なら出てきやあいいだろ。んな勇氣もねえくせにふて腐れた顔しやがって」

劍幕に押され、

「甘ったれてんじゃねえ」

私は彼の地雷を踏んだらしい。

「お前は全部が嫌いなんだろうが、……俺もお前が嫌いだ。変える努力もしねえくせに文句垂れてるお前が」

続く言葉があったかどうかは知らない。

私は逃げ去った。

「真咲いー。ご飯よー」

階下から母の呼ぶ声。

「はい」

答えないと祖父が怒るから、返事だけは一丁前に。

気分は鉛のように重い。

階段を降りると、台所から出てきた祖母と鉢合わせた。

「今日は真咲の好きなハンバーグやから。これ、運んでって」

居間に入ると、先に座る祖父は新聞を読んでいた。驚くほど分厚い眼鏡をかけて。年よりも若くて元気と言われるが、こういう所は年相応だと思う。

テーブルに並べる夕飯は、白いご飯、漬物、わかめの味噌汁、鱈の味噌焼き、刺身にハンバーグ。

メインは変えても基本は魚料理。

「今日は夜のお客さんおらんさけ、ゆっくり出来るわ」

普段は夜八時頃に孤独な夕食。七時に全員が食卓につくのは珍しい。喜んでいいのか分からない祖母の発言を皮切りに、食事が始まった。

楽しい母との会話を聞き流していると、

「真咲、学校はどうなが」

間近に見る母。

少し顔がふくよかになり、血色がよくなった。

仕事での疲労は感じさせるが、どうやらここでの生活が合っているようだ。

私は、裏切られた気持ちになった。

「……別に」

「友達は出来たん」

真つ先に浮かぶのは、黒髪の三白眼。

迫力を思い出して背筋が寒くなるけれど、無性に腹が立ってきた。大体、彼にあんなことを言われる筋合いなんて毛頭ない。

「出来る訳ないでしょう」

持っていた茶碗をテーブルに叩き置くと、全員目が私に集まった。

「馴染めるとでも思ってるの。東京から来た片親のよそ者なんだよ私は。人からどう思われてるか知ってる？ お父さんいないのってどんな感じ、って笑われたんだよ」

「ま、真咲……」

不安げに揺れる瞳孔。震える言葉。

無理もない。

今まで私が声を荒げたことなどなかった、離婚に関して。

「お母さんはいいよ。元々住んでたんだから。でも私は、こんな所来たくなかった」

手を止めた祖父が腕を組み、目を瞑る。

「こんな、何も無い田舎なんて大っ嫌い。勝手に自分の都合で連れてきたっていうのに、お母さんは何なの。一人だけ楽しそうにしてて。私の気持ち、考えたことある？」

席を立ち、居間を出ていく祖母。

「いつつも、考えとるよ」

「嘘だ。どうとでも言えるよ口だけなら。いつもそうでしょう。私のことなんか見てもないくせにっ」

「本当やって」

「お母さん、最初から方言喋ってた。東京なんか嫌いだったんでしよう。お父さんのことも嫌いだったんなら、最初っから結婚なんかしなきゃよかったのに。」

「……私なんか生まれてこない方がよかったんじゃない。その方がお母さん、」

そこまでしか言えなかった。

バシンと強烈な音が脳裏に吹っ飛ぶ。

「真咲」

冷たい床に手を付く。

「……っっ」

祖父から平手打ちを受け、椅子ごと真横に倒れ込んだ。

母に支えられながら体を起こす私を祖父は見下ろし、

「親を侮辱するんも、大概にしろ」

頬じゃなくて全てが痛い。心が悲鳴を上げた。

「お祖父ちゃんには分からないよ。私の気持ちなんてっ！」

母の手を払い、どうにか立ち上がった。口の中が切れ、血の味がする。

「真咲っ」

倒れたままの椅子。

呼び止める祖父の声。

母の追いかける声。

出くわした祖母の驚いた表情。

全てを無視して、二階へと逃げた。

翌朝。

天候快晴。

気分最悪。

泣き腫らした瞼、腫れた頬。

鏡を見て愕然。まるでお岩さん。

二階の洗面所で顔を洗い、ファンデを叩き込む。

町田では皆が化粧をしていたが、緑川高校では女の先生のみに許された特権。恐ろしいくらいに皆がノーメイクなのだ。

全くしないのには抵抗があるので、私は眉を描き足す程度に留めている。

が、こういう時は困る。

薄いと隠しきれないし、厚く塗ると浮いてしまうし。

長々格闘したが、相変わらず泣きパンダだ。

しかし、このちっぽけなプライドは学校を休むという選択を許さない。

一階に降りて朝食を一緒するのは気まずい。早めに行って図書室で時間を潰そう。いや、委員会サボったから、屋上か。でも彼がいたら嫌だし。

思いあぐねつつ部屋を出ると、

「あれ？」

木のお盆が出迎える。

白いお皿、おにぎりが二個。赤と白の市松模様の風呂敷に包まれたお弁当が乗っていた。

よくよく見ると、白い紙が添えられて、

『よかつたら食べて下さい』

……お母さん。

あ、やば、ちょっと泣きそう。

具は私の好きなツナマヨとたらじ。  
自室で一人、しょっぱいおにぎりを頂いた。

学校では否応なしに視線を浴びる。いつも以上に。  
露骨にこちらを見てヒソヒソ喋る女子も。中心には小澤茉莉奈が  
必ず。

こんな顔してるからって何よ。  
悪いことしてる訳じゃないんだしジロジロ見るな。

黒髪の彼以上に仏頂面で、目の前だけに集中して一日を過ごした。

六時間目のライティングが終わり、さあ帰ろうと支度をしている  
と、

「全員、ジャージに着替えてトラック集合ー」

無情にも体育委員の声が響く。

ああ、クラス別対抗リレーの練習があるんだった……。もう一度  
泣きたい。

足の遅い人も慣れてない人も参加なので、みんなで練習しようと  
話が出ていた。

肩を落としてつつ、体育館に続く群れに従う。

九月の容赦ない紫外線を浴びるはずだ。

溜め息と共に灰色の扉をスライドする。

教室を出るのは私が最後であった。

「受け取る人は後ろ見んで手えだけ出して。そ、真っ直ぐ」

「あれ今日最終回でしょ。絶対見な」

四十人も揃えば人は様々。

深緑のジャージに着替えた私たち。

トラックで練習に打ち込む者もいれば、傍らで雑談にいそしむ人々も。どう考えても後者の方が多い。

ゴムゴムの、なんて会話は『ONE PIECE』の話だし、最終回とは『フェイス』のこと。りょうさんが出るドラマだから知ってはいたけど。

誰に加わるでもなく、一人で何をするでもなく、私は校舎を茫と眺めていた。

間に立つ、例の五人組と目が合った。

「うぜえ」

や、私ではありません。

益々睨みを利かせる彼女たちに泡を吹きそうになりながら首を後ろに捻ると、出迎えたのは仏頂面。

黒髪の、彼だ。

驚くと右眉が上がるのは彼の癖なのだろう。

目が合うと逸らされた。

私も顔ごと思いきり逸らした。

このパンパンな顔はあなたとは関係ないから。あんなこと言われた程度で泣いたとか思われるなんて、私のミジンコより小さいプライドが許さない。

正面の五人組も背後の黒髪も見れず、前門の虎、後門の狼とか言っただけ。きまり悪さにうつむくと、

「みーんなー。ちよっと聞いてー」

辺りをつんざく大声。

やや高めの声は茶髪くんに違いない。

ざわめきは彼が手を上げた途端びたりと収まり、キリストのように空気を変えた。

「こんなんじゃさあ、練習にならないよ」

半笑いを浮かべつつ、ゆったりとした足取りで輪の中心へと進むと、人々が次々と道を空け、

「今日はなにやっても駄目。だから火曜にしよう」

うーん、と伸びをする背中がしなやかで、まるで猫のよう。

はあ？ と傍の男子が問うと、

「月曜は祝日だから。三連休、好きなことやってリフレッシュするといいよ。出来ればランニングか筋トレして欲しいけど」

「リフレッシュなんかするはずないやろ。あんたみたいに半端な陸部とは違うんやよ」

小澤茉莉奈が不満げにこぼすと、茶髪くん、桜井和貴はそうだね、といたずらっ子のような笑みを浮かべ、

「イラついてるときはなにやっても無駄だよ。だから火曜。全員運動場に集合。朝七時に」

「は？ 何ゆつとるんお前」

「一限目体育やからちよーどいいし。みやもっちゃんには僕から言っとく」

疑問をかわした桜井和貴に、更に別の男子が掴みかかる。

「和貴、何を勝手に仕切つとるが。だいたいお前、」

「お前が、なに」

目の色が一变。柔らかな猫が豹のように凄む様にゾクリとした。誰も気付いていないのだろうか。

「全員火曜に来なかつたら、僕はアンカー辞める。リレーには出ない」

凄みを消し去った穏やかさでにっこりと微笑み、「じゃ、来週ね」と背を向け歩き出す。

僕がこのクラスで一番速いのを忘れないでねえ。

左手をヒラヒラさせながら。

残された人々はというと、砂ぼこりの舞うグラウンドに呆然と立ち尽くしていた。

ただ二人。

余計な視線や言葉は食らつまいと走り去る私と、桜井和貴に黙って付いて行く黒髪の彼を除いて。

翌週火曜日。

時刻は午前七時十分。

体育館に集合していた。

一人を除き。

七時丁度にクラス全員が運動場で待っていた。

が、遅れて来た彼の、

「なにしとるん、中でいいよ」

一声で移動となった。

「リレーの練習やのに、なして中やが」

待たされた人々のざわめきに、ごめんね、と言いながら桜井和貴は走り寄り、

「あー、今日はね、役立つ練習をしようと思って」

おもむろにバレーボール二個を掲げる。

「あんだ、何を考えとるん。バレーなんかしたって、」

「バレーじゃない」

小澤茉莉奈を遮ると、白いラインを人差し指で指し、

「ドッジボールだよ」

口角をきゅつと上げ、艶やかに微笑んだ。

七時十四分。

「うわわわ」

ひっきりなしにボールが飛び交う。私は逃げるので精一杯。

外側敵陣から飛んでくるボールを避けたと思えば、後ろからは別のが迫り。

ボールが二個のドッジボールなんて初めて。

地獄だ。

「うりゃあ」

金曜に桜井和貴に突っかった彼は、不服そうだった割にはやる気満々じゃないか。

内心呆れていると、手から滑り落ち、ころころと前方に転がるボール。

「アウト」

自陣にいた最後の男子だった。

逃げ足、もとい短距離が速い私はボールに一切触れず、ひたすら走って止まってを繰り返していた。正確に言えば、彼を隠れ蓑にして逃げ回っていたのだが。

溜め息交じりで見回すと、残るは女子数名。

今で動揺した隙に両サイドからボールを放たれ、瞬く間にアウト。

残ったのは、

「なんで、あんたあの」

小澤茉莉奈。

彼女と私の二人だけだった。

残りの味方は敵陣外野にぎゅう詰め。

二対二十。

頭の中では試合終了。

勝負を決めるべく即ボールが来ると思いきや、全員の動きが何故だか停止。

司令塔はどうやらラインギリギリに立つ桜井和貴。左手にボールを持ち、立てた人差し指を赤い唇に当て、静かに、と言いたげに。

視線を追うと、私の後方には外野でボールを持つ男子が。

まさに、挟み撃ちに遭わんばかり。

「あんたは田辺の方見とき」

田辺と呼ばれた男子を見て固まった私の後ろを、小澤茉莉奈が背中合わせに立つと、

「桜井」

当の桜井和貴は、左手の人差し指にボールを乗せてくるくると回していた。

器用な人だ。

と思っていたら、数度回った所でボールが転がり落ちる。

「危ねっ。ミッチーは出来とったんに」

スラダン読みすぎやろ、相手ボールになるぞ、と味方から野次が飛ぶ。私も苦笑い。

「こっちは女子だけなんやから手加減してや」

ボールを拾う動きがぴた、と止まる。

「あたしはソフト部やからいいけど、この人は運動神経ゼロや。逃げるしか脳があらへん」

何ですと？

眉間に皺が寄るのが分かった。

……が、彼女の体型をよくよく見ればソフトボール部というのも納得。がちりして運動神経がよさそう。

対して私は、いかにも文化部なモヤシ体型。

彼女の言い分に間違いはないのを苦々しく思っていると、

「それは、出来ない相談だね」

桜井和貴が立ち上がる。

「僕は勝負ごとで負けるのが嫌いなんだ」

肩の前で構え、ボーリングで球を投げる直前のポーズで外野をぐるりと見渡す。

誰がどこにいるのか確認している。

猫じゃらしと戯れる猫だ。獲物を前に目が爛々と輝く。

「弱点があれば狙うのは当たり前。あ、誤解のないように言っとくけど、僕って一応フェミニストだからね」

最後に誰でもない、こちらを見てふわり、花開くように微笑む。

宮沢紗優の言葉を思い起こした。

この微笑みに何人の女子がやられたのだろう。

「じゃ、じゃあ」

言っちゃあ、ボールは放たれた。

ボールは頭上を越え、外野の田辺と呼ばれた男子が一つ持ったまままで受け取る。

戸惑った様子を見せるも左右に振り分けると、やや離れた所でバウンドするため、私たちには拾えない。

私から見て右側の男子は、受けたボールをこちらに投げってくる。

小澤茉莉奈が左肩で避けたボールを取るのは桜井和貴。

二カツと笑い、左手を大きく振り被ったが、それはフェイク。素早くボールを放つ。

狙いは、小澤茉莉奈の足元。

あつ、と私が出す前に、平手打ちに似た音が響く。

小澤茉莉奈は腰を低くし、足首の位置で捕まえていた。

「こんながあたしに通用すると思つとるんっ」

ボールを投げ返した瞬間。

背中を狙う豪速球が飛んでくる。この隙を狙ったものが。

右には綺麗なフォームで投げたばかりの仏頂面。

「危なっ」

咄嗟に体が動く。

ばしん、という音を強烈に近くに聞いた。

「……っ」

私はそれを顔面で受け止めていた。

\* \* \*

「顔面ブロック見たん初めてやわ。バレーならあるけどドッジボールでやるなんて、ほんま運動神経ないんやね」

「まあまあ、小澤さん。落ち着いて。都倉さんは少し休んどりなさい」

薬品の匂いで満ちる保健室。

茶色い丸椅子に座って濡れタオルを顔に当てていたが、勧めに応じて三つあるうちの窓際のベッドに腰掛ける。

「しゃーないから、宮本先生には言っとく。寝てな」

大きく息を吐き、私に向けたらしい言葉を残して小澤茉莉奈は去った。

鼻が、痛い。

あのあと、小澤茉莉奈が連れてきてくれた。ばっかねえ、と呟きながら。

クラスメイトは大丈夫、と口々に声をかけてくれたが、鼻を押さえて頷くことしか出来なかった。こっ恥ずかしいのであんまり触れないで欲しかった。

ベッドで寝るなんて、東京にいた時以来。

横になると、背中に固い感触が蘇ってくる。

「鼻血も出とらんから大したことないと思うわ」

上から覗き込む先生。ややふくよかな、三十歳を過ぎてみえるおばさんだ。

白衣の下には、えんじ色と赤紫の花柄のカットソーが覗く。どこでそんな毒々しい色の服を買うのだろう。

「眠そうな顔してるねえ」

丸っこい顔を更に丸くして目を細め、

「最近寝不足で、本ばかり読んでます」

意識がゆらゆらするのを感じながら瞼を下ろす。

ベッドを囲うカーテンがシャツと閉まる音。

「河合隼雄の、カウンセリングを考える、です。……あの方の日本の心理学に与える影響は大きいです。……ユング派だけど……日本の社会に根ざした心理学を」

そこまで言うと私は意識を手放した。

黒髪の仏頂面が見えた気がした。

「悪かった」

布団の上に出す手が持ち上がり、新しく羽毛が包み込む感触。残る肌の温もり。

夢、だろうか。

薄目を開けようとすると途端、深い深い闇に墮ちる。

辺りを覆う暗闇。

目を開けているはずなのに何も見えなくて、ただひたすらに足を動かした。

トンネルの奥から徐々に光が射す。眼界に迫るとぱっと一面に広がり、

「眩しっ……」

瞼を徐々に上げればそこには、幼い頃の私が出た。

一人、庭で遊ぶ。四歳頃だろうか。花壇の一角を、子ども用スコップで一心不乱に掘り返す姿。白いTシャツもピンクの花柄のワンピースも泥だらけだ。お気に入りの服だった記憶はおぼろげに残っている。

縁側の奥は開け放たれた畳の一室。長机に向かう老夫婦が茶をすすり、

「あんな子……どうする……」

「もう一人……子どもが……」

場所を有り余らせた広い空間だが、隅で一組の夫婦が正座をする。身を縮め、肩身狭そうに。

私は時折振り返り、様子を窺っていた。

「……っ！」

突然、怒鳴り声が響く。

うなだれ、嗚咽する彼女は、

母だ。

スコップを投げ捨て、走り出した。  
辿り着くより先に、庭に飛び出た父。間を阻まれるようなもどかしさ。

「お母さん。お母さんっ！」

どうして泣いてるの。

お母さん。泣かないで。

言葉にならず、母に届かない。母が見えない。答えない。

傍観していた私は、いつの間にか小さな頃私になって父の脛に抱き付いていた。

泣き叫ぶ肩を支える、大きな手のひら。

お父さん。

あなたに触れたのはいつが最後だったでしょうか。

幼い頃はよく抱きかかえてくれた。

高い高いをしてくれた。

お父さん……。

「真咲さん」

父が肩を揺すってくる。

嫌だ、離れたくない。

「真咲さん、起きて」

その言葉で私は目を開く。

目前には、茶髪のどアップ。

「おわあっ」

思わず叫んだ。

いちいち近いんだってば。

冷や汗かいた額を拭う。と、頬を伝う生温かい感触。

「どつたの、怖い夢でも見た？」

私は泣いていた。

「別に」

顔を背け急ぎ拭う。

「いま、何時だか分かる？」

柔らかく笑った桜井和貴はベッドから手を離し、カーテンを開く。対面の壁掛け時計は、十二時を指していた。

「……嘘でしょ。私、そんなに寝てたの」

「ぐっすり」

またぶくくと笑う。この人は笑ってばかりだ。

「あ、起きたんね」

壁際の机に向かっていた田中先生が顔を起こし、

「熱もないし、体調悪くもなさそうやけど、疲れとるなら無理せず帰っていいんよ」

はい？

「宮本先生には熱があるって言っとくから」

「うんうん。田中ちゃん、僕もそう思う」

先生にちゃんづけかよ。

それに、そんな簡単に帰らせていいのかよ。

「それと。真咲さんにはお見舞いがきとるから。んじゃ田中ちゃん、お昼買いにいこっか」

先生の背中を押し、保健室から出て行く。

代わりにやってくるのは……

「これ、あんたの荷物」

不機嫌そうな小澤茉莉奈であった。

「更衣室にあつたあなたの着替えと、教室に置いとつた荷物。これで全部やる」

意外な行動に目を見張る。

「これ持ってさっさと帰りや」

正直、彼女に何と声をかけたらいいのか分からない。

「あ、ありがとう」

でも、どんな相手であれお礼は言つべきだろう。

「これで借りはチャラやからね」

「借り？」首をかしげると、

「あんたがかばつてくれてんろ。蒔田が投げたボール」

「あ……そうだっけ」

「桜井が教えてくれてん」

靴を履きのそのそと立つと、

「他にも教えてもろた」

何を？

「あたしがどういうことをしとつたのか」

気まずそうに視線を揺らす彼女。背後の窓には渡り廊下。お昼どきのせい、通る人が増えてきた。

「すまんかった」

そんな人目を気にせず、小澤茉莉奈は私に頭を下げた。

寝ぼけた頭では、目の前の光景が直ぐに理解出来なかった。

「い、いいよ別に。気にしなくて」

咄嗟に首を横に振ると、

「あたし、離婚しとる人つていい加減な人ばかりや思うとつて」

「まあ、多少そうかもしれないね」

認めつつも、口許が引きつる。

母にはああ言つたけれど、人にけなされるのはいい気がしない。

それなりに親への愛情があるということ、この時私は認識した。「中学ん時なあ、山中町の不良が一杯おってマジ迷惑しとってん。そいつらの親、揃って離婚しとるんよ。高校来ておらんからよかつたあ思うたんに、あんたが来たときにまたか、って思ってた。ツンツン気取って馴染もうとせんし、あんた、地味な振りして裏番張つとるんやないかって」

「謝ってるのかけなしてるのかどっちなの」  
地味な裏番つて何ですか。

「せやけど桜井は言うんよ。都倉さんはそういう人やないって」

「彼が？」意外な言葉だった。「何て言ってたの、私のこと」

「それは内緒や」

ここに来て彼女は初めて笑った。

「んじゃ、玄関まで送るわ」

やや肩透かしを食らいつつも、肩を並べて保健室を出た。

廊下の窓からは、緑生い茂る中庭の向こうに職員室が見える。

窓際に立つ人影は、宮本先生。

微笑んでいる気がした。

ガラス窓に光が反射する眩しさに顔を逸らす。

もう一度確かめようと目を凝らした時には、先生の姿はもうそこにはなかった。

玄関の戸を開くと、血相変えた母がやってきた。

「学校から電話あつてんけど、大丈夫なが？」

「別に、平気」

口を利くのはあの日以来。言葉少なに部屋に戻る。

道中、大人の目を集めて不快だった。こんな時間に学生がジャージ姿で何をしているのかという露骨な視線を。

学校から電話が入らなくとも、私の帰宅は伝わっていたかもしれない。ゲーセンがあつたとしても、きつとこの町では学校をサボれない。

乾いた笑みが知らず出た所で、コンコン、とノック音。

開かずの扉を叩いた主は、祖母だった。

「お母さんから聞いてんけど、具合大丈夫け。お昼まだやる？ 油っこいやろし、代わりのお昼持ってきたからお弁当出してくれんか」

「別に、平気だよ」

いいから、と再度促され、交換でお盆を受け取る。

倒さないよう注視すると、麦茶の入ったガラスボトルと氷入りのグラス。おかゆと味噌汁が乗っていて、

「食べたら廊下に置いといて。下まで持ってこんでいいさけ」

「忙しいのに悪いね」

表を通つた時にお客さんの声を沢山聞いた。平日の昼はどうやら忙しそうだ。

「高校生がなーにを気い遣うとる。真咲はうちの大事な娘やるが」  
「娘って」孫でしょうと私は笑った。

扉を閉める前に、祖母は愉快げに言い残す。

「そのおかゆ、お祖父さんが作つてんよ。ボールがぶつかった、熱があるって聞いたらびっくりして茶碗割つてもうて。あーんな慌てたん見たが久しぶりやった。真咲に見せたかったわ」

その台詞が頭の中でエコーする。

……お祖父ちゃんが。

梅が乗った薄味のおかゆは、やっぱり塩味が利いてしまった。

\* \* \*

翌朝、教室に向かう足が重い。

登校拒否をする心境が今なら分かる。

灰色の扉を開けると視線を一気に集めた。見ないようにして自席に座る。

入り口近くの席。目を合わす者はいない、挨拶する者もない。いつものこと。

かばんから教科書やノートを取り出す。

休んでいる間に配られたのか、机を覗くとプリントが入っていた。出そうとするとひらり、足元に落ちて、

「おい」

下に潜った所を急に呼ばれ、『ゴン』と後頭部に激痛。

「痛ったあ」

涙目で体を起こすと、あなおそろしや。

黒い城壁、蒔田一臣がそびえ立っていた。

「お前がフケていた授業のノートだ。やる」

城主はバサツとノートを机に投げ落とす。

「フケてなんてないけど。人聞きの悪い」

無視して彼は去る。が、二、三步進んで立ち止まり、

「頭と顔はそれ以上ぶつけるな。馬鹿になる」

それだけを言い残し、窓側の自席に戻って行った。

私は怒り心頭。近くのクラスメートはくすくす笑う。

「あたしも貸そうと思ったんやけどいらんか。蒔田、頭いいもんな」  
今度は背後から声をかけられた。振り返れば、

「小澤茉莉奈……」

「あんだ、その言い方止めてくれん？ 小澤か茉莉奈でえーよ」と  
彼女は顔をしかめる。

「なら、小澤さん。今日使わないノートがあれば貸して貰ってもいいかな」

「なんでや」痛む後頭部を摩る私に、彼女は怪訝な目をよこす。

「出来ればノートを見比べたいし。同じ授業でも人によってノートの取り方は違うから、それ見るいい機会かと思って」

「あんだ、変わつとるな」ハッと呆れた息を吐く。

結局彼女はノートを手渡し、去り際小声を残した。

「なににせよ、元気そーでよかったわ」

急に優しくなつて、気持ち悪い。

昨日の敵は今日の友？

でも、ちよつと嬉しかった。

一人ニヤけていると、「おーい。ホームルーム始めるぞ」と、宮本先生が入ってきた。

起立、礼、着席のあとに私を見て、

「お、都倉。顔は大丈夫そうだな」

どつとクラスが湧いた。

「宮本先生、止めてください」

私の声は空しくかき消された。

この先生、ちよつと黒髪の彼に似てる。

お昼どきの屋上。

残暑を避け、入口から左手の日影を選ぶ。

壁に背を預け、足を投げ出して座る右にお弁当、左には黒髪の彼と小澤さんのノート。

お行儀悪いけど、誰も来ないからいつか。

お弁当の蓋を開けると、ばたん、と扉が開いた音。

「真咲いー」

ばたばたと走り回る足がぴたつと停止。

私を見つけて一直線。

紗優だ。

驚きのあまり、タコさんウィンナーが箸から滑り落ちた。

「聞いたよー。小澤にいびられとったんやって？ 大丈夫やった？ あいつは四組のボスやから気いつけならんよ。まっさか、こんなところで食べるとは思わなかった。あたしも弁当持ってきたから食べよ。あ、その時計、ピンクで可愛い。プライベートルーベルのやる。いーなー」

「ちよ、ちよつと紗優、落ち着いて」

一旦弁当を置き、満面笑みの紗優を制した。

「どうしてここが分かったの」

「尾けてきちやった、真咲のこと」

ストーカーかよ。

「だって。気になったんやもあーん」

口をあぐりと開けた私に、甘えるような声と上目遣いのセット。モデルみたいに綺麗な笑顔を見せたと思ったたらこれだ。私が男だつたらイチコロ。

じゃなくて。

「学校では顔合わせなかったよね。関わりたくないのかと思ってた」

意図せず不満げな言葉がこぼれる。

「ごめんね。なんか、あたしが失敗したことさしたないと思って」  
眉を下げて悲しそうな表情。どんな顔をしてても美人は美人だ。

「失敗って?」

「和貴んとこばっかり行つとつたし、一組であんまし仲いい子出来んくて。同じクラスに女友達がおらんと大変だよ」

「確かに、そうかも」

女子グループで顔色ばかり窺っていた頃を思い返す。移動教室や学校行事の時、面倒だけれど孤独よりはよかった。

「あたしは小澤に嫌われとるんよ。真咲は小澤のグループにおつたし、あたしがうるちよろしとつたら真咲までも嫌われるかもと思つて」

「かも、……しれないね」

強気な瞳を思うと頷ける。

「和貴からも止められとつて。んで、」

お弁当で口をモゴモゴさせる紗優は一旦ジュースを口に含むと、

「最初の二週間はクラスで馴染む大事な期間やから邪魔しちゃ駄目だよ、って」

「はは」

その大事な期間に思いきり浮いてましたよ。

「マキも、ホントは心配だったみたい」

嘘でしょう。

否定するつもりが、強風にはためく白いノートに妨げられる。

置きっぱにしてたからだ。

慌てて左向いて表紙を抑える手が、止まる。中身に違和感を覚え、これ……。

「真咲のことずっと見とるし。気づかんかった? 放つといていいのかって和貴に聞きに来てんよ。ちゃんと考えとるって答えるんに、困つとつたみたいやな。」

あのかな?

和貴がうちに来て、『みんなで簡単に楽しめて一体感があって結束力が持てる遊び』ってないかな、ってゴチャゴチャ言つとった。ちょうどそんな時、怜生がドッジボールやって帰ってきたんよ。ルーとか色々聞いた。つた。

和貴、相当ぶちキレてたから、あれあいつの作戦だよ。

マキは多分な、ムカついたから小澤に当てに行つたんやわ。まさか、真咲が顔面ブロックするなんて思わなかったやろね。あははっ

耳に入らず、私はノートを食い入るように見ていた。

体育以外の授業が一冊に纏められている。

正確に言つと、真新しい大学ノートに各授業のノートのコピーが糊付けされ。上からインデックス代わりに、授業名を書いた付箋が貼られ。

黒板を写した以外はよくよく見ると鉛筆書きだ。何限目、何時から開始、教科書の何頁から何頁まで。果てには担当教師の名前までも細かく。

一度コピーを取ってから書き足したのだろう。授業中、別紙にメモを取るかして。

ふふつと笑いがこぼれた。

こんなに几帳面なのに、何故わざわざ新しいノートに貼り付けているのか。

その不器用さに笑えた。

「真咲、聞いたる？」

「ぜんぜん……」言葉と共にノートを胸に抱き締めた。

もーっ、と紗優は膨れるも、心には温かいものが流れる。

こんな私たちの間を風が吹き抜ける。

いい気持ちだった。

「和貴に任せっぱやつたけど止めた。これからは遠慮せんよ」

歯を見せてニカッと笑う紗優。

私もつられて微笑む。

それが、新しい学校生活の始まりの合図だった。

「台風の影響も心配されましたが、皆さんの努力の甲斐もあり、無事に今日という日を迎えられるました」

空は遠い、曇り空。

九州地方へと強い台風が過ぎ去った余波で、厚めの雲が遮断する太陽光。気温が高過ぎないこのくらいの天候が丁度いい。

砂ぼこりの舞う運動場で、気を付けをして校長先生の挨拶を聞いていた。

お決まりの「宣誓、私たちは……」に続きラジオ体操が開始。これまた久しぶり。一年ぶりだろうか。ぴよんぴよん跳ねたり、肩をぐるんぐるん回しながら思う。

終わると、体が軽くなった、スッキリしたと男子が言っていた。確かにそうかも。

開会式終了後は、二年四組に与えられたスペースに歩いた。

椅子はなく、お花見みたいなビニールシート席。席割りには自由らしいが、クラスの女子からは、一番前に座りなと譲られた。背が低いから気を遣ってくれたのだろう。

言葉にあやかって座り、運動場を見回す。

大きなトラックを外周から埋めるように各クラスの席が位置する。先ほどまで向かっていた先、仮設テント下には体育委員と放送委員もいるが、大多数は中年の先生だ。白い扇子が何か疎ましがるように一様に揺れる。

最初からその調子だと先が思いやられる。

自分の心配を忘れ、少し気の毒に思った。

「都倉」

背後からいきなり呼ばれ、

「おわっ」

例の五人組だった。

「あんた、いい加減慣れなや。いちいち驚きすぎやて」と小澤さんは呆れ顔。

「都倉さん。体育祭初めてやし分からんことだらけやろ。何でも聞いて」

「おお、ありがたい。目の前の彼女が天使に見える。」

「そうやね。こちらは二回目やから、先生もあんま説明してくれんかったよな。赤軍と白軍に分かれとるんは知つとる？」

「ぶんぶん。」

首を横に振る。

小澤さんは肩を落とす。

「このシートも赤、目の前のロープも赤、その頭に巻いとるハチマキも赤やろ。偶数のクラスは赤、奇数のクラスは白。で、終わって総合点が高いんが勝ち」

言われてみれば確かに、運動場とビニールシートを仕切るロープの色は赤、座るビニールシートも赤。

編入にあたって試験もしない適当な学校なのに、妙な所でこだわるものだ。

「で、こつちと向こうに競技順と点が貼られとるんよ。こつからずと左に行くところのが本部」

別の彼女が左斜め奥を指す。

楕円形にトラックを囲む長辺にはテントと向かい合わせに、もう一つが立つ。横にはロープのかからない入退場のスペースがあり、奥に大きなホワイトボードが二、三置かれていた。

「体育委員が時々声かけてくれるんやけど、いちお見といた方がいいよ。あとで行こつか」

「うん。ありがとう」

「応援始まるよ。赤やし応援せんと」

後ろ向いて聞き入っていたが、小澤さんが遠く見やる目線を追うと、入退場口からぞろぞろと現れたのは黒い学ランを着た集団。

グラウンドの中心へとぞろぞろ進む。額に巻く赤いハチマキは足

首ぎりぎりの丈。かなり長い。

横二列に並ぶと止まった。少なくとも二十名はいるようだ。

本部から右に一直線を描き、緩やかなカーブが始まる位置に陣取る私たちには、彼らから向かって左側の人間がよく見える。

「あ。あれって……！」驚いた。

「クラスから二人ずつ男子が出るんよ。四組からは長谷川はせがわと蒔田」  
最前列の左端に、蒔田一臣が立つ。

ハチマキの終わりが足首よりも上の位置。背が高く、足も長いから。

腰の後ろで両手を組み、眼鏡を外して前を見据える姿は遠目にも凛々しい。孤頭の黒豹を思わせた。

「こういうの、しなさそうに見えるんだけど」

見惚れるのを止められぬまま呟きをこぼすと、

「これ一つ出た人は、残りはりレーだけで他が免除になるんよ。長谷川くんは体育委員で忙しいし、蒔田くんは足がちよつとね……」

最後の言葉が引っかかる。

「足って。彼、どうかしたの」

「シート、黙れや都倉」

私の剣幕を小澤さんが諫めた直後、太鼓の音が響いた。

正面に置かれた、大きな和太鼓。一人がドドドツと打ち鳴らす音に合わせ、躍動する彼ら。

床を右手拳で叩くと思えば、左足を高く空に蹴り上げて体を一回転。着地し、水平に左ストレートを繰り返し出す。

淀みなく全員が同じに動く。時折かけ声を上げながら。

私は黒髪の彼、蒔田一臣から片時も目が離せなかった。

相変わらず仏頂面だけれども。

眼鏡よりも大きく感じる切れ長の目。通った鼻筋、薄くてやや大きな唇。白い額にはやや汗が滲み。

きびきびと動く彼は、その全てを輝かせていた。  
動く度に八チマキも揺れる。まるで彼に合わせて赤い炎が舞って  
いるよう。

にしても、女子の歓声がいやに大きい。どうやら白い陣地からも  
だ。気付いて苦笑い。

一分ほど演舞が続くと、太鼓の音が止んだ。  
すると、向こうのテントから何かが走り出る。

サンタクローズ!?!  
何事かと辺りがどよめく。

赤白の服と帽子に白いあごひげ。サンタクローズに扮した彼は和  
太鼓に走り寄ると、叩いていた男子の肩に触れ、『あっちへ行け』  
と横二列を指差す。

いやいや。

その男子は首を振るが、サンタは何度も指す。  
仕方ねえな。

デイラン・マツケイばりに大げさに肩をすくめ、列に加わった。  
本部側を振り向いたサンタは、背にしょっていた袋から何かを取  
り出す。

ラジカセ?

それを置き、和太鼓に向けていたマイクを寄せ、きよるきよる見  
回してスイッチオン。

ほわん、ほわん、ほわん、ほわん。

音楽がかかると、両手を上げて手拍子を促す。

学ラン集団も顔を見合わせながら手を叩く。

サンタは走り去る。……いなくなるのかよ。

すると歌が始まった。ウルフルズの『ガッツだぜ』。

先ほどとは違って変わった動き。

サビに合わせて髭ダンス。

前列の男子がしゃがんで手を体の前でクルクルさせ、後列の男子

は立ってクルクル。

腰をノリノリに振りつつ、左手を頭の上でぶんぶん、下にぶんぶん。まさにサタデーナイトフィーバー。

と思えば、カクカクジエンガの踊りを始めたり。

「あはは、何あれ」

場内は爆笑。

そして最後の一言で、ポケットからクラッカーをパン！と鳴らす。「うわっ」

予想外に大きな音に驚く。

「赤軍応援団の皆さん、お疲れ様でしたー」

放送席からアナウンスがかかると、戻ったサンタと学ラン男子が落ちたクラッカーのゴミを急ぎ拾う。そして走り去った。

「何だか……シユールだったね。いつもあんな感じなの？」

「全然。去年はもっと応援ほかった」と不満げにこぼしつつ、隣の彼女は未だ涙目だ。

「うちのクラスから出てるのって、長谷川くんだけ。どこにいたの」

「サンタ」

えええ！？

小澤さんが弾かれたように笑い出す。

「他の男子はごつつ練習しとったがに、あいつつは……。あんなんやったら誰でも出来るわ」

「そう、かもしれないね」

実は、彼の顔と名前が一致していないのだが、その日のうちに記憶することとなる。

「桜井が走るとこなんやからボサツとせんと。見とき」  
『天国と地獄』が流れ始める。

黒髪の彼を脳内から消せずボサツとしていた私がグラウンドを見ると、丁度桜井和貴がスタートを切った。

手を細かく振る独特なフォーム。足の回転はタイヤのように速い。大差を付けてゴールする彼。一位の証である白いテープが体に巻き付く。顔を上気させ、歯を食い縛っていても、やはり可愛らしかった。

邪気のない子リスから、しなやかに走り抜ける猫へと変貌している。私の目にはそう映った。

「あいつ、勿体ないよね。せつかく足速いんに」

「彼つて陸上部でしょう。勿体ないつてどういう意味」

「まま、ほら次、田代くんが走るよ」

小澤さんが何か言いかけた所を、他の子が制止したような。やや釈然としないまま前を向き、競技に見いる。

直ぐに女子の順番が回り、紗優は一着でゴールしていた。わあっ、とそこら中から男子の歓声上がる。

「……あんたら。あれ、白軍なん忘れとるんか」

競技終了後も騒ぐ男子を諫める小澤さん。

その声は彼女が出せる限りで一番低い声だ、おそらく。後頭部しか見えず表情は分からないが、ちよつと怖かった。

「なんや小澤、ひがんどるんか」

「宮沢さんてホーント可愛いよなあ」

「一緒のクラスになりたかったわ。小澤なんかやなくて」

「俺、あの白いハチマキになりてえー」

「なんやと!?! あんな軽い女のどこがいいん」

と小澤さんが立ち上がった途端、

「真咲い、遊びに来たよお」

左後ろを向けば、屈託なく笑う紗優が。

「……紗優」

かける言葉が見当たらなかった。

空気の読めない男子たちは、紗優の登場を喜ぶ。

深緑でリブの付いたTシャツ。前にでっかい『宮沢』の名札。緑のジャージは無造作に捲り上げられた七分丈。前髪はヤンキーみたくピンクのゴムでちょんまげでも、美少女アイドルのコスプレのように美しかった。

めっちゃ疲れたあ。

言いながら私に近付くが、立ったままの小澤さんをふと見やり、  
「軽いつてのは言い過ぎ。あたしはいつでも真剣なんやから」

怒るのではなく、薔薇の花を咲かせて微笑む紗優。

あ、もう駄目だ。私が男なら骨抜き。

「あなたの真剣は一生に何回あるんや」

呆れつつ小澤さんはどかっと腰を下ろす。

「光源氏やっていつでも本気やってんよ。それに、好きになれるうちが華。小澤つていま恋愛しとらんの？」

微笑みつつ、私の隣に体育座り。

「あんたアホか。付き合つとられんわ」

まあまあ、と周りの女子が宥めに入るが、私は二人の会話を聞くことにした。

小澤さんは、嫌いだとか言いつつも結局会話を選ぶ。私を嫌っていた割には優しいから。軽く怖いけど。

ともかく、嫌いイコール好きなのかもしれない、小澤さんは。

「あんた、東工の香川と付き合つとったやろ。手ぐせ悪いんにどこがよかったん」

東工とはこの近くの工業高校。馬鹿ばっかとクラスの誰かが言うていた。

「あたしの信念は、終わった恋愛にも誇りを持つことやの」  
「誇り？」

「別れたからって嫌いになるうとは思わん。だって、好きやからつき合っんよ。元彼をボロクソ言っんは、選んだ自分を蔑むことやわ。女として恥ずかしい」

……紗優。

どこで、そんな恋愛哲学を。

「分からん。ほんま分からんわ、あたしには」

小澤さんに同感だ。なんせ、そこまで深い経験をしていない。黙って頷く私を紗優は穏やかに見つめ返す。

「嫌いなところも好きなのも言い出すときりないやろ。要は、相手のどこを見るかなんよ。小澤って、好みじゃない男に惚れたことないん。タイプじゃない男でも、きっかけさえあれば好きになれるもんやよ」

紗優の笑顔が眩し過ぎて、空を見上げることで逃れると、

「きっかけねえ」

キーンと上空から音が響く。

「小澤ってさ、一目惚れしたこともないん？」

厚く薄暗い雲の中を、白い光が差す。

「あんたはもー。そんなんばっかやが」

その光の筋に沿うように、小さく飛行機が飛んでいる。

「あー。なんかこんな話しとったら彼氏欲しくなってきた。ドラマみたいな偶然だらけの恋、してみたいわあ。東工も緑高も、知ってる男ばっかであつたらんよ」

飛行機は、後ろの校舎の方へと消えていく。

「ドラマみたいってどういうん。街で見かけたかつこいやつが転校生で、高校で再会とか？」

ある一点で、留まる。

「いいねー。ピンチを助けてくれるとか、倒れたところを介抱して欲しい」

見間違いかと思って目を擦ると、

「ちよつとごめんっ、トイレ行つてくる」

傍に置いていたスニーカーを履ききらぬままに駆け出した。

あんた、このあと騎馬戦なんよ。早く戻ってきいや。

小澤さんの声を置き去りにして。

こんなに息が切れるほど全速力で走るのは、体育の成績も捨て気味な私には珍しい。

保健室前の渡り廊下に靴を脱ぎ捨て、靴下なのもいとわず、取り付かれたようにひた進む。

階段を上りきった先にはオレンジの扉。

急ぎ開くとそこには、赤いハチマキを風になびかせた学ランの後姿。

「見つ、け、た……っ」

息乱れ、膝に支える手。体が跳び箱をされる人のように折れ曲がる。

飛行機を追っていたら、屋上に黒い影が過ぎった。赤い色が一瞬見えた気がして。

やっぱり、蒔田一臣がそこにいた。

突然の来訪者に驚く様子もなく、毅然と遠く見る背中。

呼吸を整えつつ、歩み寄った。

隣に行つていいのか、惑う。

あの目を思い出すから。

けれど、気になって仕方がない。

「何しに来た」

ほら、並んでも前を見据えたまま見向きもしない。

「お詫びと、お礼を言いに」

眼下には、鉛色の体育館の屋根。周辺は同じ色の瓦屋根と田畑。

奥には低い山々、右手には体育祭に沸くグラウンド。

視線は、この中のどれを選ぶのだろう。

端正な横顔、確かに眼鏡は外れている。

遠くだとよく分からなかったけれど、ハードジェルで固めたややリーゼント。長い前髪で隠れがちな目元や白い額が露わで、凄く似

合う。

……ちとヤンキーっぽいけど。

「礼など言われる筋合いがない」

突き放すような響きに、出かけた溜め息を押し殺した。

「詫びも心当たりがないんだが」

「この前、酷いことを言ったと思って」

「俺の足の話でも聞いたのか？」とフツと鼻で嘲り、

「同情されるのは嫌いなんだろ。だったら」

「誰も、何にも言っていない」

「なら、んな顔すんじゃない」

遮る私に、彼が初めて顔を向けた。

「……足、気にしてるみたいだったから。夏休みに初めて会った時も引きずってたし」

見透かすような強い目線に、合わせられず俯く。

「みんな、一言も触れない訳じゃなかったけど、言いかけた人を止めたりしてた。あんまり触れちゃいけないと思って、聞き直したりもしたくなかった」

ボソボソと弁解染みていることにも自己嫌悪を味わったが、

「よく、見てんだな」

感心したような、和らいだトーン。それだけでも嬉しくなってしまう。

深く息を吸い、町を眺める。

「東京に住んでた頃、いつも一人でマツクに行つてて、二階のガラス窓から外を眺めてたの。私みたいな高校生でも、ギャルもオタクもいて。合コン前の大学生や不倫してる人。慌てて買い出しに走る店員さんとか」

人の行き交うスクランブルが臉の裏に浮かぶ。

「色んな人が生きてて。動いて、あくせく働いてる。そういうのを見てると、私も一人じゃないって思えるし、好きだったんだよね。

……この町は全然違うけど」

臉を上げると緑だらけ。のどかさに自嘲的な笑いを込めて右を向くと。

ほんの一瞬だった。

彼が、笑っていた。

正確には、軽く口角が上がる程度。なのに、その微笑を見た瞬間、私の心臓がバツクバク鳴り始めた。

ヤバイ。

ヤバイぞ。

風穴でも開いたのか。

それとも心臓病か？

「夏会った日、退部届を出しに行ってた」

真つ赤な顔で胸に手をやる挙動不審な女から目を離し、

「サッカー部のだ。総体で怪我して、選手としては使い物にならない。同じ所を何度もやってるからな」

抑揚がなく淡々と話す声。

けど私には、それが悲しみを助長して聞こえた。

「障害物、女子が始まっているが、お前も次出るんだろ」白眼を大きくして右下を見やる彼に、

「やっぱ」

小澤さんが怒り狂う姿が容易に想像出来る。

「私、行くね」

「ああ」

走り出す方には目もくれず、手を軽く挙げて答えた。

入り口の前、ふと立ち止まる。

金網の前、一人きりの彼。

ほんのちよつと前まで孤独だった自分と重なり、

「こんな所に引きこもってないで、下でみんなと見なよっ」

「誰が引きこもりだ」

遠目だが、睨み付けているはず。

青白い怒りのオーラが出ているから。

「他に聞きたいことがあるれば和貴に聞け。」

……

……

「……それから競技」

以降の言葉は、戸を閉めて駆け出した私には聞こえなかった。

「あーんたはほんつとやる気ないんね」

「都倉さんも頑張ってんから。落ち着きい、茉莉奈」

「里香、あんたも悔しゆうないが。都倉担いで必死に走つとつたんに」

お昼休み。ビニールシートの上で皆が思い思いに時を過ごす。お弁当ではなく、おにぎりを食べるのが通例のようだ。

私もおにぎり。具は豚の角煮。

騎馬戦は、惨敗。秒殺だった。

私が闇雲に指示を出し、グラウンドの真ん中へと走り出たら、即、後ろとハチマキを獲られた。

足として支えてくれた小澤さんが腹を立てるのも無理はない。

……頭を冷やそう。

「ちよつと、顔洗ってくるね」

体育館裏の洗い場に向かう。ぬるい水が出きるのを待ち、冷たい水でバシヤバシヤ顔を濡らす。ふーっと息を吐き、タオルで水滴を拭いていると、

「どつたの？」

目の前には桜井和貴。

「おわっ」

大きく後ずさる。

「普段は落ち着いとるんに、なんで変な擬態語ばかりなんだろっね」

「近いのよ」

左を下にして水平にしたままの顔を、しっしと追い払う。

「そのうち病みつきになるよ」

自信がある人ならではの発言。

「暗い顔してるけどなんかあった？」

と、笑顔のまま核心を突いてきた。

聞いてしまったけど、聞いてよかったのだろうか。黒髪の彼のこ  
とを。

『和貴に聞け』

あの人の声がリフレイン。

「もしもーし？」

間近には、所在を確かめるように振られる手が。

「またどっか行っとったよ」

私はまたトリップしていたらしい。考えごとに没頭出来る迷いの  
森へ。

「なんか、悩んでるんなら相談してよ。僕、こっ見えて広いよキャ  
パ」

迷い子に差し伸べられる手。

目の前の子リスの甘い誘惑。

見守る木々が、そんな妄想を駆り立てる。

「紗優が来たときは元気そうにしとったんに。お昼にでも当たった  
？」

「……別に」

「じゃあなんに。誰に当たったのかなあ。なんか言われた？」

心配そうに眉根を寄せたと思えば、ふわりと微笑む。

そして木陰をウロウロ往復しながら、指折り数え始めた。

「紗優。小澤さん。そのお友達……でもなければ、みやもっちゃん  
？」

私の交友関係は、何と狭いのだ。

「じゃあ、マキかなあ？」

ビクツと肩が動いてしまう。

この反応に、足を止めて真っ直ぐに見つめてくる。当たり前だね、  
と笑いかけながら。

何て分かりやすいんだろう、自分。

「あの……彼から。怪我して、サッカー部辞めたって聞いたの」  
聞きたいことは和貴に聞けと言っていたから、お言葉に甘えよう

と。あの時の話を、溜め息と共に正直にこぼした。

「聞いたって。ま、マキから直接!？」

大きな目を更に見開くけれど、何をそんなに驚くことがあるのだらう。

「ふうーん……」

腕組みをして私の背後の体育館を見上げ、

「マキのことだから、片言で全然分かんなかったでしょう。僕が知ってる範囲でよければ」

ちよつと不満そうな表情をしたと思えば、真綿のように無垢な笑みを覗かせる。

そんな彼が紡ぎ出す、仏頂面の彼の物語。

生唾を飲んで、言葉を待った。

石灰で引かれたラインに指先を添え。

よーい。

ドン。

ピストルの音と共に一斉に走り出す。

長机に駆け寄り、箱にばら撒かれた四つ折りの紙を無作為に掴むと、

『眼鏡の人』

“借り物”競争でしょう。何故に人なのさ。

このコースの傍には白軍の陣地。友達に話しかける女子を尻目に、トラックを半周し赤軍の方へ向かう。

「とくらー」

「走れ」

「お題言ってみー」

二年四組のみんなが叫んでくる。

「あの。眼鏡の人って誰かいらない？」

助かった。知らない人ばかりで声をかけられなかった。

「長谷川は？」

「あいつは係やし、参加出来んて」

「蒔田は」

「俺、眼鏡ねえ」

膝を立てて座っていた彼がけだるげに顔を上げると、ああーっとクラス中が嘆く。教室に置いてるなら取って来い、と無茶を言う男子。

眼鏡の人は、二年四組にもう一人いたらしい。

「ああっ、みやもっちゃん」

誰かの声を皮切りに、

「せーの。みーやもっちゃーん」

田中先生と談笑しつつこちらに来る宮本先生に、全員が声を合わせて叫ぶ。

先生は何事かと驚くが、みんなに背を押され、

「宮本先生、一緒に来て下さい」

赤いロープをくぐると、宮本先生はやれやれと肩をすくめた。

「足は速くないからな。期待するな」

「先生、偶然ですね。私もです」

あとはゴールまで一直線。

『中学んときに靱帯切ったんだって。試合中、相手のスパイクが入って』

宮本先生と腕を組む。と言っても、届かないので手首辺りを掴む。怪我がちでもなんとかやってたらしいけど、六月の大会でまた痛めて。そんなとき医者に言われたんだって。

軽い運動はいいけど、サッカーみたいなスポーツは、もう二度と出来ないって』

がんばれ！。

みんなの応援が後押しする。

『マキは元々あんなだし、ぱつと見じゃ分かんないけど、やっぱり……落ち込んでる。』

そりゃそうだよな。必死に頑張ってたことを諦めなきゃならないなんて』

土を蹴り返し、闇雲に足を動かす。

『ああ、こんな話聞いたからって、腫れ物に触るような扱いはしないでね。マキはそういうの嫌いだと思うし。』

ま、真咲さんなら心配ないけど。マキの口開かせる女の子なんてそうはいないし』

何だ、本気を出せばこのくらい走れるんだ。

真実は重過ぎて、どうしたらいいのか分からない。

気付けば一着でゴールしていた。白いテープを切るのは生まれて

初めてかもしれない。

「四組の都倉さんですね。確認しますので、借り物が書かれた紙を出して下さい」

頭をかきながらやってきた男子。

「長谷川、頑張つとるな」

先生が話しかける先でメモをとる彼が、噂の長谷川くん……。

割とぽっちゃり体型。寝ぐせが目立つボサボサな黒髪は、ヘアスタイルに気を遣わないのが丸分かり。全体にそうなのか、極太の黒縁に囲まれた、牛乳瓶の底並みに分厚い眼鏡をかけて。

「貴女が噂の転校生ですか。どうですか。学校には慣れましたか？」

おいおい。同じクラスだよ。

「お前が慣れさせる側なんだろ」

先生の突っ込みを聞きながら、近くの競技予定表をチエック。

借り物競争が終わると白軍の応援合戦、三人四脚、部活対抗リレー、クラス対抗リレーまででやっと終了。

応援と部活対抗リレー以外の全部に出場する自分。

……ああ、今のうちに休んでおかないと。

気落ちしつつ、二年四組の場所に歩を進めると、借り物競争のB GMがまた変わった。

Chumbawandaの『Tubthumping』に続いて今度はsavage gardenの『I want you』が流れ出す。

もつとも、洋楽に疎い私は曲名など知らず、借り物競争はやけにノリのいい曲が流れるなと思ったただけだった。

「まさきー」

混沌としたグラウンドから、声。

一瞬。

自分が呼ばれたのかと思った。けど首を振って考えを打ち消す。男子の名前でありがちだし。正樹とか。

男の子の場合は『ま』にアクセントを付けるんだけど、私の場合

は『さ』に付けるんだ。

「まさきさーん」

そう、今の声みたいに。『美咲』と同じイントネーションで合ってるよ。

……って、

うん!?

入退場口の人混みをかき分けてグラウンドに臨むと、反対側のテントの前には金色に近い茶髪が、

「とくらまさきー」

仕舞いにはフルネームを呼び捨てだ。

……彼、借り物競争に出てるんだっけ。自分のことで精一杯で覚えてなかった。

茶髪くんこと、桜井和貴は辺りをきよきよ見回す。

動いていた顔が止まり、人混みの最前列に立つ私を捉える。

見つかったしまった。

両手を上げて「おい」と大きく振ってくる。

私? と指してみれば、大きく頷き、頭上に丸を作る。

そして。

私を指差す。……You。

その場で腕を小刻みに振り足を動かす。Run。

手のひらを上にし、左手の人差し指をくいくいと自分に向ける。

come?

首をかしげると、また自分を指し走るジェスチャー。

コミカルで笑えてきた。

何だか分からないけど、来いってことね。

私は彼の方へと駆け出した。

トラックに出ると、同じレースに出ている男子とぶつかりそうになり、

「危なっかしいなあ。ほら」

赤いハチマキをふわふわの前髪に絡ませ、八十年代のローラーズ

ケートで踊るアイドル風な髪型。笑顔と左手を差し出してきて、

「なっ、」

全校生徒の前で手を繋ぐなんて。

「いいから」

かつさらうように握られた。鼓動が走ることで感覚に追い付く。

女の子っぽい外見とは裏腹に、私よりも大きな手のひら。骨っぽくて、少し汗ばんで。当たり前だけでも、男の子なのだと思い知らされた。

遊びを楽しむ猫のように透き通った瞳が振り返り、

「走るよ」

「は……」

「いいいいい！」

引きずられるように走り出した。

速過ぎる。

繋いだ手が延びきって、メートル後ろを走るのでやっと。

さっき、足速いかもなんて思っでごめんなさい、とんだ勘違いでした。

「ぎゃああああ」

絶叫が響き渡った。

「……はい、四組は三位ですね。おめでとうございます」

先ほどと同じく、長谷川体育委員が出迎える。

何がめでたいのだろう。三位だよ？

桜井和貴が私を発見するまでに時間がかかったのと、途中でスピードを緩めたのを考えれば、結果は順当、いや、それよりましだったのだが。

「確認しますので、借り物用紙を見せて頂けますか」

青いキングファイルを胸に抱え、受け取った用紙を裏に広げると、瞳孔が開く。

私の顔を見る。

再度紙に戻る。

悠然と桜井和貴に流し目を注ぐと、

「あの曲が入ったCDを貸した時、『チェリーコーラの歌』と馬鹿にされてましたよね。その割にはどうでしょう。ぴったりじゃないですか」

素早く筆を走らせながらもニヤリ、不敵に笑った。

「……何の話？」

「都倉さん、ご存じありませんか、あの曲。あれは」

言い終える前に、桜井和貴が長谷川くんの頭をグーで叩いていた。それでも長谷川くんの笑みは変わらず、四位以下の確認があるので、と走り去ってしまった。

桜井和貴と二人、残されると。

彼がニヤニヤしていた理由よりも、一つ、引っかかることが。

「お題、何だったの」

「ふえい？」

意識はどこか遠くにあったのか、見るに慌てた。声まで裏返し。

「紙に、何て書かれてたの」

茶色く透明なその瞳を覗き込む。

「……………転校生」

長い沈黙のあと、ポツリ。逃げるように背を向けられた。

「転校生って。全校で一人だけだし。私がどこか行ってたらゴール出来なかったでしょう」

ふふ、と笑ってしまう。

「それに。嘘はつけない人だね、桜井くん」

ぴくり、肩が小さく跳ねる。

「人は、考える時は右上を、嘘をつく時には左上を見るものなの。

逆側の脳を使うとか聞いたことあるでしょう？ 今、思いつき左を見てたよ」

「僕、左利きだから」左手をひらひらされるも、

「残念。利き手は関係ないの」

「覚えとく」

振り返った彼は、頭に手をやり、困り笑いを浮かべていた。

「それから」

真顔に切り替わるとどんどんこっちに近付いてくる。挙げた手が

私の頭に伸びて、

なにになになに!?

と思つたら、後頭部へと回された。

どきどき焦った私の胸中はさておき、ハチマキの結び目を直してくれている。

だがその間は、左右は細身で筋肉のついた両腕、前方は均整のとれた胸板、斜め上からは美形に囲まれ、

「和貴でいいよ」

息も絶え絶えな私に、彼はやっぱり花開くように微笑むんだ。

剣道の稽古着を着た女子。野球バットを持つ男子を追うのは卓球部。ドンケツのチアリーダーは、吹奏楽部のマーチング時の服装らしい。

赤いロープを隔てて向こうの世界。

異色の衣装で蠢く人々を見ていた。

チラと後ろ見る。さっきまですし詰め状態だったここはがらんどう。

運動場に足を投げ出す私。

離れて右隅には和貴。

真ん中に座るのは長谷川くん。

興味なさげに天を仰ぐ蒔田一臣は後方右隅。

「君らは応援すらないのか」

後ろで靴を脱ぐ宮本先生の声だった。長谷川くんの隣に腰を下ろし、

「グラウンド見渡してみる。部活対抗リレーに出てないのは君らだけだ」

円周に見回すと、確かに他の組のシートは無人で、二つの入退場口には人だけだかり。

「長谷川。いい加減、部活入れ」

「結構です」

嘆きの息を吐き、学年主任に絞られるのは私なんだぞ、とぼやく先生。

「学年主任ってそんなに怖いんですか」

子泣き爺のような姿を思い浮かべて聞いてみると、

「職員会議の度に『二年四組だけだ』と毎度言われるんだ。前にも話したが、この学校は部活参加が義務。二年の夏になっても入つたらんのは長谷川くらいだぞ」

「先生に説教されても入んないなんてさ。長谷川って根性あるよね」  
首からぶら下げたハチマキを引っ張りながらアハハと笑う和貴に、  
先生は眼鏡のずれを直しながら凍てつく視線を注ぐ。

「桜井。君が幽霊部員というのを私が知らんとも思ってるのか」

……幽霊部員？

「蒔田も、例外と思つとるかもしれないが、文化部でいいから入れ」

明後日の方向を向いて「はい」と返事はする。いかにも口先だけ。

「都倉も。前の学校で入ってた部活を続けられればいいじゃないか」

「先生。私、帰宅部です」

肩を落としてうずくまった。

「先生、元気出して下さい」

お前が言うのかよ長谷川、とこぼす先生に、彼は驚くべき提案をした。

「僕たちで部活を作りますから」

「は？」

「はあ？」

和貴と私の声がユニゾンする。蒔田一臣は鋭い眼光を注いだ。彼の対角線上にいる私はモロに見てしまい、冷やりとする。

そんな殺気をもともせず、微笑を浮かべすらする勇敢な男がそこにはいた。

「体育祭の裏方をしていて驚きました。データの集計や記録を全部紙でしているのですね。何百人と人が動くのに殆ど手書きで管理するのですから、間違いが出やすい。一太郎やエクセルでもあれば違うはずなのに。」

かく言う僕も、パソコン本体は少々扱いますが、ソフトには疎いです。パソコンの勉強と、啓蒙活動や学校行事のお手伝いなども出来ればいいのではないかと

「エロゲー専門のくせによく言うよ」

茶々を入れた和貴に、長谷川くんは瞬時目を光らせ、

「桜井くん。ご自分の立場をわきまえて下さい」

口許は微笑のままに、何か思い出したように私に向き直ると、

「ああ、都倉さん。おそらく彼は最初から貴女のことを名前で呼んでいたはずですよ。それはですね、」

「余計なこと言うなっ」

顔色を変え、飛びかかろうとした和貴。宮本先生が立ち塞がり、落ち着け、と肩を抱いて座らせた。

「おい」

「蒔田くんも強制参加ですよ。NOとは言わせません」

凄む蒔田一臣にも平然と応じる。

「部活はもう、……沢山だ」

捨て猫のような悲しい瞳。心がずきんと痛んだ。

女子なら誰しも同じに感じると思うが、男性であるから違つのか、

「入らないと、言いますよ」

「何をだ」

先生がよそを向いたタイミングを見計い、立てた中指と人差し指を唇に当てて前後にスライド。それは、

煙草を吸う仕草。

「！」

私は小さく叫びそうになったが、蒔田一臣は眉間に皺を寄せるだけだった。

「作るのはいいが、顧問と、部員が最低五人はいないと部活としては認められんぞ」

和貴の頭をよしよしと撫でる宮本先生に、

「顧問は宮本先生。部室は情報処理で使っている教室。部員の残り一人は……」

絶妙のタイミングで足音が接近。

「真咲いー」

白い八チマキと美しい黒髪をなびかせてやって来たのは、紗優だった。

「ねえねえ、あたしの応援見た？ あれすっごい大変やってんよ。御輿担いだ日も練習しとって」

白軍の応援は、紗優をセンターに、安室奈美恵の『You're my sunshine』で踊るもの。赤白関係なしにみんな総立ちでコンサートのようだった。

この体育祭は、大差をつけて白軍が勝っている。

「宮沢さん」

意気揚々と喋り始めたのを妨げられて露骨に嫌な顔をしたが、桜井くん、蒔田くん、都倉さんと僕とでパソコン部を作ることにまりました。宮沢さんも入りませんか」

「入るー！」

周囲もびっくりの大声で立ち上がった。

「長谷川くん。私はまだ入るとは」

「めっちゃ楽しそーやん。真咲もおるなら入るよー」

私の手を取って立ち上がりさせ、フォークダンスを始めた紗優に、「ちょ、ストップストップ。私、今日はバテバテだから休ませて」

「そうなん？」

「このあとリレーがあるなんて信じられないよ」

息を整えつつ、長谷川くんの隣に座る紗優に続く。

「そういえば、紗優は何部に入ってるの。掛け持ちして大丈夫？」

あー。

私の問いに、コホンと紗優は咳払い。頬を赤らめて。

「宮沢さんは美術部で、ここだけの話、学校からの援助金を増やすための幽霊部員です」

少し落ち着いた様子の和貴も、長谷川くんを挟んで紗優の横に座る。

「何人以上だと最低いくら貰えるかは決まっとして。紗優は名前を貸してるだけなんだ」

和貴の補足に、宮本先生が苦笑いしている。

「それに紗優は、絵の方はあんまり」

「和貴いつ」

紗優の目が制止にかかるが、和貴のお喋りは止まらない。

「この前、怜生と三人で『ワンピ ス』のルイを描いたら、ニコちゃんマークに、カラスみたいな手足をつけとった。三本足のぶっ。」

「その背後に長いマントみたいなものが伸びてて。彼のパンチを現してみたいで」

すると、物凄く真剣な表情で長谷川くんは紗優に向き直る。

「宮沢さん。誰にでも不得意なもの一つや二つはあります。ですからどうか、一緒にパソコン部を頑張っ行っていきましょう」  
ぶっ。

「あはははっ」

和貴と私は大笑い。

笑いすぎ。と唇を尖らせる紗優に、やや不思議そうに目を丸くする長谷川くん。

温かな眼差しを注ぐ宮本先生。

よそを向いたままの蒔田一臣。

一九九七年九月二十二日。

そんな私たちのパソコン部が産声を上げた。

「みんな帰らんといてー。通してやるから」

夜が少しずつ長く、冷え込むようになってきたこの頃。

学校指定の紺のニットカーディガンとオフホワイトのベストを重ねる女子も増えてきた。紗優曰く、カーデを私服にするのが通だとか。

呼びかけに応じて席を立ち出すクラスメイトを茫と眺めていると、小澤さんが補足に入ってくれた。

正確には、急かされた。「はよせんか」

……体育祭から二週間後の十月頭には学園祭、下旬には校内合唱コンクールが控える。これから合唱の練習は連日らしく。

「十一月入ったらいきなしヒマなるんよ。三年なったら受験まっしぐらやわ」

勝手に分からないこの学校のことを、机と椅子を端に寄せつつ、小澤さんは嫌そうな顔で、加わった取り巻きさんは微笑んで説明してくれる。

何だかんだ言いつつも、私の世話を一番焼いてくれるのは小澤さんだったりする。結局優しい。

机を下げつつ一人ニタついていると、

「何を笑うとるん。気色わる」

前言撤回。

まあ、悪くもない。慣れてきた。

この時期は、生徒会と文化委員が大忙し。

五人組のうち文化委員の子は、もたもたする男子を急かし、お喋り止まらぬ女子を引導。女子グループでいる時は大人しいのに、しっかり役割をこなす姿には感心した。

合唱の課題曲は大地　　讃頌<sup>さんしょう</sup>。定番だ。

自由曲は硬い路線と思いきや、二年四組が選んだのは、スピッツ

の『空も飛べるはず』。自由曲だけみんなの声が大きくなるのは気のせい……などではなく、指揮をする男子から注意が入る。

「おい」

練習後、教室の片付けを終えると、

「行くぞ」

横を通り過ぎる蒔田一臣。

微笑を残して彼に続く桜井和貴。

鍵取ってきます、と小走りで去る長谷川くん。

迎えに来たよー、と入り口から呼ぶ宮沢紗優。

かばんを持って彼女に走り寄る。

これが、私の日常。

一、二年生の教室の入った棟の正面には、中庭を挟んで三年生の棟が建つ。

一旦一階に降り、渡り廊下を抜けてその別棟に向かう。渡り廊下から保健室の横へ繋がる小さな階段を上り、二階へ。

用があるのは、お世話になった屋上でも最奥の図書室でもなく、

手前のパソコンルーム。

「プリントを作ってみましたので、起動するまで目を通して頂けますか」

教卓上のパソコンの電源を入れながら、先生のような長谷川くんが授業風の部活を開始。

教室には縦に二列、パソコンを乗せた長机が向かい合わせに置かれている。入り口を背にして横並びに座る私と紗優。教室前方に近い紗優の正面には和貴、私の前には……

威圧感たっぷりの彼を避けてプリントを広げると、右上の文字に目が留まった。

『長谷川祐』

「はせがわ、……ゆうって言うの?」

「いえ、たすくと読みます」

「よく間違われんだよね。僕らも長谷川って呼んでるし。じゃあ、タスクって呼んじゃおっか」

「みんな下の名前で呼び合っとするし、そーしよー」  
ええっと、あの。

私は約一名を下の名前で呼べないんですが。

「そんなこと言わんと。真咲も蒔田のこと、マキって呼んでいいんだよ。彼とかあの人とかじゃなくて」

紗優に肩を叩かれる。

心の声、口に出てましたか。

ふへっと笑いで誤魔化しつつ盗み見ると、やっぱり仏頂面。

「俺は、どうでもいい」

「またまた、そんなこと言っちゃって。自分の彼女にしか一臣って呼ばせないくせに」

「そうなの？」

和貴の言葉に反応すると、ギロリと三白眼で返された。

「そろそろ始めますよ。いつまで喋っているつもりですか」

冷徹な声を発した彼は、手早くキーボードを打ちながら、私たちを冷ややかに見下ろす。

「……はい」一同縮こまりながら返事をする。

本当に怖い人は長谷川くん、もとい、タスクかもしれない。

「今日は時間も遅いので、タイピングにしましょう。ログインしてソフトを開いて下さい」

パソコン部の活動内容は、タイピング練習を主としたパソコン技術の習得。インターネットやメール操作などパソコンに関することなら何でも、といった所。

活動は週三回。

が、毎日のように集まる。

部活中は、知らないことばかりだとつくづく実感する。パソコンの操作は情報処理で少々習い、たまに家でインターネットをする程

度。

勉強がてら、二階の物置で放置されていたウィンドウズ九五を部屋に運び入れたものの、接続速度が遅く、『ピーヒョロロ』という音にイラつかされる。

学校に引かれるADSL回線ではなく、ISDNが一般家庭では主流。電話代並みにかさむ料金を気にしながらネットサーフィンをしているのは、私だけではないはずだ。

「なるべくキーボードは見ないようにして下さい」

「JとFの位置に人差し指を固定して、慣れないうちはキーボードの位置を確認しましょう」

「蒔田くんは背中が曲がっていますね。椅子の高さを上げましょうか」

「左手でキーを打つ時は、右手でShiftキーを押して下さい。」

同じ右手で打つと癖がついてしまいますよ、宮沢さん」

タスク先生が周回しながら、私たちに的確なアドバイスを残していく。

「タスクは部長より顧問の方が合つとるんじゃない」

苦戦しつつタイプを終えた和貴がほつと息をつく。

「僕などまだまだです」とタスクはやりわり首を振り、

「それより、下田先生が副顧問になって下さいましたので、教えに来て頂きましょうか。情報処理の先生でないと分からないことはありませんし」

「下田先生はテニス部の顧問やるが」

「それ言うなら、みやもっちゃんやって卓球部だよ？」

「どちらも弱小部というのは否めません。年中多忙というほどではなさそうです」タスクは微笑。「兼任は快く引き受けて下さいました。もっとも下田先生に依頼する前に、それとなく宮本先生に伝えておきましたか」

「タスクって凄いなだね。ね、この学校に強い部活ってあるの？」

私の素朴な疑問に、

「剣道部の奴の一部と吹奏楽部。あとは、サッカー部」  
青白い顔でぼそり呟くのは蒔田一臣。

地雷を踏んでしまったようだけど、言いたくないのなら他の人に  
言わせればいいのに。

三白眼を向けられ、蛇に睨まれた蛙状態だった私は、  
「それでは、一通り終わりましたので帰りましょうか」  
タスクの一声に救われた。

紗優と和貴とは家が逆方向だから校門で、タスクとは駅への道途中で別れる。

帰り道の殆どを過ごすのは、蒔田一臣。

部活が一緒でなければ、電車通学をしていることすら知らなかった。

緑川駅から電車で二十分の所に住むらしい。和貴が言っていた。

タスクがいなくなってから八分程度、駅到着までがいやに長く感じる。毎回何も話さず、沈黙が続く。

彼が少し声を発すのは、和貴と一緒に時くらいのもので。初めて会った日、生物室前での会話が一番長い会話だったかもしれない。

一対一の気まずさに耐えられず、家ここからの方が近いから、と嘘をついて立ち去ろうとしたこともある。

「その道は行き止まりだ」と冷たく返されたけど。

先を歩きながらぼそり呟いたのは確かに聞こえた。

「この大通りと国道使わねえと、夜は暗くて危ねえ。通るな」

走って追い付いた私は正面に回り込み、

「もしかして、心配してくれてるの」

眼光尖らせた睨みで返されたけど、表面に映る態度や言葉よりはいい人なのかもしれない。

私は、他にも知っている。

速足なのに、隣に合わせて速度を落としてくれる。

さりげなく車道側に立ち、いつも歩道の内側を歩かせてくれるのを。

「いらっしゃいませ」

目前のお客さんに微笑んだつもりが、忽然消えた。

「またきー」

屈んで姿を隠していたちびっこ一人は、飛び跳ねると抱き付いてきて、

「ちょっと。怜生くん」

「タキシードなんや、男装っぽくてかつこいい」

「男装っていうか、これはうちのクラスの男子メインなんだけどね。女子はオマケで着てるだけで」

「いらっしやい」

背に回された怜生くんの手を和貴が剥がしてくれた。

ふう、と息をつく。

怜生くん、紗優の弟くんは小学五年生で子どもだけれど、顔の高さが丁度胸の辺りだし……焦った。

「怜生ったら。急にいなくなっちゃ駄目じゃないのー」

紗優のお母さんがパタパタ靴を鳴らしながらやってくる。

学園祭初日のこの日。

体育会系の部活は外で屋台、文化部は中で展示。クラス単位では、教室を使って食事処やアトラクションを出す。

お店をやらない部活やクラスもある。が、パソコン部は参加以前に部の創設が申込に間に合わず、私たち部員は必然、クラスの手伝いが中心となる。

二年四組が出すのは、喫茶店。黒のタキシードを着たウエイトレストウエイターが接客。

タキシードは小澤さんのアイデア。美形の和貴とマキとで客を呼び寄せる魂胆だ。

肝心のマキはフケ気味だけど。

ああ、腹立つ。

「こちらの席におかけ下さい」

なんて花をしょって和貴が笑顔を振りまけば、キャー可愛い、と悲鳴のような声上がる訳で。

想像に漏れず、紗優ママは「カズくん可愛い」と髪をわっさわさ撫でていた。

予想外の客の入りに、こっちが叫びたい。

紗優ファミリーへの挨拶もそこそこに走り回っていると、肩を叩かれた。和貴だ。

「何よ」

この忙しい時に、と半ば立腹気味で振り向けば、深々とお辞儀をするご老人がそこに。

「うちのじーちゃん。真咲さんに挨拶したいって」

年配の方にお辞儀される機会など、皆無。

「お、恐れ多い」焦った。それでも頭を下げたまま。「ど、どうか顔を上げて下さい。そんな礼をされるような身分ではありませんせん、あつしは」

「真咲さん、大河の見すぎじゃない。じーちゃん、顔上げて」

和貴の口許がひくひく笑いを堪えている。

もう、この笑い上戸め。

さておいて、改めておじいさんに向き直る。

彼より少し小柄だがピンと伸びた背筋。根元が柔らかくうねる、角刈りの白髪。ぱっちり二重で色素の薄い瞳。顔は日に焼け、年相応に深く皺が刻まれるも、和貴がおじいさんの特徴を色濃く受け継いでいるのは誰の目にも明らかだった。

「新造さんとお孫さんですか」

「はい」

ウン十年後にタイムスリップした彼を見ているようで、場違いにも照れる。するとにこやかに、

「孫がようけ話します。ちんこいいちゃけな子やと。わしは、新造さんと戦地を共にした仲んでな。だが大事な仲間を喪うて、新造さんとこに足が遠のいたたげ。んだども、まえさいったゆうにばげんせなかつて。あじはおおしゆうすぎなみおつて新造さんに伝うといて下され。んで」

「じーちゃん。それ以上喋っても真咲さんには分からないって」

ほかん、とした私を一瞥して和貴が止めに入った。

「ああ、そう、そうやったな」

頭をかいて笑う仕草も、……そっくり。

いや、和貴が真似たのではないだろうか。幼い頃から大切に育ててくれたおじいさんの。

「和貴が迷惑かけたらんか、わしは心配でな」

「じーちゃん、変なこと」

「おじいさん。そんなことはありません」

何か言いかけた彼を私は遮った。

「和貴くんは面倒見がよくて、いつも沢山の友達に囲まれていて見ている……眩しいくらいです。転校したてで、誰とも仲よくなれなかった私のことまで気にかけてくれました」

「そうか、そうですね。話に聞いた通りのお嬢さんですわ」  
再びおじいさんが頭に手をやると、

「都倉ちよつとおー」キツチンから小澤さんの呼ぶ声。

「すみません、私はこれで失礼します。おじいさん、どうか楽しんで下さいね」

ありがとう、と微笑むおじいさん。

何故か耳まで真っ赤にした和貴を残して走り去った。

「あーんーたーはー」

戻るとエプロン姿の般若が待っていた。

仕切り戸を置いた裏に、ガスコンロや冷蔵庫を置いた簡易キッチン。人がわらわらひしめく真ん中に仁王立ちで、

「いつまで油売つとるつもりや」  
「いやいやいや。」

「小澤さん。和貴だつて喋つてたのに、何で私だけ」

「桜井は客寄せパンダなんよ、分かつとるやろが。あいつ置いとくだけで女が来るわ来るわ。じーさんや宮沢のおかんに優しゅうしとるなら尚更ポイント高い。」

……お陰で馬鹿忙しいから、ちよつくら紙コップの買い出し頼むわ」

財布を差し出されても、

「ホールはどうするの」

私の他に四人が接客中だが、どう見ても人手不足。

「あたしが出る。あんたのジャケット貸して」

「え、（その制服に）ジャケは似合わない……」

言い切る前にギロリと睨まれた。ジャケットを渡して逃げた。

ああ怖い。典型的なジャイ ンタイプだわ。

人混みを抜けて小階段に回る。こつちの方が人が少ない。

と、踊り場にタキシード姿を発見。

上の階段で斜めに遮られた視界に入るは、

蒔田一臣。

あの、サボリ魔っ。

文句の一つでも言つてやろうとした所を、

「蒔田あー」

下からドタタタ赤い髪が駆け上がり、脇目も振らずマキに飛び付

いた。

なっ、何!?

咄嗟に私は階段の陰に隠れた。

……というか、別に隠れる必要なくない?

引っ込みが付かないまましゃがんでいると、

「離せ、気持ち悪い」

「またまた。蒔田はいけずなこと言いよる」

ちらつと顔を出して見ると、知らない顔だ。Tシャツにジーパン。

鮮やかな赤髪は、多分スプレーで染めている。

「オレらのライブ、見にきてくれんか。大トリやから」

タキシードの背に巻き付いた腕をマキは払う。「興味ねえ」

上を見てくる彼と目が合いそうになり、慌てて引っ込む。

「ラストはあの曲使わせてもろうわ。せやから絶対聴いて欲しいね

ん

「あの曲とは、何だ」

「こないだ英語のノート借りたやろ。あれに英語の詞い書いたん見てしてもて。宿題やと違うの出しとってんな」。

稜子のことやろ、あれ」

……何の話をしているのだろう、関西弁の彼は。

りょうこ、って誰。

はあ、と大きくマキは息をつくと、

「ふざけんな。バンドの曲にしたってのか。著作権はどうなってやがる」

「オレ英語苦手やし、ごっつ蒔田に書いて欲しいねん。なな、俺らのバンドで詞書かへん?」

「書かん」

「あ、もうオレ行かな。ほなまたな、蒔田」

「おい」

足音が小さくなり、取り残された様子。

そろそろ顔を上げて窺おうとするが、

「まさきー」

静寂を破る大声に目玉が飛び出そうになった。靴底鳴らしてやっ  
てくるのは、怜生くん。

「やっ、ちよつと。しーっ」

人差し指を唇に当てて思わず立ち上がると、再度抱き付かれてし  
まい。

その肩を押さえながら踊り場を振り返ると、

マキの姿はもうそこにはなかった。

「都倉、休憩入りな」

会計を終えて小澤さんに告げられると、壁に掛かる時計は二時を過ぎていた。

朝食以降何も口に入れず、動き回った足が棒みたい。空腹を通り越して胃が変な感じ。

「長谷川、あんたも」

「これが終わったら入ります」

キッチン隅で、細長いグラスにチョコレートパフェを飾り付けていた。器用な人だ。

\* \* \*

窓の外は、のどかな秋晴れ。

「皆さんに、差し入れを買って行きましょうか」

気の利くタスクと売店を探す。

「外の屋台でいいかな」

陽の光を浴びたくて。頷く彼と玄関を出ると直ぐそこには、メイド姿の女の子が。

後ろ姿に見覚えがあるような。もしかして、

「紗優っ？」

「あー真咲いー」破顔する彼女はやっぱり紗優だった。

ピンクのミニのメイド服に、フリフリブラウス。ゆるく巻いた髪にレースのカチューシャ。『二年一組メイド喫茶』と書かれたポスターを胸の前に持って。

「一組って、……そういう趣向なんだ」

呆れる一方で、何を着ても紗優は確実に可愛いと思った。

「真咲もタキシードって変わっとる。やけど似合っとんね。ちっち

やな少年のピアノの発表会って感じじゃん」

「それ、けなしてるの？」思わず苦笑い。「でも、紗優が宣伝してたら効果凄いのと思うよ。お客さん沢山来てるんじゃないかな」

「どうか分かんけどなー。な、明日こそ一緒にまわるからね」

タスクそつちのけに喋る私たち。とそこへ、

「なんだ、紗優じゃねえか」

他校の制服を着崩した男子が現れた。紗優の上から下までをじろじろと眺め、

「けんちゃん……」

「紗優、知り合い？」

見るからにギャル男の彼はいきなり肩を抱き寄せ、

「元カレだよなあ、紗優」

とんでもないことを言った。

「ガラでもねえ格好しやがって。男に色目使ってるのか」

顎先を掬う手を振り払い、

「やめてよ」

びっくりした。

怒りに震える紗優を初めて見た。

「けんちゃん。もおおつ。置いてかんでよお」

今度は猫撫で声のギャルがやってきた。

この町でブリーチされた金髪を見るのは初めてだ。ギャル男とお揃いのスカートの柄。丈は短く、ルーズソックスは引きずるほどに長い。

「どおしたが、けんちゃん。つーかなにこの女あ」

アイライン極太の彼女が唇を尖らせると、

「なんでもねーよ。つか、誰にでも股開くあばすれなんかどーでもいいだろ」

それを聞いた瞬間、私の頭は怒りに沸騰した。

「……んだよ」

去ろうとした彼を立ち塞いだのは、タスクだった。

すると、紗優とタスクを交互見て嘲り笑い、

「おっ前、もう新しい男作ったのかよ。おい、気をつけるよ、こいつ誰にでも」

姿が消える。

一瞬だった。

タスクが片手一本で、なぎ倒していた。

どすん、と聞き慣れぬ音に続き、玄関のすのこ板にひっくり返った男。この騒ぎに、囲むように人が集まり始める。

野次馬でもギャルでも誰でもない、タスクしか見ず、怒りに顔を紅潮させた男は立つや否や拳を握り、

「よくもてめえっ」

大きく振りかぶったそれがまさに当たろうとするその時、

「危ないっ！」

紗優が叫ぶより早くタスクは右ストレートを避け、前につんのめった男の腕を掴むとぐん、と背に担ぎ、一気に地に叩き落とした。

鮮やかな一本背負い。目にも留まらぬ早業だった。

「野郎。ざ、けんなっ」

男は仰向けに倒れたままうめく。動けないのだろうか、タスクが膝を付き、耳に何か囁くと

海よりも青ざめる。

ゆっくりと腰を立てたタスクはやんわりと、群衆の誰ともなくに「すみません。彼、少し具合が悪いようですので、どなたか保健室に連れて行って頂けませんか」

ガバツと上体を起こした男は、「いらん、いらん」と叫びながら、ギャルの腕を掴み走り去った。

慌てて逃げた、と言うべきか。

「タスク、柔道出来るなんて意外だよ」

散り散りになる野次馬を眺めながら私は、

「正直、パソコンオタクなだけだと思ってた。……見直した」失礼なことを呟いていた。

「体育の授業で習った程度です。出来るなどとは到底言えません」  
「でも。凄かった」

まぐれですよ、と首を振り、「彼は頭に血が上っていましたし。右利きでしたから、最初の一撃を避ければ何とかなるかと思いましたが」

「なんとかなるじゃないよっ！」

のんびりした会話に、紗優が声を荒げた。

「タスク。あいつが誰か知ってるん？ 東工ん中でも一番ガラ悪い奴なんよ。フクロにされたら」

「大丈夫です」

そんなにヤバい人だったんだ。ふ、フクロって。

「タスクは分かったらん。あいつが、」

「東工の香川の上の上にいる、柏原かしはらという男」  
「淡々とタスクの口が動く。」「現、永迂とこま光愚蓮会とくれんかいの総長である彼は、僕の古くからの友人でしてね。兄はもう抜けましたが、その縁で何度か掲示板を作ったことがあります」

『あんだ、東工の香川と付き合っとなやろ。手ぐせ悪いんにどこがよかつたん』

その話に驚く前に、さっきのギャル男が小澤さんが前に話していた男だということに、私はようやく気がついた。

「ここまで言えばお分かりですね。香川が僕たちに手を出すことはありません」

「タスクって凄い。何者なの」

「ただのしがなない高校生です」  
悠然と私に微笑んだ。

「もういい。分かったけど、あたしなんかのために無茶しないで」

「貴女なんかのためだからです。あんな顔をされては、止めるのが道理というものでしょう」

ますます泣きそうに顔を歪ませる紗優。

私が知る限り、紗優とタスクが二人だけで話すのは、意外にもこれが初めてだ。

「タスクはいつつも上からものを言っとする。はっきり言えばいいや。馬鹿な女やと思っとするって」

「そんなことはありません。人には誰しも、色んな過去がありますから」

「ほらやっぱり」

「色んなことがあったからこそ、今の貴女があるのです」

……私、前に同じようなことを言った気がする。マキに、和貴のことまで。

って、おっと。

見つめ合うお二方。私は完全お邪魔虫。

「今の、魅力的な貴女が。」

彼が貴女をけなすのを見ていたら、体が勝手に動いてしまいました。た。

……つまりは、仲間として大切に思います」

最後に聞いたのは、タスクのキザったらしい台詞。

お陰で差し入れ買い忘れて、小澤さんに怒られてしまったではないか。

どうしてくれる。

「占いやつて行こーよ」

「あ、クレープ屋やん。チョコ食べん？」

「カキ氷も食べたいなあ。お昼近いしどうしよっか」

昨日は働きに働いたので、今日は沢山休める予定。

その分、マキが沢山働くはず。

紗優と過ごす休憩は、楽しいんだけどめまぐるしくてちっとも休憩にならない。

中庭に入り、キャンプ場で見かけるような木のテーブルセットに買い込んだ食料を広げてようやく一息ついた。

「タスクって、一緒の中学なの？」

お好み焼きを箸で分けつつ聞いてみると、

「ううん、喋ったのつい最近。一年ときもクラス違ったし」

紗優のオムそば。少し冷めた私のに比べて、ホカホカ湯気が立って美味しそう。

彼女は器用に切り分けてパクパク口に運びながら、

「永迂光愚蓮会。タスクが言うとならやろ？ あの集まり、あたし行ったことあるんよ。男に付いてって」

「バイクぶんぶん走らせるやつ？」

ハンドル握る仕草なんてしてみると、

「そ。時々そこで顔合わせてん」

意外な事実まで付け加わり、お好み焼きを吹きそうになる。

「そんな風には見えないよね。昨日は驚いたけど、格好よかった」

「そっやねえー、かつこよかったあ……」

紙コップの麦茶をストローですする紗優。

んん？

頬がほんのり紅を帯びたような。

「紗優。恋する乙女の表情してるよ」

「からかわんという。そんなんやないから」

「きつかけさえあれば好きになるもんじゃなかったっけ？」

オムそばを平らげ、今度はクレープにありつく。その細い体のどこに消えるのか。

「そういう真咲はどうなが」

「私？」

「マキに和貴」

からかったつもりが手痛いカウンターを食らった。

「そんなんじゃなくて、普通にクラスメートだよ」

「恋心がパーセントもないなんて言わせんよ」

苦笑いしても、笑顔の尋問からは逃れられそうになく、

「よく……分からない。二人は誰が見ても格好いいし、魅力的だと思う。友達、というほど親しくはないけれど。」

や、私がどうこうって言うより、二人が私をそういう目で見てないのは確かだよ」

「そお？ マキも和貴も、いまは彼女おらんよ」

半分平らげたクレープを手に、首を傾げる。

「特に、マキ。私とは全然喋らないし。冷たい人じゃないけど、壁作られてるって思う。」

嫌われてるのかな……」

影で悪口を言ってるみたいで、益々気が落ちる。

「じゃあ、試してみる？」

銀杏の木を背景に、ニツコリ白い歯を覗かせる紗優。何かを企むかのように。

私の不安は杞憂などではなく、三時間後に事実となる。

\* \* \*

「ささ、先ずは女性陣から自己紹介をしてくれまっか」

「都倉真咲です。趣味はパソコン部と読書です。今はラカン派に興

味があつて、『ディスクール』を読んでいます」

場内、シーンと静まり返る。

「それじゃ、次は男性陣行きましょか。質問のある方」

水色のスーツの司会者が喋り出す。

はいはい、とみんな手を上げるけど、私とマキは動かない。

裏門近くの特設ステージ。

ビリヤード台みたいなテーブルを間に、男女五人が対面して座る。客席近くの私の正面にはマキ。頭上には、ピンクとブルーの花で飾られた『フィーリングカップル』なんて書かれた看板が飾られて。

誰か、何かの間違いだと言つて下さい。

思い返せば午後三時。やつて来た紗優が開口一番、

「一組忙しいし手伝つてくるわ。約束しとつたんにごめんなあ」

大丈夫、適当に見てるからと返したのに、マキと一緒に回れと。

小澤さんもマキに休憩入れと。

互いに無言で教室を出て一階に降りた途端、蒔田さんと都倉さんですとねーと四人に拉致されて。

タキシード姿のまま番号の付いたバッジを渡されステージに引張り出されて現在に至ります。

合コンみたいな空気も難だけど、両端がタキシードつてのもどうなのよ。

「男性の仕草でドキツとする仕草は？」という質問に対し、

「足を組み替える仕草」

「笑顔、弱いです」

「車を片手でバックする仕草。左手が助手席の後ろだと、もーさいごー」

なーんてみんな可愛く答えているのに、

「思い付きません。フロイトが顎を摘まむくらいしか」

会場シーン。

「じゃ、一番の女性の方。質問どうぞ」

「女性を落とす、とつておきの殺し文句があつたら教えてくださー

い

「いいから一緒に来い」

「幸せにするよ」

「君とここで手会えたのは運命だよ」

「僕の一番のひとになって下さい」

あ、うちのクラスの田辺くん。一人だけ坊主だけど、野球部だ  
っけ。他は全員知らないや。

「んなことここで言えっか、馬鹿野郎」

会場シーン。

マキ……。

「好きな芸能人おったら教えて下さい」

三番の田辺くんの質問に、

「渡哲也さんです。信長には鬼気迫るものがありました。降板されたことがあっただけに、あの役は必ずやり遂げるという信念を持って演じたと聞き及びます。あの迫力。本能寺で炎に包まれ、辞世の句を詠む最期は忘れられません」

会場ポカーン。

「海の似合う爽やかな人。竹野内豊みたいなー」

普通はそういうことを言うんですね。穴があったら入りたかった。顔を上げると、田辺くんがニカツと笑った。

つられて私もニカツと笑った。

……顔、引きつってなかっただろうか。

「それじゃー、五番の方。質問どうぞ」

え、私？

マイクを向けられ苦し紛れに言ったことは。

「自分を動物に例えると何ですか」

瞬間、黒豹マキの白い眼光が飛ばされた。

お母さん。泣きそうです。

「それじゃ、番号を書いて下さい」  
ある程度質問が終わると、白いスケッチブックとサインペンが配られた。

男子の番号を書けということですか。

誰を書けと。

だれ。

だれ。

あの、逃げさせてはくれませんかでしょうか。

「五番の女性の方、随分迷っとるけど心決めて下さいねー」

観客がどつと沸く。

うるさいわ。

「残り十秒です。十、九、八、七、……」

ええい、ままよ。

「じゃ、せーので上げて下さい。せえーの、どん」

会場がわあつと沸き、拍手が起こった。

「おおっ！ フィーリングカップル誕生ですね。三番の男性と、五

番の女性です」

何ですと!？

両腕をスタッフに抱えられ、真ん中に引きずり出された。隣には

田辺くん。

「彼女のどんな所に惹かれましたか」

「何度も目が合いました。それで」

合っていないって。一回だけだつて。

「五番のあなたは」

「何となく」絶対に自分の番号を書かなさそうな人の番号を書いた  
だけです。

「それでは、愛の儀式のコーナーです」

やる気ない私の一言を司会者が流すと、

「おーまかせっ」

スタッフからコールがかかる。

何のことだか、……さっぱり。

「男性から女性にキスをするのですが、どこがいいですか  
はい？」

「おーまかせっ」

手拍子に合わせて観客からも声が。

うっ、嘘でしょう。

自慢じゃないけどファーストキスなんてまだなんだから。

「どこがいいですか」

嫌だ嫌だ。

「では、おまかせということだ」

言っていないそんなこと。

「それでは、どうぞっ」

肩に手が乗せられ、段々顔が迫って来る。

嫌だ嫌だ。助けてえ。

ぎゅっと目を瞑る。息が鼻の頭にかかってきて、すれすれに触れ  
そうな所で

「田辺、そりゃねえだろ」

息遣いが離れていく。恐る恐る瞼を上げると、別の白い手が田辺  
くんの左頬に添えられていて、

「俺ら、こういう仲だろが」

田辺くんを引き寄せた彼は、屈んで瞼を下ろし、

キスを、した。

真横で凝固した私には『キスをする振り』なのが見えたのだが、

「いやああああ」

「きゃああああ」

女子のすさまじい絶叫。

崩れ落ちた田辺くんは放心状態。

「なんとということでしょうか。ちょっと待ったコールですっ」  
面白がる司会者から頭一つ抜けた彼は口パクで、

「逃げるぞ」

「ええ!？」

「いち、に、さん……っ」

言うなり手を掴まれ、引かれるままに階段を駆け降りる。

「なんとということでしょうかあー」

声を残し、群集を掻き分け、足がもつれそうになりながらも走り去った。

手のひらに、マキの手の強さを感じながら。

「真咲いー、大丈夫やった？」

今更、申し訳なさそうな顔をして来られても。

「大丈夫なんかじゃないよ。あの変なイベント、申し込んだの紗優？ 何考えてんの？」

少なからず私は腹を立てていた。

「あんな騒ぎにあるとは思わなくて。ごめんなあ」

「もうっ」

「でもさー、悪いことばっかじゃなかったっしょ？」

ニヤついて空を見上げ、口笛を吹く彼女。

……ドリカムの『LOVE LOVE LOVE』。

あのあと、校内を走り抜けてこの屋上へと駆け込んだ。

『ここで暫く待ってる』

入るなり、そう言い残して去っていった。

右手にまだ、感触が残っている。

サッカーをしていたと聞いているし、あの性格。何となく、ごっごっして固いのかと思っていたけど

意外にも女性のように肌が柔らかく、繊細な手をしていた。

「嫌っとする相手にあんなことせんやろ。もしかして、脈アリじゃないっ？」

「は、何言ってるの」

ぼーっと見ていた手を慌てて振った。

そんなことをしても、この胸の高鳴りが消えることはないのに。

「初めに言っとく。別に、気にしてる訳じゃないけど、……けど。

マキはどこに行ったの。四組で働いてる？」

「それが、すごい騒ぎなんよ。あたし呼びに来たんはいいんやけど、田辺としたんか、つきおうとるんかそこら中の女子が泣くわわめくわ。」

やし、着ぐるみ渡して逃がしてん。ほとぼり冷めるまであいつ、どっか隠れとるわ」

「……………着ぐるみ？」

「うちのクラス、色んな衣装用意しとつて。マキに貸したん、なんやと思う？」

とつておきの秘密を打ち明ける前の楽しげな表情。

「さあ」

「ピンクのくまさん」

……………。

「ぷっ」

「あはははっ」

顔を見合わせて大笑い。

「想像出来ないっ。あの仏頂面にピンクのくまさんって」

「マキ、たっぱあるやる。普通は足元余ってダルダルやのに、足首までしなくなつてつんつるてんなんよ」

それを聞いて更に笑ってしまう。

「あーもう、涙が出てきた」

「止まらんなあ」

「あと、もう一つ聞きたいんだけど」

「なに。なんでも言つて」

一息付くと、眼下の体育館からの演奏。笑いこけるうちに、違うバンドの曲が始まっていた。

「マキって、田辺さんと付き合ってるの？」

口を開けたまま紗優が私を見た。

「『彼女』はいないって言ってたから、彼氏ならいるのかと思つて。フロイトが言うには、男性も女性も両方の性を愛する素質を持っているらしいよ。同性愛者って聞いても、別に驚かない。」

あ、言いにくいんだったら無理して言わないで……」

「待った待った真咲」

「うん、どうかした？」

「はあー。」

紗優は深く息を吐いた。

「真咲。鈍いにもほどがある。あんなん嘘に決まっとするやろが。マキはゲイじゃない」

「そうなの？」

「当たり前やろ。田辺が真咲にキスするんがい……あー。なーんでこんなことあたしが言っとなるんやろ、アホらし。マキに直接聞いてや」

「そんな勇氣、ある訳ないじゃん」

紗優の二度目の溜め息を漏らした所で、曲調が変わった。女性のボーカル。

「ジユディマリの曲だよ。聴きに行かない？」

「ちよーどいい時間やよ。後半は上手いバンドの出番やから」

と渋い表情で紗優は腕時計で時間を確認した。

体育館に着く頃には、そのバンドの演奏は残り一曲を残す所となっていた。

残念。

パンチの効いた高音。

全ての扉を開いた体育館は音響が悪い。にも関わらず、ボーカルの声は光となつて響き渡っていた。

『小さな頃から』

私はこの曲が大好きだ。

曲の邪魔にならぬよう、後方から中腰でそろりそろりと入る。

ステージ正面はオールスタンディングのエリアで、後ろ半分はパイプ椅子が雑多に並ぶ。着席エリアの最後尾では座る人も何人かいたが、前の方は一部椅子がどかされ、殆どの人が立って演奏を聴い

ていた。

「和貴」

かなり後方に、タスクと和貴の姿が。

「お、紗優、真咲さん。遅かったね」

こんにちは、とタスクは私に向き直ると、

「都倉さん。見えないでしょうから、その椅子の上に立った方がいいかもしれませんね」

あー、確かに。前の人の頭に隠れて全く見えない。

振り返っても誰もいないようだし、ではお言葉に甘えて。

靴を脱ぎ椅子に上がると、不安定な足場に少々ふらつく。

「僕の肩につかまって」

見かねたのか、肩を差し出してくる和貴。遠慮なく手を置かせて頂いた。

タスクの隣に移動した紗優と目が合うと、ヒューヒューと囁し立ててくる。

うるさい、と睨み返したが、演奏後の拍手で聞こえてなかったと思う。

「最後の演奏になりました。『The Red and The Black』の皆さんですっ」

左右からライトで照らされ、急激に明るくなるステージ。中央に立つ男性を見て

「あっ」と声を出しそうになった。

昨日、階段でマキに話しかけていた、赤い髪の男だった。

「R&amp;pp・B!」

「R&amp;pp・B!」

最前列の女の子たちが赤と黒の小さな旗を振って叫ぶ。随分と大人数でキヤーキヤー叫んでいる。

舞台には、黒い軍服のような服に身を包んだ男たち。後ろに金髪

と黒髪が二人控えるが、ボーカルの赤い髪がいやに際立つ。赤と黒で縦に二色に別れた、バンド名のロゴが入った大きな布を背後にして。

「うーっす。お前ら、元気にしてたかあ？」

「うーっす、と黄色い声。」

「聞こえねえなあ」

マイクを抱えた男は悪態を叩き、

「もいっぺん言ってみようぜえ。せーのっ  
うーっす。」

割れんばかりの音量に体育館の床が揺れ、

「行くぜ、お前ら。せーのっ。Red！」

「Red！」

皆が一樣に右拳を上突き出す。

「&amp;pp;!!」

「&amp;pp;!!」

今度は左。

「Blaaaaack!!」

右拳をぐるぐる回して最後に上を指差す。

一人付いてけず私はポカーン。

「うっしやあ、お前ら、ノってこーぜ! 『Smells Like

e Teen Spirit』」

ギターリフと共に会場が暴れ出す。

……みんな、すごいノリノリなんですけど。

紗優も体が揺れてる。タスクもかなり。和貴が微動だにしないのは私に氣遣ってか。

洋楽はサツパリ聴かないのでノれず、

バンド名ってスタンダードからとったの？

とか、

R&amp;pp;Bって普通、音楽のジャンルだよな。

一人グルグル考えていた。

でも、演奏が上手いのは分かった。

ボーカルの少し枯れた声が刹那的。音楽のピースがバラバラにならず、上手く纏まっている。

荒々しい洋楽を数曲終えた所で、

「最後に、この曲がある男に捧ぐ。『No title』」

アコースティックギターの旋律でそれは始まった。

me more than anyone could  
You are the one who have hurt  
ved me the one who really lo  
No one ever sees me  
No one ever sees me

ase the pain  
Could anyone tell me how to e  
orget you  
Could anyone tell me How to f

ted you to be  
You are not the man who I wan  
I think we should break up  
Darling, that is enough

to me  
Repeating the words you said  
ms

I was holding myself in my ar  
ut the door  
I draw down the blinds and sh  
indow  
The brightness thorough the w

No title

The coldness is holding tight  
ly  
Some say, find another woman  
to love  
I met somebody - on - day women on  
the street  
But never satisfied me like you  
ould did

The other night you have said;  
We should go our separate ways  
I never wanna see you again

Could anyone tell me how to  
forget you  
Could anyone tell me how to  
ease the pain

No one ever sees me  
No one ever sees me  
You are the one who really lo  
ved me  
You are the one who have hurt  
me more than anyone could.....

\* \* \*

悲しみを堪えるような叫びを男は絞り出す。

徐々にギターとベースが蠢き、サビで全ての楽器がその感情を爆

発させる。

歌詞の全部は分からなかった。

でも、大体の単語は聞き取れた。

大体の意味もとれた。

その音楽が持つ激情は私の心に突き刺さる。

痛く、軋ませるほどに。

そして、体を震わせる。

気付けば、私は涙を流していた。

『オレらのライブ、見に来てくれんか』

『ラストはあの曲使わせてもらうわ』

『あれに英語の詞い書いたん見てしてもて』

この歌は、別れた女性を想う歌。

どうしたらあなたのことを忘れられるのか、失った痛みにもがき  
苦しむ歌。

『稜子のことやろ、あれ』

みんなが聴き入っているのに、気恥ずかしい。

涙をだばだば流しながら入り口に目を逸らすと、

ピンクのくまさんが立っていた。

一瞬見えたその姿は直ぐに消えてしまった。

昼間を過ごした中庭を眺めていた。

真っ暗闇。道沿いに点在する小さな照明が、走り抜ける女子のシルエットを浮かび上がらせる。ひらめくスカートの裾。

ガラス窓にうつすら映る自分は亡霊のようだ。

瞼が腫れているかもしれない。

再び濡れタオルを瞼に当てるも、それが涙を吸い取っているのか、冷やしているのか最早分からなかった。

……曲が終わると、お腹が痛いから帰る、と言ってその場から去った。

もつとまともな嘘はつけなかったのだろうか。

歌に感動して泣いちゃった、と笑えばいいだけの話。単にそれが出来ないだけ。

心の中がぐつちやくちや。

なんで、胸がこんなに深く刺されたように痛むのかが分からない。

曲げていた足を前に伸ばし、読みかけた本の内容を反芻する。

対人欲求とは。

他者の反応・他者との関係性によって満たされる欲求。

対人欲求に含まれる親和欲求とは、『興味のある相手と親しくなりたい』という感情。

はっ、と自嘲的な笑いがこぼれる。

そんな話が問題なんじゃない。

『なんだ、中学生か？』

初めて会った時。

『俺がか？』

キョトンとした顔。

『そう言うなよ、サイコ野郎が』  
初めて見た笑顔。

『ういっす』

長い沈黙のあと、ようやく出た言葉。

『俺もお前が嫌いだ』  
初めてぶつけられた感情。

『お前がフケていた授業のノートだ。やる』  
初めてクラスで話しかけてくれた。

『夏会った日、退部届を出しに行ってた』  
短かったけれど自分の口で語ってくれた言葉。

『悪かった』

保健室で、私の手に触れた。

あれは、夢なんかじゃない。

だって、あんな繊細な男の人の手を、私は他に知らないから。

欲求の階層なんてどうだっていい。この気持ちを表すのは漢字—  
文字で十分だ。

『稜子のことやろ、あれ』

でも、近付くのが怖い。

だって彼には、忘れられない人がいるのだから。

こんな情けない私は一人、膝を抱えて泣いていた。

「おい」

肩を揺すられる。

目覚めなくてもよかったのに。浅く笑えた。

「んな所で何してる」

ピンクのくまさんが話しかけてきた。

驚きに、言葉を失う。

立てていた足を前に伸ばすと、手を離したくまさん。

「どうしてまだ……くまさんの」

「着替える暇がなかった」

被りもので声がかくぐもっているけれど、間違いなく彼だった。

「あ、そう。今何時……って嘘っ、六時過ぎてる」

「閉会式はとづくに終わった。フケたのは俺とお前だけだ」

「何で、マキまで」

意識がまだぼんやりしている。木の板の上で寝たものだから、節々が痛い。

「誰かさんを探していたからだ」

「そんなこと言わないで。」

「探さなくていいのに」

「いきなり帰ると言いやがったくせにかばんは置きっぱ、保健室かと思えばいねえ。家に電話してもいねえ。あとは学校しかねえだろが。あいつらには保健室で寝てると言っておいたが」と身ぶり手振りで話す。

「そ、そうですか」

意外な剣幕に戻す様子となる、私の弱虫。

「……とにかく。無事で何よりだ」

親みたいなき色に苦笑い。「別に、子供じゃないんだから」

「泣いてたたるが」

鼓動が跳ねる。

「あ、……歌。歌に感動して。にしても、見つかるとは思わなかった」

目を逸らす。被りもの越しでも合わせられない。

「屋上でなければここだと思った。読書好きなんだろ。この格好は、隠れるには最適なんだが、身動き取りづれえし遅くなった」

「そう、ですか」

「……」

「……」

沈黙の森。中庭を何人もの生徒が過ぎて行く。

「紗優たちもまだ、残ってるんでしよう」

「ああ。後夜祭があるからな」

「みんなの所、行きなよ。私はいいから。もう少し休んでる」

「駄目だ」

「いいから、放つといてっ！」

子どもっぽいと分かっている。

けど、これ以上余計な感情は抱きたくない。

「……お前が来ねえと寂しがる奴がいる。いいから来い」

「誰が？ 和貴、紗優、タスク？」

「俺だ」

顔を上げるとくまさんが真っ直ぐに私を見ていた。

その隙に、両手を引かれ、すとん、と窓から降りてしまう。

手を引かれて歩き出すも、

「待つて。誰も行くなんて、」

「A・このまま歩く。B・荷物のように運ばれる。C・担架で運ばれる。どれがいい。選べ」

「選べません、全部嫌です」

半べそで答えると、いきなり私の膝下と背中に手を当て、荷物でも運ぶように持ち上げた。

「ぎゃああ、降ろして降ろして」

宙に浮く感覚。お姫様抱っこが恥ずかしくてジタバタもがいても、びくともしない。

「無駄だ。俺を誰だと思っている」

「蒔田一臣」

「毎日十キロ走る俺をお前に吹っ飛ばせるはずがない」

「十キロ!？」

「少ない日だが」

「す」……」

「軽いジヨグにしているが、一度身に付いた習慣は中々抜けられないんだ。何故続けるのか俺にも分からねえ」

「そんなことないよ。こういう時のためとか」

「滅多にねえ。着ぐるみ来て女抱えるとは」

初めてマキがクツと笑った。

「抱えるなら、……私じゃなくて稜子さんにして」

しまった、と気付いた時には遅かった。

それまで前を向いていたくまさんが顔を右に傾けると、頭の中で

アホウドリがアホーと鳴いた。

「やはり、聞いてたか」

情けなくも自分は涙目だと思う。

「坂田は……あの赤い髪の奴は俺と同じ中学なんだが、昔からああいう奴でな。洋楽馬鹿で、俺もあの頃はよく聴いていた。あいつは頭が弱いから、歌詞の翻訳を毎度頼みに来る。今回も、学祭用に失恋の歌を訳せだの作れだのうるさくてしょうがねえ。ライティングで英語の詩を書く宿題が出やがったから、両方ノートに書いたまでだ」

「ふーん」

「どうした」

足が止まる。生徒玄関は直ぐそこだ。中庭の緑が私たちを見守っている。

「寡黙な人が急に話し出すのは、やましいことがあるか、嘘をついているかのどちらかなんだよね。心当たり、ある？」

「てめ。しばくぞ」

多分睨まれている。

乾いた笑いでしか返事が出来なかった。

……本当は、そんな皮肉を言いたいんじゃないのに。  
反動でくまさんはまた黙ってしまった。

空は群青より濃い紺。灰色の角を曲がった辺りから、人が増え始めた。ジロジロと注がれる視線が痛い。

「ね、もうこの辺でいいよ。降ろして」

答えず、ひた歩むくまさん。

オレンジの炎と黒い群衆がどんどん接近し、運動場の真ん中に焚かれるキャンプファイヤーを、輪になって囲む人、人、人。

輪の数が多くて数えきれないが、外側から先生たちが遠巻きに見つめている様子。

「真咲。保健室行つとつたんやつて？大丈夫なん」

一番外側の輪に入っていた紗優の前で、くまさんはやっと降ろしてくれた。

「マキ、お疲れえー」

ブンブンと首を振り、否定をして逃げていった。途中で女子に「かわいいー」と幾度となく囲まれながら。

いや、くまさんがね。彼女たちはおそらく中身を知らない。

「はは、何あれ」

「真咲、笑つとる場合やなくて。もうすぐ始まるから、あたしの横並んで」

「なんか始まるの」

「緑高名物、フォークダンス」

周りの子たちが一斉に手を繋ぐ。

「体育んとき踊り方習ったやろ」

「それを今踊るの？」

私の右手を笑顔で掲げる、それが答えだった。

複数設けられたスピーカーから流れるのは、『オペラディ・オペラダ』。小学校の運動会以来だけれど、体が覚えていた。

外側の輪の中にいたのに、いつの間にか中の輪へどんどん入っていく。外と中が入れ替わり、紗優をとくに見失ってしまった。

二曲目は『青い山脈』。渋過ぎ。さつきと同じ振り付けで、男子が歌い出すわで妙に盛り上がる。

『おおシャンゼリゼ』が始まると、知らない人だらけの中に、やっと知る顔を見つけた。

「都倉さん、楽しんでますか」

私の手を取るのはタスク。

「うんうん」

答えていたら瞬く間にさようなら。

『ジエンガ』では、全員前の人の肩を掴み、時計回りに飛び跳ねる。後ろの人の握力が強くてちよつと痛い。

振り向くと小澤さんがいたのには笑えた。

あんた何わるうとるん気色わる、と返されたからまた笑った。

Oasisの『She's Electric』が流れ出すと、焦った。踊ったことないし。

「おい」

息が止まるかと思った。

一人きこちない私に手を差し伸べるのは、マキだった。

くまさんだった素顔をまともに見られない。普段より百倍増して格好いい。

この人がさつきまで私を抱えていたなんて思うと、尚更意識してしまっ。

どうやら一コーラス分を『オクラホマミキサー』の動きで凌ぐアレンジのようだ。

マキの手に触れるだけで心臓が暴れるし、ダンスの連続で目が回るしで、次の男子と踊り終わると生存ギリギリの所にいた。

『マイムマイム』で、歓声と熱気が更に強くなる。キャンプファイヤーのパチパチ鳴る音が大きくなったような気さえして。

クレッシェンドの所で、手を繋ぎながら前へとぎゅうぎゅう詰め。また同じメロディーが流れると、今度は手が干切れるくらいに広き円を作る。

その繰り返し異常に盛り上がる。

うわぁーっ、と全員の歓声。

男子も女子も、働きまくった体育委員も、生徒会のお兄さんお姉さんも仕事そっちのけ。

先生も、果てには校長先生までも。

一緒になって。手を繋いで。

学園祭の最後のひと時までをも楽しんでいた。

「こんちわー。あ、真咲さんだけ？」

十一月に入って最初の平日。

「うん」と私がメールソフトを立ち上げていると、隣の空席に座った和貴。

何かに気付いたらしく。

あつ、と小さく漏らし、カラカラ、と椅子ごと体を寄せてきて、「壁紙、ポスぺなんだ」

かあつと頬が熱くなる。

何気ない一言だけど、全てを見透かされている気がして。

パソコン部では、情報処理の授業と端末を共有で使う。黄ばんでダサイアイボリーのデスクトップ。一昔前のテレビみたいな分厚さ。だからせめて、変えられる所は思い思いに変えている。部活のIDでログイン後の、壁紙やメールソフトの表示設定とか。

先週、紗優が壁紙をGLAYの四人が並ぶ写真に設定し、「せっかくなし真咲も新しくしようよ」勧めに応じてネットで探すと、ポストペットのピンクのくまさんに行き当たり。

私は迷わずそれを選んだ。

紗優が意味深な笑みを浮かべたのは言うまでもない。

その紗優といえは、本日風邪で病欠。

早く治るといいな、と思いつつ頬杖付くと、ショッピングピンクのくまさんと目が合った。

「ポスぺ、可愛いよね」

今度は茶色い瞳が視界に飛び込む。和貴がパソコンと私の間に顔を入れていた。

「近い」

と追い払い、こちらに体を向けて座った彼を改めて見つめた。

ふわふわの茶髪に、第一ボタンを開けた胸元。紺のブレザーは前を閉じず、赤と薄い茶色のチェックのニットの殆どを覗かせ、細く長い足を余らせる様は倒錯的な可愛らしさだ。

このアンニュイな魅力に囚われているのは私だけではなく、あまたの女子が彼を見る度きやあきやあ騒ぐ。

『蒔田くんと違って人懐っこくて。背が高すぎなくて女の子っぽい所がいい』

和貴ファンの彼女たちは一様にそう言う。

じゃあパソコン部入りなよ、と誘ったら全力で拒まれた。

そんなに嫌なんですかパソコン部。

確かに暗くて地味かもしれないけど。

みんなで作った部員募集のポスターに誰も反応しないし。

……あれ、結構凝ってるんだよね。画像を全部マウスで描いたし。

私は背景に一色足すだけだったけど。タスクの力作。

私は彼を見つめたまま考えごとをしていたらしい。

「真咲さん。僕に見とれすぎ」

和貴ならではの発言。はいはい、と受け流しつつも、ある一点が目に留まり、

「なんか、ブレザー大きくない？」

だね、とはにかむ、そのブレザーの袖丈は、座る彼の親指の付け根までの長さ。立つともっと長く見えるに違いない。

「じーちゃんと選びに行ったら、『高校生やからもっと伸びる』なんて言われて。ワンサイズ大きいのにされたんだ」

「高校生で背が伸びる人なんているの」

「僕はいまだに、毎年二センチずつ伸びてる」

照れたように頭をかく彼。

「今、身長何センチ？」

「一六八」

男子にしては低いけれど、私より二十センチも高い。

「そしたら、五十歳になったら二メートルになってるんじゃない」  
私のつまらぬ冗談に、それじゃジャイアント馬場になっちゃおうよ、と花開くように笑う。

椅子ごと元の位置に戻ると紺の革のベルトの腕時計に目を移し、もうこんな時間だね、と目を少し丸くした。

マキとタスクはクラスの日直なのだが、小澤さんと一緒だから手間取っているのかもしれない。

「迎えに行こっか」

こんな可愛い顔で言われては、断れる術もなく。

Yesの返事をするのにもってしまい、また少し後悔した。

この花開く笑顔がわずか五分後に曇ってしまうことなど、この時の私は想像だにしていなかった。

\* \* \*

薄暗く細長い廊下に、秋のやや強い陽光が斜めに入りくる。

運動場のトラックには、陸上部に混ざって野球部員も走り込みをしていた。和貴も眩しそうに見つめる。

校内に残るのは、受験を控えた三年生や文化部員だけであろうか。

角を曲がった所で、奥から男子が横一列に五人やってきた。全員、日に焼けた褐色の肌。

私たちと徐々に接近するも、廊下の幅一杯に広がったまま譲る気配がない。

こちらを見て何か、笑っている。

嫌な気持ちになりつつも通り過ぎようとしたが、

「相変わらず女とばっかおるげな」

すれ違いざまに一人の嘲笑。別の一人が鼻を鳴らす。

「女みたいな顔しやがって。桜井は走るより女と遊んどるのが似合

ってんな」

「はははっと一同が声を立て、再び前を向いて歩き出したが、  
「ちよつと」

自分でも出したことのないような低い声が制した。

「ああ？」

五人が止まる。

別にヤンキーではない。見た目はごく平凡、短髪の男子高校生。  
「女といて何が悪いの。あなたたちみたいに、人が来ても道を譲ら  
ない人よりマシだよ」

「ちよつと真咲さん」

背後から止めるように腕を掴まれても、私は彼らを睨み付けた。

二番目に声を発した男が、前に二歩を踏み出す。

彼がボスだ。

「四組の転校生やな」

「そうだけど」

私の睨みに効力はないらしく、むしろ笑みを強め、

「知らんようやから教えたる。こいつは人の女盗って遊んどるよう  
な奴や」

「……まさかそんな。」

和貴を振り向いたけれど

いつもの笑顔がない。

表情を忘れた人形のようにだった。

「とくら、……か。畑高における俺の彼女も戸倉や。万由ゆまってゆう」

『桜井くん。ご自分の立場をわきまえて下さい』

「もう別れたから、前の彼女やがな。桜井は万由と付き合っただけに別れたんや。お陰で陸部にはおれんようになった。次期部長の俺に喧嘩売った訳やからな」

『ああ、都倉さん』

呆然とする私を、彼は楽しんでいた。

「この色男に遊ばれんよう、せいぜい気をつけろや」

再び嘲りながら彼は去っていく。

足が床に根を張ったように動かない。

俯いた和貴は、赤い唇を噛み締める。

肯定する顔を、認めたくはなかった。

『おそらく彼は最初から貴女のことを名前で呼んでいたはずですよ』

真つ白になる脳内で、タスクの声だけが響いていた。

頭をかきながらようやく顔を上げ、

「ばれちゃったらしようがないね」

口調、口許とは裏腹に、その目は笑っていない。

澄んだガラス玉のような瞳はいつもの柔らかさを失っていて、

「本当なんだ……」

「どうしようもない奴だから、関わらない方がよかったのにな。水

野くんの言ったとおりで」

「やめてっ」

これ以上自身を蔑む言葉を聞きたくはなかった。

そんな私を見て、和貴は首をかしげながら冷たい笑みを浮かべる。

「聞きたくないの？ 僕、彼の彼女を奪ってさあ、すぐさま捨てたんだよ」

「何で、そんなこと」

「退屈しのぎに」

平然と肩をすくめる仕草。

何かの間違いだと思いたかった。

「和貴はそんな人じゃないよ」

「真咲さんの言う僕って、どんな人？」

一歩、二歩、そして私の前に立つと、その手が私へと伸びてくる。右耳の下から頬を滑らせ、顎先を救い上げる指先。皮膚の温もり  
に反して、冷やかな眼差し。初めて目にする冷酷な色。肌がぞくり、と粟立った。

顔を左に傾ける、こなれた動き。

動くことも瞬きでさえも敵わなかった。

唇と唇が触れる寸前で、ふっ、と息を吹きかけて、

「これが僕。キスくらいどうとも思わない」

透明な瞳に影を宿した色は、完全に私を拒絶していた。

ずる、ずるとあとずさり、もつれる足でその場から逃げ去った。

走りに走ってパソコンルームに飛び込むと、デスクトップのくまさんがそんな私を嘲笑う。

惨めな気持ちでパソコンルームをあとにした。

「紗優、病み上がりなのに大丈夫なの」

「へーきへーき、とドアノブを回す彼女に続くと、

「……」

入って右の定位置に、あの先客が立っていた。

「マキ、まだ煙草吸つとるん。やめなや」

どすどす足音を鳴らして私たちが近付いても、動じず白い息を吐く彼。

「宮本センセにチクつたるから」

「怖くねえ」

「若ければ若いほど肺癌になる確率が高くなるから、本当に止めた方がいいよ」

挟んで隣に立つ紗優が、そうだそうだと頷く。

「暇なんだよ」

慣れた手付きで、吸い殻をポケット灰皿にねじ込む。

来るまで見つめていた先が分かってしまった。

サッカー場。

県大会でベスト四に入った活躍を、どんな気持ちで聞いているのだろうか。

小体育館を挟んで右には運動場。あの手のひらを知った

目を逸らした。

私は和貴を避けている。

子供じみた行為と思うけれど、いざ目の前になるとどうしたらいいのかわからない。

部の休みに乗じて即帰宅予定が、病欠明けの紗優に屋上へと誘われた。

普通は授業の欠席分を取り戻すべく、真っ直ぐ帰って勉強をするものだと思うが、何でも。

『真咲が恋しくなった』そつだ。  
少し冷たい風を感じながら缶で両手を温める。ミルクティが恋しい季節を迎えた。

「もー、真咲ってば。聞いとるん？」

咎めるような響き、突かれる肩に、

「あ、……と。えっと、何の話だっけ」

考えごとをすると毎度周りが見えなくなる、悪い癖。この集中力をもっと他に生かせたらと思う。

「再来週のマラソン大会の話しとったんよ」

「マラソン、大会……」

何と憂鬱な響き。走行距離は七キロ。なるべく思い出さぬよう記憶の底へと追いやっていた。

「男子は十キロだっけ」

ああ、と全く気に留めぬ様子でマキは缶コーヒーをあおる。ブラツクの無糖。

「学祭終わったら行事なくなるって小澤さんが言ってたけど、本当なんだね。年内残ってるのは期末試験だけでしょう」

「うん。三年になっても変わらんよ。二年が違うんは修学旅行だけで、あとはどの学年も一緒」

マキがやや後ろに身を引くから、より露わとなる喜ばしげな笑み。反対に、私はうんざりした気持ちとなった。

三年になってもマラソン大会はあるというのか。

「そっか。修学旅行ってどこに行ったの」

「京都と奈良。真咲は」

「北海道だったらしいよ」

「『らしい』とはどういう意味だ」

珍しく会話に加わるマキに、

「私は行ってないから」

何気なく答えたつもりだった。

マキは缶コーヒーに口を付けたまま。  
紗優は軽く金網を掴んだまま。  
二人目を見開いて私を見た。

緑川高校の修学旅行は、二年の五月。  
私の通っていた高校だと、二年の九月。

修学旅行は秋が常識だと思っていた。地方によって違うものだと  
いうことを、緑川に来て初めて知った。

「じゃあ、真咲は行つたらんが」

眉を下げて悲しむその目に、

「うん、まあ……」

宮本先生から貰った行事予定表を見て、一人愕然としたのは言わ  
ないでおいた。

「三月には遠足もあるし、一緒に歩こうね」

「うん」

彼女が明るく振る舞ってくれるのが嬉しかった。

間に挟まれるマキは、缶の中を覗き、軽く左右に振る。

もうねえのかよ。

そんな呟きが聞こえるようだった。

「何がおかしい」

「別に」

凄まれても口許が笑いを堪えきれずにひくひくする。

「コーヒー飲む時、めっちゃめっちゃ小指立ってた……」。

紗優になになに、と問われても返事が出来ない。肩が小刻みに震  
える。

仏頂面のマキは、空の缶を持って余すと、

「お前ら、いつまで喧嘩してるつもりだ」

笑いをピタリと止める一言を放った。

「喧嘩なんてしてない」

「嘘つけ。和貴もお前も顔に出し過ぎだ」

体を反転させ、がしゃんと金網に背を預けるマキに、

「どしたん？」

話に付いて行けない紗優も、彼に合わせて入り口を向く。

「こいつと和貴が口を利かねえ。やりづらくてしょうがない」

……悪かったわね。

「珍しいなあー、和貴が喧嘩するなんて。女の子は怒らせるんやなくて悦ばせる相手やと言つとつたがに」

「宮沢。一言余計だ」

あつと口を押さえた紗優と、眉間の皺を深めたマキに見つめられ、腹の底から苛立ちが湧いてくるだけで、

「あんな女つたらしだとは思わなかった」

「真咲……」

「お前、まさか妬いてんのか」

「違います」

断言しても、変わらず仏頂面。この人は本当に喜怒哀楽を出さない。

「真咲、あんなあ。和貴はいい子やよ。親がおらんくてもグレずにまっすぐ育った、心の優しいおじいちゃん子なんよ。」

そりゃ昔は、ん……いまも、時々手ぐせは悪いかもしれんけど」

紗優。フォローになってないよ。」

「親がいればいいと言うものでもないがな」

「また、マキはもう。そういうこと言わない」

「じゃ、私は行くね」

ミルクティを飲み干し、涼しい表情と困り顔の二人を残して歩き出す。

これ以上いても、フォローと過去を聞かされるだけに終わりそうだから。

「送る」

「まだ明るいから大丈夫。紗優のこと送ってあげて」

背中に強い視線を感じる。一度立ち止まり、

「二人とも、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。そのうち普通になるから」

作り笑いで屋上を去った。

翌日は、朝一番で鉢合わせた。

「おはよ」

「……おはよう」

目を逸らして答えるのが精一杯。  
私の弱虫。

腕時計を見た。約束の時間を十分過ぎていた。

少し早かったかもしれない。

私は紗優の家を知らないから、中間地点である緑川駅にて待ち合わせ。

逆の手には、一泊分の荷物を詰めたポストンバッグを持っている。下ろそうかと判断が動いた時、向かいのバス停の方から大きな声が聞こえてきた。

「ごめん真咲。遅くなつてえ」

点滅する信号を急ぎ渡り、ポニーテールの尻尾を揺らしながらやってくる。

いつも私服はミニスカート。パンツ姿なのを意外に思った。

「行こっか」

赤いスポーツバッグを背中に引っかけ、切符売り場へと動く紗優に面食らう。

「ちょ、ちよつと。紗優の家行くんじゃ」

「真咲、緑川出たことないやろ。たまには遠出せん？ あ、切符ね、

四百円」

高い。

町田から新宿までは三百六十円。

緑川駅からだどこまで行けるのか。

切符を切ってくれたのは白髪の駅員だった。いつかと同じ。

「どこに行くの」

「ひーみつうー」

おどけて肩をすくめる紗優の向かいに座ると、首をかしげた母を思い出し、デジャヴのような感覚を味わう。

けれども、夏の鮮やかさはなりを潜め、暗い緑と枯れ木の町。紅葉はとっくに終わっている。

頬杖を付いて電車の振動に身を委ね、初秋の景色を眺めていると、  
「なんか飲み物買ってくる。真咲はなにがいい」

「ミルクティ」

いつもこればかり選ぶ私を、紗優は小さく笑ってから立ち上がった。

私はあの夏と同じ位置に座っていた。

三ヶ月が経った。

色々なことがあった。

変わったことと、変わらないことと。

紗優と出会って。

タスクに会えて。

マキに惹かれて。

和貴に……。

和貴が最後に笑いかけてくれたのはいつのことだろう。あの花開くようにふわりとした笑みを。

目を閉じると、暗闇の中に名も知らぬ淡い色をした花が浮かぶ。和貴のイメージと重なってとても綺麗だった。

またもや寝不足の日々が続いていた私の意識は、そこでブラックアウトした。

「真咲、……真咲」

机に圧迫されたおでこがひりひりする。

「外見て。ほらほら」

ふらつく頭を起こして指に従うと、真っ青な海が広がっていた。その青さは、私を知る海よりもずっと深く澄み渡る。

「もうすぐ着くし、起きなね」

寝ぼけ眼の私には紗優の笑みもストレートに入り込んでくる。  
それから一分もしないうちに、見知らぬ駅に降り立った。  
ぎりぎり車両が乗り入れる長さのホーム。緑川駅よりも更に小さい。  
い。

改札を出ると、更に驚くべきことが待っていた。

「遅え」

朦朧とした頭で目を擦ったが、その存在は消えない。

腕組みをして立つ長身。普段ほどハードにセットせず無造作に流した黒髪。黒い長袖のTシャツの上に、黒に近い濃紺の地に白ボーダーが入ったポロシャツを重ね、タイトなブラックデニムで長い足をもて余す。

やっぱり黒。殆ど黒。

「ごめんなー。あたしが遅れてしてもて」

「行くぞ」

紗優に腕を絡められるままに歩く。

何で、マキが。

ここは、どこ。

小さな山小屋のような駅を後ろ向くと、『海野駅』の表示。

見たまんまじゃん。

センスのない駅名に密かに笑った。

風情ある木造旅館が建ち並び、海沿いの道。

うち一軒で足を止め、裏手に回る。正面が旅館で、きっと裏が家族の出入口だ。うちと同じ作りをしているが、この旅館の方が格段に大きい。

いつかの母と同じように、惑うことなくマキはドアを開いた。

「ただいま」

またびっくりして声も出なかった。

藤色の着物に身を包んだ涼やかな女性が出迎える。白磁のように

滑らかな肌。通った鼻筋。

一目瞭然。

仏頂面ではないけれど、彼のお母さんだ。

「初めまして。こちらは都倉真咲さんに、あたしは宮沢紗優です」  
「いつもお世話になっております。皆さんのお話は常々聞いております」

嘘でしょ絶対。この男が母親に女の子を語るとは思えない。

背中しか見えず、真偽が確かめられないのが悔しい限り。

奥から、女将さん、と誰かに呼ばれると、

「こんな所ですが、どうか自分のお家だと思ってゆっくりして行って下さいね。私はこれで」

一礼をして去っていった。清々しい風をそこに残して。

「入れ」

靴を揃えて置くと、すぐ傍のチェストの上に目が留まる。

所狭しと並ぶあまたのトロフィー、賞状、写真立て。

全員ユニフォーム姿の集合写真もあれば、ドリブルを仕掛ける瞬間を捕らえたもの。小学校の頃だろうか、小さな体躯でリフティングをする姿も。ボールが頭に比して凄く大きい。

幼くあどけない中にも、涼しげな眼差しと白肌は変わらずで、微笑ましい気持ちにさせられる。

「これ、全部マキ？」

ああ、とそっけない返事が返ってくると思っていた。

そんな私を、階段を数段上がったマキは一瞥し、

「全部、兄貴だ」

待ってよ、と紗優はマキを追うけれど、私は動けなかった。

全部、お兄さん？

お兄さんもサッカーをしているの。

早くしろ、と再度急かされ、湧き上がる疑問を呑み込みながら、ようやくスリッパを履いて歩き出した。

これ着て、と紗優からジャージを手渡された。

急かされ、着替え、同じく紺のジャージ姿に変わっていたマキと三人向かった先には、

「おはようございます」

乱反射にまばゆい海。波打ち際に近付くほどに透明度を増す海水。白い砂浜に高いネットが張られる傍で、タスクと和貴がストレッチをしていた。

二人ともジャージで全員ハーフパンツ。

「何これ、どういうこと」

「パソコン部の合宿ですよ」

「私、聞いてない」

「言っただけえ」

「おいおい。」

「真咲さあ、修学旅行行つとらんやろ？ やし、旅行しようってみんな企画してん。北海道は無理やったけどなあ」

「蒔田くんのお家は立派な旅館ですからね。僕も楽しみにしていました」

「大した所じゃねえけどな」

「えっと。マキの家に泊まるのは分かった。で、今から何するの」

「決まってるんだろが」とマキが呆れまじりに言うと、

「ビーチバレーだよ」

初めて口を開いた和貴。

久しぶりに見るその瞳は、光を宿してきらきらと輝いていた。

……ああ、これもデジャヴのようだ。

所で、私が球技を苦手ということを、いい加減どなたか覚えて下さい。

「そおーれっ」

紗優の掛け声で、マキのジャンピングサーブが決まる。後衛に当たった音に、審判のタスクがやや眉を歪めた。

「ボディ狙うんは反則やよ」と和貴がぼやくも、

「負けるのは嫌いだ。弱点を突くのは勝負として当然だろ」

以前の誰かさんの発言を平然と繰り返すマキ。ちえ、と唇尖らせ和貴と目が合った。

「次、紗優のサーブやから、後ろお願いね」

柔らかな微笑。

「あ、うん」

言葉を交わすのは凄く久しぶりに思った。

なんだ、きつかけさえあれば簡単なんだ。

「真咲さん、まえ」

「おっけ」

レシーブでボールを送ると、綺麗に上がるトス。

前方に走り、地を蹴って、体を弓のようにしならせる。

右手を振り上げた所で初めて気がついた。

私、スパイク打ったことないや。

見事にタイミングが合わず空振りして無様な着地。拳匂、宙に浮

いたボールが頭の上にゴンと落ちてきた。

「真咲いー大丈夫？」

「ブロック入るまでもなかったな」

「都倉さん、ドンマイです。また次がありますから」

まともに関心しているのは紗優だけだ。

隣でぶくっ、と吹き出す気配。

「真咲さん、球技は合わないのかもね。顔面当たらなくてよかったよ」

やりきれない気持ちで腰を起こすと、差し伸べられる手のひら。

「足元悪いのに、追いついただけでも立派だよ」

その助けを借りて立ち上がると笑いを止め、髪に付いた砂を丁寧

に払ってくれた。

そんな優しい目を今更……しないで欲しい。

私にとって散々なビーチバレーが終わると、宿で着替え、船乗り場へと向かう。

張られたロープに沿って並ぶ人の数。全然少なかった砂浜とは違い、思ったより多かった。

白い遊覧船のデッキで紗優と海を眺めていた。時折飛び魚が水面を跳ねる。潮の香りが気持ちいい。

「緑川はあの辺やよ」

「どこどこ」

電車から眺めていた緑の景色、点在する瓦屋根の集落。住み慣れた世界なのだが、似たような建物ばかりでどこがどこか判別しかねる。神輿を担いだ海は唯一分かった。

「ここから三十分で島に着くんやけど、小さい島いっぱいあるんよ。あっちつかわ行ったほうが見えるかも」

「あっちつて？」

進む船の右から左側面へと移動する。点在する島々の形状と大小は様々。小さな岩や、びっしり緑に覆われた、体育館ほどに大きいものまで。

「あれが岩島。顔みたいな形したんが筑島。その向こうが只島」

「すらすら説明してくれる紗優。」

「前に来たことあるの？」

「これから行く海野子島うみのこには遠足でなあ。ちっちゃな島やけど、ガラスの工芸品作る店もあるし、観光客も結構来るんよ」

「島の人口はどのくらいなの」

「五千かな。年々減つとる」ポニーテールを海風になびかせ、紗優は目を細める。「学校はあるけど、中高一貫で百人もおらん。そのうち廃校になるかもしれんね」

過疎地に住む私たちにとっても、他人事ではないのかもしれない。やや陰る表情に思った。

「廃校になったら、その島の高校生は緑高か東工に通うってこと？」

「緑川に下宿する子もおるよ。近くやったら私立やけど畑高、あ、畑中高校のことだよ。遠くならもうちよつとあるんやけど」

「県外になつちゃうんじゃない」

「かもしれん」やれやれ、と紗優は首を振った。

「おーい」

見上げると、二階席から身を乗り出し、手を振る和貴。タスクは案じてか、後ろから軽く羽交い締めを支える。

手を振り返しつつ隣を見ると、頬が赤らんでいた。

「かわいいなあ」

「和貴が？」

「違う、タスクが」

「あーそうですか。」

当人は頑なに認めないが、絶対ほのかに恋心が芽生えていると思う。

お手洗いの場所を紗優に聞くと、懇切丁寧に教えてくれたけど、聞くまでもない、分かりやすい場所だった。

船内の階段の下。

椅子席からも見えるように、ほぼ四方が腰高窓。左見ると、デッキで喋る紗優とタスク。

邪魔しちゃいけないなと思い、他の姿を探すと、反対側にいつも遠くを眺める、孤独な彼が。

反射的にそちらへ向かおうとした所を、

「真咲さん」

振り返ると、階段の途中に和貴が立っていた。

ゆったりと段を上り、近付いてくる。

「そんなに警戒しないでよ」

後ずさる足。距離は一定を保ったまま。

「別に警戒なんて、」

してない、の四文字が言えなかった。

愛らしい笑みに慣れきっていたから、あの時に見せた瞳。色を失って拒絶した瞳が、目に焼き付いて離れない。

「僕が、こういう人間だって分かってがっかりしたでしょ」

「少し、驚いた」

「そう」

平然と答える和貴がまた怖くなる。

「人の気持ちがあつてもいいと考えてる人だとは思わなかった」

「相手によるね」

「女の人を平気だからかえるんだ」

「平気じゃないよ」

溜め息が吐いて出た。

すればするほど無意味な言葉が私たちの間をすり抜けていく。こ

んな不毛な会話に何の意味があるのだろうか。

「もう、いい。外の風吸ってくる」

「都合が悪くなると、すぐそれだ」

背に刺さる冷たさに、進みかけた足が止まる。

「慰めるだけならいつだってしたげる」

耳を疑う言葉だった。

私は声が震えるのを抑えながら言い放つ。

「部活やクラスでは普通にしている。みんなが心配するから」

ただ真っ直ぐ、遠い背中を見つめていた。

「それ以外は、私に関わらないで」

拒絶の言葉と共に、和貴の元を去った。

\* \* \*

「めっちゃ豪華。いいんですかこんなに」

目を剥いた紗優に、どうぞお召し上がり下さい、と仲居さんは優雅に微笑む。

浴衣を着た私たちは広間に通され、豪華な料理に舌鼓を打つ。

私の真向かいがタスクというのがありがたかった。

ふぐの刺身に白子なんて初めて。口の中に広がる甘さと旨み。至福の一時だった。

地下の卓球台で汗を流したあとは温泉に浸かり、男女別の部屋にて就寝。

今頃、私は紗優の隣で寝ているはずだった。

眠れなかった。

廊下に出て窓を見ると、汽笛が鳴った。音に誘われて外に出た。

表玄関から下駄をからころ鳴らして。

海へとひた歩み、砂浜に横たわる大きな流木に腰かける。

漆黒の海と、繋がる星空。

遠く、灯台の光。

たまた道路を走る車。

それ以外は汽笛と波のざわめきが静かに響くだけだ。

沈黙と暗闇が心地よかったが、

「おい」

そんな沈黙は破られた。

「何時だと思ってる」

驚きに振り返ると、浴衣姿のマキが立っていた。

風邪引くぞ、と黒いカーディガンを投げ付けてきた。

浴衣だから袖を通せないが、肩からそれをかける。左に座る彼に言った。

「……あつたかい」

ほのかにマリンノート系の香り。マキの匂いがする。

「寒いなら中入って、寝ろ」

そうだね、という意味を込めてこくりと頷く。

「眠れないのか」

またこくり。

「和貴のことですか」

頷けずに固まった。

「船中で言い争ってたら」

ふるふるとう首を振る。

「嘘つくな。和貴に聞いたぞ、嘘の見分け方ってやつを。今のお前は左上を見ている」

ずっと海眺めてて、今初めて顔覗き込んだくせに。

嘘をつくのが下手なのは、マキだって同じだよ。

「うっ……」

堪えきれず膝を抱えた。

一人になりたいから来たのに。

普段無関心なくせに、何で人が弱っている時に優しくするんだろ  
う。

私のことなんか気付かないで欲しい。

マキは私が落ち着くまで、黙って傍にいてくれた。

また別の汽笛が聞こえた頃

「時々、夢に出る。珍しく天然芝のピッチで試合出来る日があつてな」

マキは静かに口を開いた。

「湿度も気温も高え日だったが、気分は冴えていて、体はキレキレだった。実際絶好調だった。だが調子こいて、自分に出来ねえことをした。

ドリブルでつかけて、相手の股下抜いたボールに追い付くつもりが、余計なスピードを出して足を逆に捻った」

……痛そうだ。

「それが、最後の試合だ。

今でも辞めたのを悔やむことがある。

怪我で辞める奴もいれば乗り越えた奴もいる。俺は、逃げただけじゃないのかと」

「そんなことない」

顔を上げた。

「事情は分からないけれど、あんなに、足引きするくらい……ぼろぼろになるまで頑張ったんでしよう。

それまで頑張ってきたことは、辞めても消えない。

マキの中に残ってるんだよ」

涙でぐちゃぐちゃなのも構わず。

一瞬、目を見開かせると、彼は小さく息を吐いた。

「腫れ物に触るような扱いか、同情しながら陰で笑ってる奴ばかりだった。そんな奴らにも、俺が。

俺自身が、一番うんざりだった。

そんな時、ある男が俺に言った」

『とりあえず諦めちゃってさ。またやりたくなったらやればいいんじゃない？』

「あっけらかんと言いやがったから一発殴り倒した。血を吐くほどに努力してきたんだ。それをよくも知らねえ奴になんざ言われてたまるかって。」

「そいつは俺の拳をまともに食らって吹っ飛んだ。だがな。何て言っただか分かるか。」

『よかった』って、笑いやがった」

『生きるの諦めとるような顔しとったけど、僕殴れるくらいなら全然問題ないよ』

「それが」

『僕は、キミより全然弱くて、拳げ句に悪人になる予定なんだ。ね、高校生活どうでもいいって思ってたんなら、こんな僕の友達になっしてみない？』

「和貴……」

マキの言葉を待たずとも分かる。

「あいつが何を企んでいたかは知らねえが、それほど悪人扱いはされてない。陸上部の一部を除いてはな」

職員室前ですれ違った五人を思い出す。

「多少の噂が流れようと大抵の奴は気にしねえ。和貴の人柄を知ってるからだ」

また汽笛の音が一つ。

「お前の知ってる和貴も、同じじゃねえのか」

「……うん」ようやく涙を拭った。

「優しくて人当たりがよくて。人のことを気にしてばかり」

「それが和貴だ。誰かを守るためなら自己犠牲もいとわねえ」

「自己犠牲？」

「自分が傷付いても構わないと考える奴だ」

眉一つ動かさずに語るマキが、ふと顔を背けて呟く。

「……俺に遠慮してるのかもしれないな」

「何それ」

「詳しくは言えねえ」

初めて口角を上げた笑みを浮かべ、マキはポケットティッシュを差し出してくる。

相当酷い顔をしているらしい。遠慮なくチーンと鼻をかんだ。ついでに貰った袋にもごみを入れてしまう。

「マキが和貴の話をしてくれるのは嬉しいけど、和貴が直接私に言ったことが真実だから」

噂話に入つて。『ここだけの話』と言われるものほど、当てにならないものはない。

「ああ」

マキはいかにも分かっているという口振りだ。

「直接聞くのも真実だけどね。今の話をふまえてくしゃり、頭を撫でられる。」

それだけで鼓動が苦しいほどに速まる。

「寝るぞ。冷えてるから風呂入れ」

マキが立ち上がったから、息を整えて続いた。

並んで歩くと、毎回身長差に驚く。

座っても座高の位置がまるで違う。

けど、さっき話していた時は背中を丸め、目線を合わせてくれた。いた。

その程度のことと頬が緩むなんて。

私、重症だ。

「お風呂って二十四時間入れるんだね」

「ああ。夜出かける客もいるから玄関も開けている」

「宿直さんがいたよね。夜中も働いてるなんて、大変なんだね」

紺の半纏はんてんを着た、玄関口に座るおじいさんは、マキの姿を認めると頭を下げた。

振り向けばさっきの砂浜は目の前で、私の姿が丸見えだったのかもしれない。

「部屋の場所は覚えてるよな」

私の方向音痴は彼も知っている。広い旅館で迷われては困ると思つたのだろうか。私は笑って答えた。

「二階の藤壺」

源氏物語に登場する悲劇の女性の名前だ。

夫に真実を隠したまま源氏の、不義の子を生む。どんな心境だったろうか。

「じゃあな」と階段を上りかけたマキ。

「待つて。これ」

羽織っていたカーディガンを慌てて手に持つと、

「やる」

その背中が、名残惜しくて。

「マキ。今日は、ありがとう」

「いや。早く寝ろよ」

顔すら見ずに素っ気なく返されるけど、『礼を言われる筋合いはない』って言われるよりは進歩したかな。

階段を上っていくマキの後ろ姿を、消えてしまっても私はずっと見続けていた。

結局一睡も出来ず、二度目の朝風呂に入った。

檜の床に岩風呂。透明で柔らかな温水が絶えず流れる。朝の五時だから貸し切り状態。いい気分です戸を開くと、

「おはようございます」

通りがかった女将さん、つまりマキのお母さん呼び止めた。

青みがかった緑の着物。後ろ姿に、白いうなじが涼やか。

「真咲ちゃん。お部屋に行こうかと思ってたの。これを渡そうと思つて」と袖口から何かを取り出す。「眠れない夜にはいいわよ」

ラベンダーが香るアイピロー。

「いいんですか」

「よければ使つて」

クンクン犬のように匂いを嗅ぐ私を、女将さんはゆったりとした笑みで見つめる。

「何だか落ち着かない所だったかもしれないわね。ごめんなさいね」

「いえ。初めて来ましたが海が綺麗で。こんな素敵な旅館に泊めて下さつて、ありがとうございます」

私が夜起きていたのを知っているとは、一体いつ眠っているのだろう。

宿直さんに聞いたのかもしれないけれど、何となくこの女将さんがその目で直接見ている気がした。

だって、マキのお母さんだから。

一礼をして去ろうとする彼女を私は呼び止めた。

「女将さん。一つ、伺っても宜しいでしょうか」

他人行儀な言い方に、おばさんでいいのよ、と口元を綻ばせる。

「マ……一臣さんにお兄さんはいらつしやるのですか？」

「ええ。樹きじというのよ。今は家を出て、サッカークラブの練習生をしているの」

ぱつと一瞬顔を輝かせても、落ち着かせて微笑を纏う。感情を抑える辺りは、職業柄かもしれないが、マキに似ていると思った。

彼も、仏頂面という仮面を被っている。

「サッカー選手、なのですか」

「そう。あの子はうちの誇りよ」

「一臣さんのことはどうなんですか」

仮面を貼り付けたまま、わずかに眉尻を下げる。

「朝食の準備がありますので、私はこれで」

「おばさん」

青緑の背に小さく叫んでも、反応はない。

『親がいればいいと言うものでもないがな』

マキの言葉が急速に再生される。

紗優が薔薇で和貴が桜の花だとすると、百合の花。凜としてたおやかに美しい。

そんなおばさんがはっきりと拒否した。今の質問に答えるのを。

足を引き摺るように二階へと上がる。

あの海が見たくて。

廊下を突き当たると、海野の海をいつぱいに映し出す窓。

どんなことがあっても、変わらず波音を響かせる。

昨日……いや、今朝座っていた流木を見つけた。

砂浜を走る白い人影も。

「マキ」

つい二時間前に別れたばかりの彼だった。

白いキャップに、白のタンクトップにハーフパンツ。

規則的な手の動きで、スピードはゆっくりりと、地を蹴る感覚を確かめるように走っていく。

『何故続けるのか俺にも分からねえ』

「マキ……」

おばさんの拒絶を思い出すと心がひりひりする。

歩くことに没頭しているように見えるけれど、何だか痛々しかった。

涙腺が弱まっていた私は、そんなマキを見て頬を濡らすのを止められなかった。

\* \* \*

時間が過ぎるのはあっという間だった。

緑川へと戻る電車の中。

隣には紗優、その正面にはタスクが熟睡。通路を挟んでタスクの隣には和貴が寝ている。

マキは、海野駅まで私たちを見送ってくれた。「面倒くせえ」とか言ってたけど、冷たい振りをして無駄なんだよね。

思い出し笑いを止めて、私はある決意と共に、席を移る。

「和貴」

頬杖で口元を隠し、目を瞑る様は猫のように愛らしい。

「起きてるのは分かってる。今、眼球がぐるっと回った」

机に手をかけて顔を寄せてみると、

「二人きりだと、話さないんじゃないっけ」

目を瞑ったまま唇だけが動いた。

「自己犠牲。誰かを守るためなら自分が傷付くのもいとわない」

眼球がまた動く。

「人当たりがよくて子リスみたいで。いつも笑ってるけど時々策略家。それが、私の知ってる桜井和貴なんだけど。」

「悪い人を演じるのは性に合わないんじゃない」

「なにか誤解してるね。僕は、キミの考えてるような人間じゃない」

「もう一つ。和貴は嘘をつくとき、右耳がちょっと動くの。気付いてないかなあ」

かすかに頬の筋肉が震えた。

貝のように口を閉ざすのなら、私はそれを開くまで。

「最初のはマキの受け売りだけどね。

嫌いになるうと思っただけど決めただ。

和貴のことを信じるって。

ドッジボールとか色々私を助けてくれたし。簡単に人を嫌いになれるくらいなら、誰も苦労しないよ。

それに、耳の癖に気付いたら怖くなくなった。和貴、演技はあんまり上手くないね」

「そお？」

と、瞼が上がる。

その瞳は屈託のない無邪気さを映していて、いつもの瞳に心から安堵した。

「それは真咲さんも同じだよ。嘘をつくとき、右手で髪をいじる癖がある」

「えっ、やだ。嘘でしょう」

「耳の話は嘘だね。たぶん、僕の口を開かせるための」  
ばれましたか。

たった今思い付いた、口から出まかせです。

「こんな僕に関わるなんて、真咲さんはおかしいよ。水野くんが言うとおり、女の子とばっかいるのはホントだし」

「そんなことないでしょう。……まあ、紗優とは仲がいいなって思うけど」

何故か無然とする和貴。「紗優のことは幼なじみとしか見てない」

軽く笑えた。

紗優と全く同じことを言う。

「クラスでも男女分け隔てなく喋ってるし」

「一線は引いてる。踏み込まれたら避けれる自信はないよ」

和貴はふつと鼻で笑うと、

「真咲さん。後悔しても知らないよ？」

頬杖を付いたまま、桜満開の笑顔を見せた。

ノーガードでまともに食らい、脳髓からくらくらするけれども、再び和貴の笑みが見られてよかったと思う。

私はそんなに面食らった顔をしているのか。和貴は肘で口元を隠しつつも肩を小刻みに震わせる。

「人の顔見て笑うなんて、失礼だよ」

「だってさ。ちよつとからかっただけで鳩が豆鉄砲くらったよな…」

…「ごめん、も、無理」

ぶくつと吹き出す。

酷いなあと思いつつも、あんまり気持ちよさそうに笑うものだから、私はつられてしまった。

初めて緑川市に来た時とは比べものにならない気持ちで。

笑いの二重奏に、何だ何だと紗優とタスクが目を覚ます。

こんな私たちを乗せた電車は、ガタゴトと音を立てながら穏やかな日常へと戻っていった。

十二月某日。

居間で一人、頭を抱えていた。

テーブルには、一枚のプリント用紙。

迫る足音と共に、ガラス戸が開く。

その辺の新聞を引っ掴んで隠した。

「真咲、今日の新聞はお祖父ちゃんとかやよ。それ昨日のじゃない」  
「気になる記事があつて読んでたの。ええと、韓国大統領選挙、合併新党であるハンナラ党。野党が勢力を伸ばす中、どこまで票を伸ばせるか……」

母は生返事をしながら座ると、おもむろにエプロンのポケットからキーホルダーを取り出した。

「それ、ハマってるね」

「休憩の度に気になってしもうて」

今頃、たまごっちにハマる人がいるとは。

ブームに乗っかるより、私は都会の傍観を選んだ。無機質な点の塊よりも、現代を行き交う人間模様の方が格段面白かった。

「じゃ、私、出かけるね」

新聞ごとプリントを手に丸め持つと、

「どこ行くが」

声はかけるものの、意識は完全画面の中。ゲームに熱中する小学生。

「学校の図書室」

「勉強熱心やね」

「期末とパソコン検定が近いからね」

閉まり切る前の隙間から窺うと、何か必死にボタンを叩いていた。責めることは出来ない。

睡眠は数時間。起きている間の殆どが仕事。調理師免許を取るの

が目標で、お店で働く前後には祖父から料理を教わる。

息抜きを出来る時間は、皆無。

昔から、こう。

町田にいた頃もPTA役員やボランティアで、専業主婦なのに外で働いてばかりだった。

そんなだから、家に寄り付かない私と父との溝がますます深まった訳だけど。父方の伯母と祖母の風当たりも強かった。

前はブランド品しか身に着けなかったのに、今はさっぱり。髪など一度切ったきりで、洋服も何も一切買わない。

頻繁に飲んでいたヴィンテージもののワインも断ち、口にするのは麦茶のみ。向こうにいた頃とは比べ物にならないほどの質素儉約ぶり。

同時に、向こうでは金銭気にせぬ生活を送っていたのだと思い知る。

部屋を閉ざし、ドアに凭れて溜め息を一つ。

『進路希望調査』

名前以外空白のプリントが手の中に残った。

「この前パソコン検定を受けた者は結果が届いとる。下田先生の所へ取りに行くように」荷物を纏め始めると宮本先生はこちらを見やった。「それから都倉、ちよつと来なさい」

教室を出た所で合流した。

「進路指導室で話すか」

「はい」

先生は色々と話しかけてくれた。

パソコン検定の準四級に合格したこと（結果を貰ってないからネタバレなんだけど）、部活や勉強を頑張っているな、と誉めてくれたり。

場繋ぎに寝め言葉が続くのは、大概、悪い話の前触れだ。

「進路希望調査を見た。ちゃんと考えた結果か」

ほら来た。

先生の後ろの棚には、うちの高校の年鑑がずらりと並ぶ。黄、青、緑、赤……無意識に色を追っていた。

「都倉の成績なら大概の私大は狙える。国公立は、五教科のバランスを何とかせんと厳しいが」

宮本先生は私が不得意な生物の担当でもあるので、バランスの悪さを重々承知。

文系の流れで理科は何となしに生物を選択しているが、『遺伝』でつまづくのは致命的だ。

「自分の将来のことやぞ。親御さんには相談したのか」

「はい」

「……そうか」

嘘ですが。

「都倉は読書ばっかしとるし、てつきり進学志望やと思つとってんけどな」と先生はプリントに目を落とす。「大学を出ていないと、後悔することもある。学歴が必要な職業は世の中に沢山ある」

深く深く息を吐く。

「国立や私立でも、奨学金貰える所はある。もし、やりたいことが見つからないんなら、大学通いながら探してもいいんだぞ」

「はい」

「一月にまた調査があるから、それまでにもう一度よく考えや。その結果で、三年のクラスが進路別に分けられる」

「分かりました」

宮本先生が手にするのは、私が提出した進路希望調査のプリント。

『就職希望（家業手伝い）』と控えめな文字。

先生にそう言われても、私は諦めていた。

祖父母も母も、生きることでも精一杯。

生活に余裕がないのは知っている。

大学に行くということは、緑川を離れ、一人暮らすということ。

大学の学費に加え、一人生きていくための生活費が必要となる。

駄々を言うつもりはなかった。

元々私は、あの家に存在すべき人間ではないのだから。

自分が息をするだけで余計なお金がかかっているとすら思えてくる。

職員室で合格通知を貰ったというのに、また一つ嘆息。

町田にあのまま住んでいたら、その辺の私大には行けたかもしれ  
ない。

ますます気が塞いだ。

クリスマススイブと同時にやってきた終業式の日。

前日に、タスクはとんでもないことを言った。

「冬休み中も部活動をします」

特に私と和貴から大ブーイングが出た所、

「桜井くん、都倉さん。お二人は確かにパソコン準四級を合格されましたが、僕から言わせて貰うとまだまだです。」

桜井くんはタイピングが遅いですし、都倉さんはハードの知識が足りません。勉強して下さい」

「……はい」

パソコンの分野で何かタスクに楯突くと、よくも悪くも倍となつて返ってくる。

因みにマキとタスクは三級、残る紗優は準四級に合格している。

「マキって、意外とパソコン得意なんだね」

雪がしんしんと降り続く、帰り道。

「意外とは、心外だ」

「ごめんごめん」

小走りで追い付こうとしたら、ずる、と前に大きく滑る足。転ぶ寸前を、空を指した傘でバランスを取りながら、逆の足で踏ん張って堪えた。

「お前。奇跡的だな、その動き」

「うるさい」

添えられる手を照れ隠しで軽くはねのけた。

置き去りにして歩き出すけれど、さつきよりは明らかにスピードを落とした彼。黒のダウンコートに黒い手袋。青空の色をした傘。雪が彼の周囲を白で彩るように降りしきる。

「雪、今日も凄いね」

「ああ。毎年こんなだ。これでも俺が小さい頃よりは減った方だ」  
歩く度に踏み締められ、固く白に塗り潰される歩道。脇の民家前には雪が二メートル近く積もる。雪掻きをサボるとああなるらしい。  
「海野も、雪って凄い？」

「ここよりも量が多いな」  
「それでよく電車が止まらないよね。東京なんて、ほんの数ミリ積もったくらいで遅れるんだよ」

「電車の本数が少ないからな。駅員がいつも雪掻きをしている。観光客も来るから、止まっては話にならねえ」

「そっか」

「……波の花」

「え？」

急に立ち止まった。傘で青く照らされるマキも綺麗だった。

「わざわざそれ目当てで観光客も来る。聞いたことねえのか」

「ない」

「残念な奴だ」

「そうですか」

可愛くない応答など気にも留めぬ様子で、再びマキは歩き始める。  
「海水に浮遊するプランクトンが粘液となって、岩にぶつかり泡となる。花のように舞うから『波の花』。波が荒い日本海でしか見られない」

「詳しいね。私、初耳だよ」

「だから雪の中もまともに歩けねえんだ。これだから都会もんは」

「マキだって生まれは違うでしょう」

「京都に生まれたただだ。生粋の海野育ちなんだが文句あつか」

「だったら京都弁か海野弁喋りだよ」

「海野弁なんてねえよ」

「じゃ、京都弁。あ、でもマキのガラじゃないよね。おいでやすって言われても気持ち悪い」

鋭い眼光が飛ばされる。

「そ、そうやって何でも睨めば解決するってもんじゃないよ。慣れれば全然怖くないし。悔しかったら口で言い返してみ」  
その瞬間。

ピタリと右手が私の口を塞いだ。

「明日、放課後、空けとけ」

返事が出来ずに手の甲をパンパン叩く。

手をやっと離すとマキは、苦しそうな顔を見て実に鮮やかに微笑んだ。

「覚悟しとけよ」

クツと笑い、手早く傘を畳んで駅の中へと消えた。

「暴力反対」

その程度のことと顔が真っ赤で息も絶え絶え。

蚊の鳴く声しか出なかった。

という訳で、午前で終わった終業式ののち。

マキと二人で電車に乗っています。

冬休みが始まると、普通は友達同士、学校近辺で遊ぶものらしい。クリスマススイブっていうのにカップルは少なくて殆どの人が友達と。寂しいよね。ま、昨日まで予定がなかった私が一番寂しいんだけど。

「ちょっとヤボ用で」なんて断ると。

小澤さんは「普通、女子高生が『ヤボ用』なんて言わんて」と笑い、

紗優は「ふーん」とまた意味ありげに微笑んだ。

和貴は予定など聞かず一目散に教室を去ったし。

タスクとはいつもの場所で綺麗に分かれた。「また明日」とは言われたけど。そうそう、パソコン部があるからね。

「切符だ。乗れ」

いつも駅前で別れるのに、まさかマキと改札を通る日が来るとは。

オンボロの電車で向かい合うだけで激しく鼓動が打ち鳴らす。  
なのに、この人といったら。

「海野に着いたら起こしてくれ」

テーブルに眼鏡を置き、腕を下に突っ伏した。

「寝不足なの？」

「あー……『三国志』やり過ぎ、た。直江兼続が強えーんだ……」  
寝た。

昨日ほど多くないが、強風で斜めに降り続く雪。吸い込んでいく  
波は荒い。

眺め続けようと努めても、どうしてもマキに意識が戻ってしまっ  
て。眼鏡も理知的で格好いいんだけど、外した姿も目の大きさが際立  
って。寝ている姿に至っては、無防備であどけなくて。

いくらでも見惚れてしまう。

コートを脱いだ首元が寒そうだったから、ピンクのマフラーを外  
して掛けた。

近くでその寝顔を拝むと心臓が爆発するので、なるべく見ないよ  
うに、そろりそろりと。

「起こせと言っただろが」

私も突っ伏して眠っていたらしい。

「ごめん。私も寝不足で」

「今度は何を讀んだ」

「レヴィナスの『実存から実存者へ』。哲学なんだけど」

へへっと誤魔化し笑うと、首元が温かい。

ピンクのマフラーが巻かれていた。

涎が垂れてないだろうかと口許を拭ってみる。セーフだったが、変な顔して寝てなかったかまでは分からない。

「着いたぞ」

二度目の海野駅に降り立つ。

近くの停留所からバスに乗り、海沿いをひた走る。ゆるいカーブがぐるぐると続き、すっかり前を向いてないと酔いそうだ。

ふと右を見ると、……寝ていた。やっぱり。

口が軽く開いている様に、吹き出しそうになった。なのに、胸がきゅんと締め付けられて。目を離すのを脳が拒否する。

なんて愚かなのだろう。

この病を発明した人に、是非会ってみたい。

マキには目的地センサーでも付いているのだろうか。一つ前の停留所に止まるとカツと目を開き、腕時計を見て何事もなかったかのように頷いた。その動作が動物的かつ野生的で、また笑えた。

「ここだ」

日本海の風が吹きすさぶ崖の上。

いささが頼りない手すりから下を眺む。荒波が崖にぶつかり、吹き抜ける風に負けない唸りを上げる。

「こっからじゃ見えねえな。向こう行くぞ」

崖を下る段を辿ると、開けた草むらへと繋がった。

荒くれる海の他に、小さな岩が一面並ぶ岩場と、防波堤が目につく。

岩の間を縫って白いクリーム状の泡が広がり、背の高い岩に叩き付く白波。

防波堤には何十メートルあるか分からない高い波が幾度も打ち荒れて、その度に白雪のような波の花が舞い上がる。

静寂な世界に響く波の轟き。風の響き。白い瞬き。

「……すこい」

その一言しか出なかった。

「気温、風速、波高。三つの条件が揃わないと見られない。運がよかったな」

「日頃の行いがいいからね」

「どこがだよ」

ふわふわ空を舞う花を背景に、ほんの少しだけけれど笑った。口角が軽く上がれば十分に笑ったことになる。

「車で来る所だ。近くに駐車場があったろ」

「あ、うん」

それから場所を変え、崖の下方に位置する海岸にやって来た。

透明な海水が美しく、波打ち際にも白い泡状の波が押し寄せる。

海に寄るのは危ないそうだ。砂浜に下りようとした所をマキに止められた。

国道と砂浜の間の歩道から、大きな粒の雪がぱらぱらと降りしきる中を、傘もささずにそれを見ていた。

「ここ来んのは久しぶりだ。昔、兄貴と来ていたんだがな」

遠くの船を眺め、どこか懐かしむようにマキは目を細める。

「樹さんと？」

白く短い息がこぼれる。

「この前、家に来た時にも聞いたのか」

「お母さんから」

「そうか」

あの写真を思い出しながら、冷たくなった指先を擦り合わせる。

「マキと似てるよね。小さい頃の感じだと」

「二歳違いなんだが、よく双子と間違われた。うぜえの何の」

そんな嫌そうな顔しても無駄だよ。

お兄さんのことが好きって顔に書いてある。

だって、右眉が上がってるから。

ふふつと笑うと、「何笑ってやがる」と睨まれた。

「今はどこに住んでるの」

「東京だ」

「会えなくて寂しい？」

「なわけねえだろ」

「私、一人っ子だから、兄弟がいる感じって掴めないんだよね。喧嘩とかするの」

「住んでた頃はな。呂布をどっちが使うかで殴り合いもした」

三国志対戦かよ。

争うならせめてウイイレにしてくれ。

私の白けた顔に気が付いたのか、マキは別の角度からお兄さんの話を始める。

「小せえ頃からサッカー漬けだった。兄貴がボランチで俺が右サイドバック。天才兄弟だとか言われて、調子こいてたな」

サッカーの腕前は分らないけど、少なくとも男前が二人という時点で騒がれたに違いない。

「兄貴が注目され始めたのは高校からだ。オフアーは来なかったが、セレクションで受かった」

「お兄さんと二人兄弟だっけ」

「そうだ。……もう少し出来のいい息子がいれば違っただろうかな」  
「そんな風に言うもんじゃないよ」

自嘲的な響きを聞いて、微笑でかわしたマキのお母さんが思い浮かんだ。

冷たい仮面を被ったお母さんを。

「片やセミプロ、片や出来損ない。比べねえ方がおかしい」

「サッカーが出来るか出来ないかが全てじゃない。」

私、知ってるよ。マキがどういいう人か。言葉遣い悪くしてても、それよりずっと優しい人だって……!」

目を見開いたマキが視界に入った瞬間、

「ぶ、ええーつくしよいつ」

おおよそ女の子らしからぬくしゃみが飛んだ。

「帰るぞ」

「……ふあい」

ずずつと鼻をすする。酷い鼻声だ。

「お前、どういづくしゃみだよ。きつたねえな」

先を歩く肩が震えている。

うるさい、と言いつ返すも声に力は入らなかった。

笑いを堪えながら崖を見上げるマキ。その黒髪にも肩にも丸い雪が降り積もる。

白と青の雪世界も、道路を行き交う疎らな車でさえも、彼の存在一つで違って見えた。

心なしか普段より穏やかな表情。少なくとも仏頂面ではない。

後ろ姿でもいいから、ずっと、いつまでも見つけていたい。

名残惜しい気持ちでその場所をあとにした。

この時の私は、次第に距離が近付きつつあると思っていた。

築いた壁をなくしてくれる日も近いだろう。

仏頂面という仮面を取り払い、いつかは本当の顔を見せてくれるのだろうと。

それが、独りよがりの幻想に過ぎなかったのを私が知るのは、もう少し先の話となる。

「都倉さんに蒔田くん。お二人には特別に宿題を差し上げます」  
パソコンルームに全員が揃った、冬休み最初の部活。

「タスク、勘弁してよ。私、風邪引いてたんだから」

あの翌日。クリスマス本番というのに、熱を出して寝込んだ。  
どうにも刺激が強かった。

体の芯から冷えたせいもあるけれど、よくよく考えたらクリスマス  
スイブにデートもどきだった訳で。気付くとぐんぐん熱が上がった。  
そして三人しか揃わぬ部活は、お開きとなったらしい。

「パソコン部の忘年会も兼ねていたのですが、残念です」

と眼鏡を外して拭き始めるタスク部長。肉付きのいい、健康的な  
頬の輪郭。

「んなの知るか」少し掠れた声のマキ。彼も寝込んでいたらしい。  
「まあまあ。タスクは心配してたんだよ。二人ともなんかあったの  
かなあって」

穏やかに仲裁に入る和貴。

紗優といえは、焦点合わない目でタスクを見つめるだけ。

駄目だこりゃ。

「こつという時の連絡先って必要だよな。欠席、遅刻の時に」と彼  
が顎を摘まむと、

「当面は僕の家で……普段は隣の電話を使わせて貰いましょうか。

連絡網も必要ですね。あ、都倉さん。纏まったら名簿を作って下さ  
いますか」

「はい」

タスクの目が笑っていない。

従って、断れない。

「では皆さん。席について下さい」

右から肩を突かれる。

『何？』

声を出さずに答えると、二カツと歯を見せて画面を指す。

新着メールが一件。

『件名：真咲を見た！ 投稿者・K澤M奈。』

クリスマススイブの夕方、駅に向かって歩いてみると、連れ添って歩く真咲とマキを見かけました。じゃじゃん。

慌てて隠れましたが、中々いい感じのお二人で、声をかけられませんでした。

ストラップう。

じゃなくて、よしののイチゴパフェよろww』

紗優。

語尾が2ちゃんねらーっぽいけれど、どうかなさいましたか。

私は二秒で返信した。

『件名：却下です。』

地味な内容のため番組では取り上げられませんでした。また来週『ひつどーい』と紗優が頬膨らますと、

「お二人とも、いい度胸をしてますね。次、授業中に私用メールをすることがあれば、メールの使用を禁止します」

タスクが眼鏡を光らせる。

これには全員ブーイング。

「でしたら、宮沢さん、都倉さん。Outlookを閉じて下さいね」

「はい」

にしても、正面に立って画面は見てなかったはずなのに、何で私と紗優がメールしてると分かったのだろう。

恐ろしい。

ともあれ、タスクの独裁政権っぷりでパソコン部は上手く成立していた。

「いったただきまーす」

どうぞどうぞ。

喜び勇んでイチゴパフェにありつく紗優。

私の前にはミルクティ。

『よしの』という、小さなカフェレストランに来ていた。

開けた窓に望むカウンター席。建物を囲む庭が見えて、新緑の季節には森の中にいるような感覚を味わえるだろう。

歩いて十五分もかかる立地だけど、帰りに立ち寄る緑高生も多かった。私も小澤さんたちと一度来たことがある。

顔よりも大きいパフェが人気で、紗優の好物な訳で。

律儀におごる私はお人好しだ。

けれども、彼女はみんなの前で何も言わなかったのだから、それなりに恩義も感じる。

ピンクの財布のガマ口を開くと、肩が落ちた。

今月の残高、千円ぽっち。

「真咲は食べんが」

「いい」

この寒いのにパフェを食べるのは店内に紗優だけだ。

「そう言わんと。はい、あーん」

山盛りのスプーン。差し向けられるまま口に含むと、コーンフレークとベリージャムの酸味と濃厚なバニラアイスが混ざり合う。

「んわっ。美味しい」

「でしょでしょ。あたしの一番のお気に入りなんよ。バナナチョコやブルーベリーも美味しいんやけど、この甘酸っぱさがたまらんの」

リスのように頬いっぱい詰めて、指折り数える姿。

見た目にはそぐわぬ食いしん坊っぷりに笑っていると、

「初恋の味はどうですか、真咲さん」

激しくむせた。

「大丈夫？」

「いきなり変なこと、言わないでよ」

「ごめんごめん、と私の背を擦りながらも、

「だってさあ、真咲はマキが初恋っばいから、からかいたくなつて」  
「初恋くらい、あるよ」

「そうなが。いつ？」

「コホンと咳払いをする。」

「幼稚園の時、同じ組の鉄也くん」

「どーせままごとみたいな恋やる。そっからは？」

首をかしげると、

「真咲の恋愛遍歴を聞いとるんやけど」

ぶら下がる洒落たライトを見つめ、窓の外を見つめ、半分に減ったパフェを見つめると、逃げ道がないことを私は悟った。

恋バナをするのは初めてだ。紗優の過去を掘るのが私の専門。

「中学の、卒業間際に告られて三ヶ月だけ付き合ったかな。高校は別で自然消滅したけど」

「ありがちやねー。高校やとどうやったん」

「こつちに来る直前に、二週間だけ」

「まっさか。離れるの分かつとんのに告白されたが」

「当たり前。そういうシチュエーションに弱い男子っているんだね」

空となったカップにポットの紅茶を注ぐ。

砂糖とミルクの容器も全て白の陶器で統一されている。シンプルだけれどセンスがいい。

「デートとかしたん」

「一回だけ。『もののけ姫』見に行ったの」

鈴を転がすような声に対し、淡々と返事を続ける自分。あまりにも冷静なので、二人とも本気ではなかったことを改めて認識する。

そんな私に、紗優はあんぐりと口を開き、パフェを突つつく。

「ふつー、デートなら恋愛映画やる」

「映画でもって誘われて私が選んだの。面白かったよ」

「そういう問題じゃないやん」

はあー、と肩を落とす。

そして真剣な目で私を見てきた。

「ひよつとして真咲って……バージョン？」

答える前に、こくんとミルクティを喉に流し、一呼吸整える。

「生娘ですが、それが何か」

「ええーっ。やっぱそうなん」

「しーっ。声が大きい」

離れた客の視線を感じた。聞こえたのが今の一言だけならいいんだけど。

「じゃ、キスも。手繋ぐのもないん」

「手を繋ぐくらいはあるよ。でも、」

手のひらを見つめた。

繋ぐだけで、電流が走ったみたいにビリビリとしたのは、……マキだけだ。

正確には、借り物競争の時に繋いだ和貴の手にもドキドキしたけれど。

「全部これからなんやね。あーうらやましい」

「羨ましいのはこっちだよ」

「そお？」

大きく伸びをしながら微笑んでくるけれど、そういう話になるとみんなに付いて行けないので引け目を感じる。

「世界観は変わるんやけど、簡単に捨てたらいかんのは確かだよ」

「世界観が、……変わる？」

カップを持つ手が止まる。

「そ。価値観が変わるし世界が違ってみえるんよ」

「凄いねえ」口に含みながらふふ、と笑うと、

「真咲も経験したら分かるよ。マキとだか和貴とだか分からんけど」  
最後は盛大にむせた。

明けて、一九九八年一月二日。

タスクの提案で、部員全員で初詣に来ていた。

石の鳥居を潜れば、そこは塩川神社。夏に御輿に触れた思い出の神社だ。

肌を刺すような暑さは跡形もなく、厳かな冬の空気が辺りを包む。うっそうとした緑は静かに佇み、白く凍った大地。

雪が降ってはないものの、唯一露出する顔と耳は寒過ぎて痛いほどだ。

氷点下なのに、ミニスカートで素足を晒す紗優にはあっぱれと言いたい。

初詣は元旦のお昼にかけてがピークらしい。とはいえ、神社の前には既に人々が列が成していた。

真っ先に並ぶのはマキ。面倒くせえと言いつつ乗り気なんだから。タスクと紗優が横に続き、私は手招きをする和貴の隣に立った。

紗優とタスクの会話にマキは興味なさげで、遠くを眺めてぼーっとしている。

あ、欠伸した。

まさかとは思うけど、寝起きじゃないよね。

「おわっ」

間に入る茶髪。和貴だ。

自分で人を驚かせておいて、小刻みに肩を震わせる始末。

「笑い上戸は今年も変わらないね」

しかめっ面を作ってみた。上手く出来ているか分からないけれど。腰をやや曲げる彼は、真っ赤なダッフルコートに、茶系チエックのパンツ。足元はホーキンスの編み上げブーツという可愛らしい学生スタイル。

まあ、似合わない服は存在しないのだろう、桜井和貴ならば。

「冬休み、元気してた？」

私の言葉に紗優が急に振り返り、

「風邪引いたんよ、和貴は」

「えっ、そうなの」

「年末、会わせてもらえんくて。昨日も玲生連れて初詣誘ったけど断られてん」

「大丈夫なの？」

「熱出て苦しそうやておじいちゃんがゆとったけど、元旦には落ち着いたって」

「詳しいね、紗優」

「ご近所さんですから」

紗優がまた胸を張るも、沈黙を保つ和貴。

「……和貴」

拳を口に当てて黙りこくる。

「和貴、大丈夫なの」

その大きな瞳を左右に泳がせて。

「和貴、ねえ」

三度目に名前を呼ぶと、

「《大丈夫やから》」

ん？

「和貴、声……」

「ガラガラに枯れてしもうとるな」

紗優は大口を開けてアハハと笑った。

男子にしては明るく高い声をしている和貴。ようやく聞けたのはもの凄くハスキーな低音で、一瞬、誰が喋ったのか分からなかった。

「《喉風邪だから全然へーき》」

「ぜえったいマキが真咲の風邪貰ってんろ。熱だしたんあのあと直ぐ」

最後まで言い切る前に、和貴の手が紗優を軽くはたいた。

冗談でも女子には手を上げない和貴。

それを見て思った。

マキか私に風邪を移されたんじゃないのかと。

だったらバレないように来なければいいって話もあるけど、風邪で休むなんて言ったら余計に気を遣わせる。

「和貴。あの、ごめんなさい」

「《じーちゃんが風邪もらっただけやから》」

「おじいちゃんはピンピンしとったやん」

再び左手が動いたので笑ってしまう。

「宮沢、順番だぞ」

紗優たちはもう賽銭箱の真ん前に来ていた。

上を向いたマキが鈴縄を掴み、がらんがらんと鳴らす。

彼の長身、動く白い指先。

流れる動作に見入っていたら、私たちの番がやって来た。

和貴の見よう見まねで、二拝二拍手一拝。

年に一度は神社へ行くのに、未だこの儀式には慣れない。

瞼を上げて隣を窺うと、まだ手を合わせて祈っていた。

睫毛がバツバサでお人形さんみたい。女子からすると相当羨ま

しい。

「ねえ」

列を離れた時に聞いてみた。

「随分長く手を合わせてたけど、何願ってたの」

途端、和貴はそっぽを向いて頭をかいた。

……変なこと言ったかな。

「《じーちゃんが長生きするように。ある人の願いが叶うように》」

「自分の願いごとはしないの」

「《そんなことないよ》」

「私は、みんなと家族の健康をお願いした。和貴の風邪も早く治り

ますようにって」

淡い瞳孔が開く。

それは一瞬のことで、凍てつくような空気の中、花開くようにふ

っと微笑むから、私は春が恋しくなった。

この時の私はまだ、みんなの気持ちにも、自分のことでもさえも気付いていなかった。

タスクの见えない想い。

紗優の切ない想い。

和貴の秘められた想い。

マキのまだ隠された想い。

私の人には言えない想い。

様々な想いを乗せて、新しい年が始まった。

一九九八年一月八日。

体育館で寒々と校長の挨拶を聞き終えると、温かな教室と休み明けの試験が待っていた。

但し、三年生は対象外。

翌週にはセンター試験を控える。必然、ピリピリした緊張感が漂う。

その空気は多少なりとも一、二年生に伝染するもので、帰りに紗優と図書館に立ち寄った。

ロビーにて、テスト勉強を済ませた脳に休息。コートに腕を通すと紗優が言った。

「真咲は来年、センター受けるん」

大流行りのピーコート。ロングブーツには個性を感じるが、「学校の下駄箱小さいし無理矢理突っ込んでるんよ」と嘆いていた。

「どうかね」

「進学せんが」

「就職希望」

吐く息が白い。ひっきりなく開閉する自動ドアが直ぐそこに。

「勿体ないなあ」

テストの都度トップ三〇が貼り出されるので、私の成績を紗優も知っている。

「宮本先生にも言われた。でも、今月の進路希望もそれで出す」

ガラスの向こうには、歩きながら赤本を読む受験生が。

お疲れ様です、と心の中で唱えた。

「真咲ははつきりしとっていいなあ」

手には寒さゆえかミルクココア。私はやはりミルクティ。

「進学しようか、専門行こうか。どうしよっかな」

「専門？」壁に預けた背が浮いた。

「美容師になりたいんよ。けど迷っとって」

目を伏せる紗優は、化粧つ気がなくとも綺麗だ。顔立ちに華やきがあつて。

「美容師かぁ。紗優には合ってると思うよ」

「ほんと？」

ぱつと瞳を輝かす反応で分かる。彼女が一番なりたいたいのものが。

「だって、いつもお洒落してるから。正直、この辺の子は無頓着な子が多いよね。タスクとか」

最後の一言は余計だったらしく、一睨みが突き刺さる。

「とと、とにかく。好きなことがあるんだったら、それを仕事にするのも手だよ」

うんうん、と嬉しそうに頷く表情を見て思う。

今の一言は、私にも当てはめられないのだろうか。

浮かんだ考えを、首を振ることで打ち消した。

「ね。みんなの進路って決まってるの？」

「タスクは県内の大学。和貴はこっちで就職希望。マキは……」

なにになに、と食い付いた私を、

「あとは自分で聞きなさい」

彼女は笑顔でかわした。

「……俺か？」

明くる日、直接聞いた私を誰か褒めて下さい。今日も仏頂面で怖いです。

「関東の大学で、歴史を勉強しようと思ってる」

「ふーん。東京？」

「出来ればな」

いつもタスクとパソコン談義をする姿からすれば、意外に思える。が、実は日本史の成績は校内トップクラス。

横山光輝の漫画もゲームの『三國志』も『信長の野望』もみんな大好きらしく。

大河ドラマの話をした時、福島正則みたいになりたくないと言っていた。私からすれば名前しか知らない人物なのに。

この人は、サッカーも怪我さえなければかなりのレベルだったらしく。

神は、何物でもお与えになる。

もつとも、本人が一番なりたいものになれないのなら、それらは意味をなさないのだが。

「お前は？」興味はないけれど一応、といった風に聞き返す。

「実家の手伝い、かな」

「そうか」

沈黙。

踏み締める音。

二歩、三歩。

「いつ、意外だと思わないのっ」

普通なら勿体ないだの大学行けだの言うでしょう。

慌てた私を彼は毅然と見返す。

「お前が自分で考えて決めたことなんだろう。誰かに止めて欲しいのか」

「痛い所を突くよね」

クールななりをして、興味ないって感じのくせに。

そんな所に惹かれるんだけど。

「迷ってなんかいないよ。考えて決めたんだから。あっ……」

冷たさが頬に。

雪だ。

降り始めた雪。もう駅は直ぐそこだった。

「じゃあな」

「うん、バイバイ」

一年後、マキは東京へ旅立つ。

私はここに残るから、残された時間を精いっぱい、悔いの残らぬよう生きるのみ。

黒い背中。改札から消えてしまっても逸らせなかった。

見ているだけでいいと思っていたのに、ちっぽけな願いにすら限りがあるのだ。

足元から崩れ落ちてしまいたい衝動を堪え、私は彼の姿をこの胸に刻み込んだ。

センター試験が終わると、校内は益々忙しなくなる。

三年生がひっきりなしに職員室と教室とを行き来する。

それから一週間も経つとがくと減る。私大の受験が始まるからだ。

国公立を目指す大半が県内。

私大なら選択肢少ない県を出て、関東が多い。次に関西。

学年の半分強が進学し、残りは短大に専門。就職は、家業を継ぐ者を入れても十名程度。

「……と、いった所だ。分かったか、都倉」

「はい」

「就職つつつてもうちからは難しい。殆どが東工に取られるからな。厳しいぞ」

「見つからないようでしたら、家を継ぎます」

「そうか」

二度目の進路指導室。

宮本先生が私を呼び出した。

考え直すよう説得に入るため。

分からなくもない。

東大や関関同立への進学は毎年二十名を超える。東工と比べ優秀な緑高ブランドを保ちたい。少しでも増やしたいのが本音だろうか。

それだけではなく、私の将来を案じてくれているのもよく分かる。

宮本先生は、エキサイトすると方言が多くなる。

「これが最後やぞ」

念を押されて部屋を出た。

ああ、疲れた。

肩をコキコキ鳴らすと、

「あれ。真咲さん」

和貴が真隣の職員室から出てきた。

「呼び出し食らったんだね」と彼は扉を見る。

「まあね」

「みやもっちゃんの言うことも一理あるんやから、そんな顔しない、しない」

そんなにかめつ面をしていたのか。言いながら私の眉間の皺を伸ばしてくる。

それから、イーツと自身の口を左右に引っ張り、豚鼻を作り、変な顔を次々と。

「ふっ、何してんの」

「真咲さんは一人でいる時難しい顔ばっかしてる」と指を離し、笑顔の方が似合うよ」

こんな笑顔をもるに向けられて、照れない女子が存在しようか。

「……和貴だって就職希望でしょう。何で私ばかり」

「真咲さんはこの土地に慣れてないから、みやもっちゃんは心配してんだよ。クラスから浮いとったのも気にしてたし」

あ、と短く言葉を切る和貴。

「言わんでいいこと言っちゃった」

シユンと尻尾を下ろす子リスに笑ってしまふ。

「気にしないで。事実なんだから」

まだしよげるか。

「和貴は何の仕事に就くの？」

これには犬がブンブン尻尾を振るように、生き生きとした表情へと変わる。

和貴は、愛らしい。

「ホームヘルパーになりたいんだ」

予想もしない答えが返ってきた。

「この町はお年寄りが多いからね。こっから離れたくないし、じーちゃんの友達と話してても楽しいし」

和貴は更に瞳を輝かせる。

「四大出て社会福祉士になる手もあるのに」

「じーちゃんは戦後の報償金と年金暮らしやから、そんな余裕ないよ」

平然と笑うけれど、それだけではないのを知っている。

紗優から聞いたんだ。

「高校卒業したら老人ホームに就職して、仕事しながらホームヘルパーの資格を取りたいって思ってる」

前だけを向く、確固たる足取り。

『和貴は、父方のおじいちゃんおばあちゃんも亡くしとるんよ。叔父さんもおじいちゃんもガンでな。親戚じゅう死だらけで呪われとる、って笑うんやけど、笑いごとやないよね』

「僕、おじいちゃんおばあちゃん世代にもなんだかモテるし」

ポケットに両手をつ突っ込んで、肩をすくめる。

『まー、和貴は自分やなくておじいちゃんを心配しとるんよね。唯一の肉親は、世界でたった一人だけやし。』

もし、万が一。おじいちゃんが亡くなったら、和貴は天涯孤独になつてまっ

「僕が、この町で出来ること。なんかあるかなあつて考えたら、そうなった」

そんな和貴の背中へ、

『僕を受け入れてくれたこの町に感謝してるから、恩返しがしたい…… やつて。あいつ、照れ臭いとか茶化して一度しか言わなかったけど、多分本音やわ』

とても大きく見えた。

にこやかに振り返った顔色が、瞬時に変わる。

腰を屈め、目を覗き込み、

「僕がみやもっちゃんに説教しようか」

「え？」

「真咲さんを泣かせるなんてさ」

ひとしづく頬を伝う感覚。

それを和貴の優しい左手が拭う。

「宮本先生は関係ないよ。最近泣き上戸で」

「いまの話のどこに泣くツボがあるんだよ」

『親や同級生を恨むのは筋違いだろが』

マキの言った通りだった。心を固く閉ざす私に比べ、和貴は周りのことばかりを考えている。この土地や人々に感謝しつつ。

純粹無垢な和貴の本当が見えた気がして、心が震える。

「和貴は凄いよ。元々なりたいものとかなかったの」

「うーん。陸上にはハマつとつたけど職業とまではいかないし」

「……手」

「うん」

「そろそろ離してくれるかな」

和貴の手が頬に添えられたままだ。

「真咲さんが笑ってくれるなら」

「何それ」

ふふつと笑うと、ゆっくりと感触が離れていく。

「笑ってる方が合ってるよ、真咲さんには」

喉を鳴らす猫のように目を細める和貴。

頬が、熱い。

手のひらの形にみるみる熱が加わるのを感じた。

背を向けた彼の小さな一言がよく聞きとれなかった。

「そーやって、いつも僕の心に入り込んでくるんだから」

「おい」

振り返るとマキがいた。

「行くぞ」

「あ、今日は部活行けないの。家の手伝いがあつて。タスクに伝えといてくれる？」

頷くマキを見つつ、手早くコートのボタンを留める。

「送らなくて平気か」

「大丈夫だよ、まだお昼前だし。じゃあね、マキ」

「ああ」と答える声を背に教室を出た。

夕方に団体のお客さんが入っている。お皿を並べるだけでも手伝つて、とお祖母ちゃんに言われていた。台所が使えないから、自分の分の夕食は用意しておいて、とも。

財布のガマ口を開くと、

「六百円」

心許ない。

買い足すものがあるか聞いて、ついでにおつりも頂いてしまおう。ムフフと一人笑つて小走りをしていたら、視界は急展開。校門を出て派手に転んだ。

「あー、いったあ」

シンプルなミドルブーツの靴底はツルツル。

この地に住む人の殆どは、見た目より実用性重視。私が都会の靴で雪道を歩き慣れるには、まだまだ時間が必要のようだ。

コートに付いた雪を払い、飛んだかばんを探していると、  
「これ」

知らない女の子だった。お人形さんみたいなおかつぱの。  
手には、私の学生かばん。

ベージュの丸襟コートは、濃色が人気の緑高では珍しい。

いや、うちの高校ではない。

肩に掛けたかばんには、『畑中高等学校』の刺繍とエンブレム。

「あ、ありがとう」観察癖のある私の反応は遅れた。

「どういたしまして」

笑うと、えくぼがくつきりと浮かぶ。

「ねね、緑高の人やよね。悪いんやけど、音楽室の場所を教えてくださいん？」

「えっと」

腕時計を見る。十二時半。

「緑高来るん初めてやの。誰か聞こう思ったんになんか、声かけられんくて」

転んだ私に見向きもしなかった三年生たちを思い出す。

「この学校でつかいし、どっから入るのかすら分からん」

うつすら涙目でこちらに向き直り、

「あたしね、ブラバンの練習で来てんけど、楽器忘れた子がおって取りに帰ったんやけどみんなとはぐれてしもうて」

左肩に担いだ楽器ケースを見せてくる。ショルダー付きの細長いケースが二つ。

「な、人助けやと思って」

押しに弱いのが私の性格。

「来客用の玄関はこっち」

ベージュと紺のセーラー服が畑高の制服ということを知り初めて知った。

「で、右に行つて突き当たると渡り廊下があるから、そこから隣の棟に移るの」

お互いスリッパへと履き替える。彼女の靴はローファーだった。

「単純な作りだよ。畑中高校の方が広いんじゃないかな」

物珍しそうに見回す姿に、一人で訪ねた夏を思い出す。マキに出会い、和貴に出会った。あの時の自分もこんな風に映ったのだろう

か。

「あたし、二年やのに未だに迷うもん。音楽室は分かるけど、化学室とかヤツバい。一人でうろつけん。セクション練習も絶対迷うし、友達に付いてくんよお」

「へえ、そうなのう……」

本気の困り顔を目の当たりにし、語尾は殆ど成り立たなかった。

口許を隠して話題を変える。

「楽器つて、何の楽器吹いてるの」

「あたしはピッコロ。フルートも吹くけど」

真っ先に緑色の大魔王が浮かんだ。

「フルートは知つとるでしょ。あれをもっと黒く短くした楽器」

今度は彼女が笑う番だった。

渡り廊下に出ると、楽器の音がちらほら聴こえる。本日三年生は、自宅か図書館で勉強するのだから。やや気の毒に思った。

「畑高つて、車で三時間もかかるんだよね。わざわざ来るなんて、練習か何かあるの」

「三月に合同演奏会があるんよ。その全体練習で、首を捻った私を見て説明を加えた。」

「東工も入れて三校。毎年緑川文化会館でやつとんの。クラスにブラバンの子おつたら、来月にはタダチケがバラまかれるはずだよ」  
「近くに見るとそばかすが可愛らしい。人のよさそうな子だと思った。」

並んで歩いていると、だんだん演奏が近付いてくる。

「音楽室は三階に……あ」  
階段の上に人影が。

「マキ」

立ち尽くす彼。

見開いた目は私ではなく、どこか遠くを見ていて、

「一臣」

振り向いた。

口許を押さえる彼女を。

「知り合い？」

再度笑いかけたけど、マキは聞いてなんかいなかった。

私など透けていないかのように、右眉を上げたまま小さく呟いた。

「……綾子」

『またまた、そんなこと言っちゃって。自分の彼女にしか一臣って呼ばせないくせに』

あの日、マキをからかった和貴の言葉が頭の中を響き渡っていた。

「な、蒔田どこおるか知らん？」

教室に顔を覗き入れる男子。

「あ……」近い。「宮本先生の手伝いしてるから、もう少ししたら戻らと思うけど」

和貴ばりの顔の近さに当惑しながら答えると、

「おおきに、都倉さん」

顎辺りのストレート。一重のシンプルな顔立ち。

誰だっけ。

友達みたいにフランクなトーン。私が首を捻ると、「ほな」と人のよさそうな笑みを浮かべ、去っていった。

「今の、坂田やよね」

「おわつ、脅かさないでよ」

今度は左サイドバックから声が飛ぶ。

私のびっくり癖にもはや小澤さんは動じず、

「あいつ、やっぱステージン時と全然変わるなあ」

「ステージンって？」

「あんだ、知らんが。一組の有名人」

呆れ顔のまま腰に手を当てて、

「The Red and The Black」

右手、左手を順に上げ、右手をグルグル回すあの振り付けを小さくしてみせた。

『坂田は……あの赤い髪の奴は俺と同じ中学なんだが』

気付いた時には立ち上がった。いた。

「私、帰る。じゃあね小澤さん」

返事を待たずに走り出す。

廊下に出ても、見当たらない。

一組に行くと紗優に話しかけられたが、部活休むとだけ伝えて足

早に去る。

談笑する男子の間を縫って走り、再び四組の前を素通りすると勢い余り、角を曲がった。

その先には、

「都倉さん。探しとんのは、オレ？」

壁に預けた背を浮かせ、笑いかけた。

『稜子のことやろ、あれ』

学園祭の日、マキに話しかけていた彼が。

「オレはプリンアラモード。都倉さんはなにがええ」

「ミルクティで」

遠慮せんでええ、オレのおごりやから、などと言われても、遠慮しない訳には行かない。

以前に紗優と座ったカウンター席ではなく、入り口から左手の、仕切り戸で区切られた半個室で向かい合う。

「話があんのやったら、学校やとんやし」

誘いに応じ、『よしの』までのこのこ付いて来た。

どうやらお店の皆さんと顔馴染みらしく。

そもそも、ウエイトレスさんが来すぎなんだけど。これで五人目。

私の白い眼に気がついたのか、会話を終えると白い歯をこぼした。

「堪忍な。話あってんろ」

「話っていつか……」

改めて問われると。

学園祭であなたとマキの話を立て聞きまして。

話に出ていた稜子さんに偶然お会いしまして。

マキとどうい関係か知りたいだけなんですよ。

あなたを追いかけたのは発作的なものでして。

なんせ気になって仕方ない仕方ない……

なーんて、

言える訳ないでしょうが。

本音と理性が喧嘩をしている私を、テーブルに頬杖を付いて悠然と眺めている。

その顔には黒縁眼鏡が。

生徒玄関を出る直前に、タスクがするようなダサイそれを装着した。バンドで異彩を放ったボーカルとはまるで別人。

「それ、伊達なの」

やっと出た言葉がそれだった。

「なんやて？」

「眼鏡が」

眼鏡のずれを直すふりをすると、彼は「そや」と言って口端を緩めた。

「外で見られたない時もあるんや。たまにファンの子に追っかけられっし」

と言われても、地味で冴えない男子高生にしか思えないのだが。

「ああ、信じられへんて顔しとる。ほな」

前髪をかき上げて額を露わにし、顔を斜めに傾けて鋭い目線を作る。

「化粧して頭整えつとまるきり変わるで」

「なるほどね」

前髪と表情だけで一変したので、私は納得した。

その時、ウエイトレスさんが注文の品を運んできた。

頬を赤らめながら彼ばかり見ている。今の彼を通して、目映い光を放つ彼を見ているのだろう。

「バンドって、中学からしてたの」

山盛りのプリンアラモードを食べ始める姿は、これまた赤と黒の彼からは予測もつかない。

甘党なんだ。意外。

「しとつたけど、あのバンド組んだんは高校からやで。元々アイデアはあってんけどな」

相槌を打ちつつ、角砂糖を紅茶の中に落とす。赤茶色の中をゆら

り溶けていく。

「赤と黒いうんは、男と女をイメージしたんや。思い通りにいかん恋に、情熱や背徳」

つまりは、スタンダールの『赤と黒』から名付けたのね。

「例えばな。蒔田と、柴村」

「しばむら？」

ミルクを注ぐと、

「稜子や」

手が止まる。

顔を上げれば、餌に食い付いた私に、してやっつたりの笑みを覗かせる彼がそこにはいた。

「中三のとき、初めておんなじクラスなつてな。蒔田に稜子とよー三人でつるんどつた。」

クラスであの系聴くんはオレと稜子しかおらんかってん。けどなあ、試しに蒔田にCD貸してみたら、あいつつ。むっちゃハマってしもーて」

当時を思い出すように肩を揺らす。

「カッコイイ系のビジュアルで俺様なボーカル。曲も思いきし好きなんをゴリゴリ。」

ほっとんど稜子のアイデアや。

高校は稜子だけ畑高選んでん。せやけど、オレらはそれぞれの道で気張るつて決めたんや」

「稜子さんは吹奏楽。坂田くんはバンド。マキは……サッカー」

「そや。春彦でええよ」

とプリンでスプーンを山盛りにな。

「二人は、想い合っていたの」

ほんの一瞬、こわばる頬。

「知りたいんはそこか」

見逃さなかった。そして、目を逸らさなかった。

「前にな。去年別れてん」

「……そう」

期待していた答えが返ってきた。

心にぽっかり穴があいたような感覚。知りたくない事実を受け入れるには時間がかかる。

「都倉さんは難しい男を選んでしもたなあ」

「何か誤解しているよ。選んだとか」

「気になるいうんは立派な恋なんちゃう」

優しく諭す目。

「坂田くんもさ」

「春彦でええって」

「稜子さんが好きだったの？」

それを聞くと、彼は愉快そうにプリンを頼張る。

「なぜに、そう思うんや」

「何となく。うちのクラスに坂田くんは全然来ないよね。それって、稜子さんと別れたマキに腹が立ったのかな、と思って」

「来とったよなんべんも。都倉さんは蒔田のこと、見とるようですよ見とらんや」

「影が薄すぎて気付かなかったよ」

「はは。自分おもしろいなあ」

ポケットからお札を出して立ち上がった。

「都倉さんと喋ったりしたいんはやまやまやけど、ぼちぼち時間やし行くわ」

「部活？」

「なんも。バンドの練習」

「千円は多いよ」

「誘ったんはオレや」

数歩進んで、後ろポケットに手を突っ込むと、

「オレも、宮沢さんと同じ美術部員やねん」

また愉快げに笑った。入り口でカウベルが鳴る。

空となったガラスの器と、千円札を二枚も残して。

「あ」

カマかけたのに、結局さっきの質問をはぐらかされた。  
気が付いた頃には、カップの紅茶が温くなってしまっていた。

「おはよう」

脱いだコートをロッカーに仕舞うと、

「真咲さん」

「うおわっ、びっくりした」

真後ろに和貴が。

「ちよつと来て」

何だか血相を変えた和貴。私の手首を掴むと、

「和貴？」

答えずに彼は引つ張っていく。

教室の角を曲がった所で止まった。昨日、坂田くんが私を待ち伏せた場所だ。

「ねえ、和貴ってば」

やっと振り向いた。

「手、離して」

「あ、ごめん」

慌てて解放する動作は、いつもの和貴だと思ったのだけど、

「どうしたの」

子リスでも猫でもなく、普段とは違う雰囲気。

「昨日、坂田と帰ったんだってね」

「うん。面白い人だよね」

場を和ますつもりで私は笑顔を作った。

けど、顔を上げた和貴は、あの日以来初めて見せる怖い表情をしていた。

思わず後ずさると、後ろの壁に行き止まる。

「そんな顔、和貴には合わないよ」

「坂田には近づくな」

バァンと響く音。

少しの恐怖で身がすくむ。

和貴が、私の横の壁を叩いていた。

静寂を破るひそひそ声。腕越しに、廊下を通る男子たちと目が合った。

「あいつは遊び人だから、……気をつけなよっ」

焦った様子で和貴は言い直す。

「何よ、それ」

無性に腹が立ってきた。

「いい人だったよ。それに、そんなのどうだっていいじゃん」

何でそんなことを言われなきゃならないの。

「どうでもよくなんか、ないっ」

「紗優だつて遊び人とか言われてるけど、いい加減な子じゃないよ。和貴の方がそれ分かってるでしょう。だいたい、和貴だつて中学の頃女の子と遊んでたんでしようっ」

「ちゅ、中学つて。僕の話を誰から。あ、あもっ、いまは僕の話をしてるんじゃないっ!」

「痛い所突かれたからつて話逸らさないですよ。本当なんですよ!」

互いにヒートアップしていた所を、

「あのおー、お二人さん」

第三者の声に、素早く右を向く和貴。

「お取り込み中のとこすまんけど、これ。蒔田に渡しといてくれんか」

恐る恐る目線を追うと、坂田春彦が気だるそうに壁に凭れていた。「リーディングのノートや。あいつ、いいつもギリギリやし。ほな、頼むで」

和貴は黙つてノートを受け取る。

「おま、人のこと言えんやろ」

鼻を鳴らす坂田くんは、やっぱり聞いていたようだ。

「僕じゃなくて、坂田の話をしてるんだつてば」

「『百人斬り』がうっさいわ」

「海野の坂田こそ『女泣かせの坂田』で有名でしょ」

「緑中りょくちゆうで名を轟かせたお前に言われたあないわ。普段は苗字ななやのにアノ時だけ下の名前で呼ぶってホンマかいな」

「うるさいっ。坂田こそ、関西弁とライブン時のギャップをウリにしとるくせに」

「あの一」

「なに？」

「なんや」

二人とも割り込まれた苛立ちに満ちているが、

「どいてくれませんか」

背後には壁。

右には壁に付いた和貴の左腕。

正面は和貴で、左に坂田くん。

長々続きそうな話し合いをやめて、そろそろ解放して頂きたかった。

「ごめん」

「堪忍な」

後ずさる動作があんまりにも鏡映しで。

「和貴と坂田くんは似てるね」

「似てない」

「せやから春彦やて」

同時に返されたものだから、ふふつと笑いがこぼれ出る。

「過去に何があるうと、和貴は和貴だから」

彼らを残して歩き始めた。

「それは、蒔田もおんなじやで」

背に呼びかける、坂田くんの声。

「せやけど気になってまう、それが恋ちゆう」

私が振り向くのと、和貴が坂田くんの頭を叩くのが同時だった。

「いってーな。おま、なにすんねん」

「不粹なこと言う奴は馬に蹴られて死んじまえ」

「なにを抜かす。オレは」

また始まった。

付き合ってられない、と肩を竦めつつ教室に戻った。

その後も、言い合いは続いたようだ。

一限目の授業が始まる直前、慌ててノートを渡した和貴は持ち主に「ぶっ殺す」と言われていたから。

言葉の悪い彼に、和貴が頭をかいて困り笑いを浮かべていた。

それから更に数日後。二月に入ったばかりの日のことであった。

「茉莉奈、あ、都倉さんも。これ、演奏会のチケット。よかつたら  
お昼を終えて立ち上がると、グループの一人に呼び止められた。」

「もうこんな時期なんやな」

納得した風な小澤さんに、思い返す言葉。

『来月にはタダチケがバラまかれるはずだよ』

あの日、私は二人を残して家に帰ったし、あれからマキが稜子さんの話をするともない。私が聞くこともない。

でも、第三者には聞けるんだ。弱虫な自分。

チケットを受け取ると、日付に少し驚いた。

「三月、十四日。ホワイトデーなんだね」

「ヒンシユクもんやよなあ」と吉原さんよしよはからからと笑う。

「この三校合同の演奏会って、毎年開いてるの」

「合同つつより、ウチがメインで、東工と畑高はゲスト。ウチの

単独のは毎年」

「あんま畑高が演奏すつと、主役の座を奪われかねんやろ」

「んなこと言わんといてや」とややご立腹の吉原さん。

「どうしたの」

「あんた、知らんが。畑高はむっちゃ強い」

「ウチは毎年県代表で、よくて支部大会金賞。小編成と大編成って知つとる？」

私が首を振ると、

「緑高と東工は小編成。厳しい条件の大編成で、畑高は毎年全国出場。レベルが違い過ぎるんよ」

「レベルが違うって」

「なんて言うんやろ。日本のプロ野球と大リーグくらい」  
半端ない。

「全国で畑高は優勝したりするの？」

和貴も大好きな『SLUMDUNK』を思い浮かべる。

「優勝ってゆうか、金賞が一番凄いんだよ。今年こそ金かもなあ。毎年、海野の強い子が入部しとるし」

「海野って、中学の名前？」

「そ。去年は柴村が入ったし」

まさかとは思うけど。

「柴村、稜子……？」

「都倉さん、知つとるんね」彼女は笑顔で肯定した。「有名人やもんなあ。若干一年の時に、三年からピッコロとファーストの座を奪った天才。評判通り上手いんだよ。プロみたいで」

『あたし二年やのに未だに迷うもん』と迷い子の表情と今一つ結びつかないが。

「あんたもフルートなんやから褒めとる場合やないやろ」

小澤さんに背を叩かれ、吉原さんは、そうやね、と苦笑い。

「んならトイレ行ってくるわ。演奏会頑張りい」

「私も。吉原さん、ありがとう」

チケットをポケットに仕舞いながら、溜め息を知らず吐いていた。マキの好きだった人。

今も好きかもしれない人は、とても凄い人。

「バレンタインってチョコはあげるの？」

その日の部活中。紗優と二人きりになったお手洗いで聞いてみた。私の通っていた高校では、殆ど本命にしか渡さない。緑高ではどうなのか。男子の居る場所では聞きづらい。

「そーいや来週やもんな、バレンタイン」

ハンカチを口にくわえる紗優の右に回り、蛇口をひねる。

「十四日って土曜日やし、金曜に渡すんやろね」

「あ、そっか」忘れていた。

「緑高で一番チョコ貰う男、誰か知つとる？」

濡れた手を拭きつつ、知らない、と首を振ると、

「三年の高木先輩。体育祭で赤軍の応援団長しとった先輩ね。次が、和貴」

「和貴!？」

鏡の中の紗優は私を見つめ返す。

「その次が、マキ」

「マキ……」

チラリと視線をよこし、リップを塗る。色など足さなくとも、艶やかで綺麗だ。

「直接渡すと突き返されるのが怖いから、みんな下駄箱ん中に入れとくんよ。マキの下駄箱から、雪崩みたくチヨコがドバーツと落ちたん見たことあるわ」

またひと塗りし、上下の唇を合わせてぱっばと音を立てる。

うつろに眺めていた私は、愉快げな笑みにはっと悟った。

私の反応を楽しんでいる。

「紗優は、タスクとマキと和貴にはチヨコあげるの」

「さあねえー」

んがああ。

颯爽と歩き出す肩を揺さぶりたい衝動を堪えつつ、私は別の角度で揺すことにした。

「タスクに渡さないの、本命チヨコ」

「あたしは彼氏以外全員に同じチヨコやるんよ。溶かして固めるだけやけど、手作りはするつもり」

お手洗いを出て、踊り場から階段を上る。

「タスクにだけハートの形にするとか」

「真咲。タスクはそんなじゃない」きつ、と軽く睨まれるが、

「半年以上彼氏がないのは新記録だって自分で言ってたじゃん」

「男に飽きただけやよ」

苦笑いする他ない。

「それに、タスクみたいなのはタイプじゃない」

「意固地だねえ」

私は呆れた息をこぼす。

「意地になんかなつとらん。」

そもそも、タスクみたくぼっちゃり系なオタク、好きになるわけないやろっ!」

首だけ後ろに捻った彼女は、向こうの角から出てきた人物には気が付かなかつた。

「タスク」

私は声を上げた。

紗優が口を押さえて前を向くと、私を見つめてタスクは微笑んだ。

「上田先生を呼んでくる所です。行ってきます」

小走りで横をすり抜ける。

「タスク」

「……タスク」

続いて紗優が呼び掛けるも、何も答えない。

いつも穏やかに受け答える彼が。

タスクの背中が小さくなっていくのを、呆然と私たちは見送っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0187q/>

---

碧の青春【改訂版】

2011年11月14日01時46分発行